

FUJIKO



・前置き、主な登場人物

・前置き

舞台は日本、警察組織に新たな課が設立されることになる、主な業務内容は密偵活動、これまでの警察組織とは異質の存在であった。新しい課が立ちあげられた理由として、機密情報漏えい、テロを未然に防ぐためである。

名は`警備部暗躍係、別名は秘密警察。公安課の管理下のもと、日本版スパイ機関として日々活動することとなる。職員（エージェント）はほとんど本部（警視庁）にいたることがなく、日本各地の身近な場所に潜伏、潜入して生活している。

エージェントの一人、リカは女性だけで構成された大手劇団に所属していた。彼女が秘密警察の一員であることを知る者は限られていた。彼女は死と隣り合わせの日々を送り、葛藤しつつ、あらゆる危機や難事件に立ち向かうという使命を与えられたのであった。

・主な登場人物

リカ

本作の主人公、大手歌劇団の人気スターを務めて、裏では密偵として犯罪に立ち向かっている。舞台の世界で人気を博してきた彼女は、歌劇団創立百周年記念の年に退団することを決意した。今回、自分のディナーショーの最中に痛ましい事件が起きる。

鴉の眼編

サユミ

リカと同じ舞台人で三年後輩。普段はマイペースでおっとりした性格であるが、舞台に立つと別人となり、存在感がある姿を魅せる新時代のスターとして注目される。リカと同じく裏稼業で秘密警察として、密偵活動を行っており、今回、奇妙な事件に巻き込まれる。

ミチコ

リカの先輩劇団員で芝居、踊り、歌と三拍子そろった実力派、歌劇団の中でもプロフェッショナルが集まったグループに属している。リカは若手時代、彼女と共演し世話になっている。裏の世界では優秀な工作人員として恐れられている。

エリコ

真っ直ぐな性格で、悪役からコミカルな役まであらゆる役柄を演じることができる舞台人。最近では実力が認められ、ミチコと同じくベテランが集まる劇団員グループへと配属された。ま

た、裏の世界でもミチコたちと行動して日々、犯罪を撲滅している。

アヤコ

遅咲きではあるが、圧倒的な歌唱力を持ち、表現豊かな演技に定評がある歌劇団スター。普段でも男らしさが滲み出ており、男役に適している。サユミとは同期で頼れる兄貴分として彼女を陰から支えている。裏稼業では危険な任務を請け負い、優秀なエージェントとして成長している。

鴉の眼

謎の実験で覚醒した突然変異体。本名は不明。ある野望を胸に秘めてリカに興味を持ち、接触しようとする。彼には特に性別がないが、意外な経歴があり、リカたちは驚愕することとなる。

権藤芳雄

兵庫県、神戸市に本部がある遺伝子科学総合研究センターのプロジェクトリーダー。ある夜、ホテルの一室で何者かに殺害され、無残な姿で発見される。優秀な研究者として評された彼であったが、ある陰謀に関係していた。

不動義人

遺伝子科学総合研究センターのセンター長、権藤の一年先輩で、お互い共同チームで仕事していたようだが、途中意見が食い違い、チームは分裂して因縁の仲に、彼はあることを隠していた。

二階堂愛美

権藤の下でアシスタントをしていたが、急にチームから外れ、その後は不動の助手を務めている。権藤を尊敬していた彼女は、彼の死が気になり自らその要因を調べようとしてサユミに協力する。

安藤ユウ

秘密警察の捜査員の一人で、リカのパートナーでもある。とはいっても、彼の役割は主に情報提供や連絡係で、現場捜査や肉体労働はリカに任せている。チャライ印象があり、リカの舞台

を観劇することもしばしば。

アンジュ

リカの親友で現在、診療所を営んでいるが、以前はリカと同じ歌劇団に所属していた。退団後も多くの劇団員と付き合いがあり、患者は劇団員が多く、リカもよく利用している。

雨宮シズク

芸能部記者としてコツコツと働いていたが、リカとの出会いで人生観が変わり、今の仕事を辞めてフリーライターになろうと考えている。

緑の雫編

マミコ

舞台の世界ではダンス、演技が上手く、外見はクールに見えるが熱血系のイメージがあり、若手時代から人気を博している。念願叶い、歌劇団五十周年の年にトップスターに就任した。裏稼業では変装術を得意として、あらゆる場所に潜入して犯罪につながる情報を入手している。

ヒロカ

若手歌劇団員の一人で、マミコ率いる班で活躍の場を広げている。マミコとは、プライベートや裏稼業でも仲が良く、密偵活動では、マミコの忠実な部下として動き、彼女のサポート役の役割を果たす。

白谷文也

総資産百億円を超す関西の企業家の御曹司。彼はある犯罪に手を染め、リカたちに監視される。

第一章 鴉の眼編 序章 惨劇の夜宴

その夜は、うだるような暑さが去り、大気は安定しており、ようやく秋めいてきて穏やかだった。しかし、それは一気にかき消されようとしていた。

都内某ホテルの一室、スイートルームの広々とした空間に二つの気配があった。

一人は高級なスーツを着たビジネスマン風の男、もう一人は全身黒ずくめの薄気味悪い来訪者であった。

しばし二人の口論は続くが、男は恐怖に駆られ、青ざめた表情で目の前の黒ずくめと目線を合わせた。

「...頼む！命だけは...」

「.....」

命乞いする男であったが、黒ずくめは聞く耳を持たず、手を掛けようとしていた。

「.....く...来るな...」

男は恐怖で体が震える中、どうにか逃げようとするが、唯一の逃げ道である扉は、黒ずくめにより塞がれてしまっていた。男は抵抗しようと、周りの物を黒ずくめに投げつけ、奥の方へと移動した。黒ずくめは動じず、淡々とした表情で男の方へと近づき、じっと彼を睨んだ。

「...！」

男は抵抗しようとするが、それも虚しく腹部に鋭利なものが突き刺さった。

「.....！！」

重傷を負った男は、なぜか声を上げず、そのまま虫のように床を這い蹲っていた。そんな男の姿を見て、黒ずくめは表情一つ変えなかった。黒ずくめは苦しんでいる男にゆっくりついていき、止めを刺そうとしていた。

「...ドサ」

そこは残虐な殺害現場へとなり、もがき苦しむ男は、じき静かに息絶えた。

一仕事を終えた黒ずくめは、すぐ去ろうとせず、余裕があるようで、テーブルに置かれた洋酒の瓶とグラスを手に取り、ベッドに腰を下ろして寛ごうとしていた。

黒ずくめは洋酒一杯を口に含んだ後、部屋を物色し始めた。まず男の財布からお札やカード類を抜き取り、ブランド物の腕時計なども頂戴していた。

次に黒ずくめは、部屋に置かれた男のパソコンを起動させて、あるデータに目を通していった。それは極秘情報のようで、黒ずくめはそれをコピーしようとしていた。

目的を果たした黒ずくめは、扉の方へ向かわず、なぜかバルコニーの窓を開けた。心地よい風が部屋の中に入り、それと同時に黒ずくめの姿はなく、煙のように消えて闇に紛れた。その場には無数の黒い羽根が散らばっていた。殺害された男は、朝まで発見されることはなかった。

同じ頃、都内某ホテル 宴会場

そこでは盛大にディナーショーが開かれていた。その主役は大手歌劇団のスターを務めるリカであった。彼女は十五年以上、劇団に在籍しているが、ディナーショーは初体験で、じき退団を迎える彼女にとって最後のものとなった。お陰様でチケットは即完売でその場は盛大に盛り上がり、東京に遠征してからの最後のショーの日となった。

今回のショーは、リカの今までの舞台人としての軌跡が緻密に描かれており、長年ファンをしている者にとっては、懐かしさがあり、豪華なものとなった。またリカ自ら構成、演出に立ち会い、大いに力が入っている。

スポットライトを当てられ、ファンの方へと歩み寄るリカの姿は、まさに選ばれしスターの証であった。そして定番のアンコールショーも終わり...

「...本日は本当にありがとうございました...お気を付けてお帰り下さい！」

彼女は満面の笑みでしめて、温かい拍手に包まれ、記憶に深く刻まれ、集大成ともいえるショーとなり、夢の時間は瞬く間に過ぎていった。

リカやファンたちは、同じホテルで惨劇が起きたことをまだ知らなかった。その密かに起きた惨劇はまだ大きな災いをもたらす引き金にすぎなかった。また、ホテル付近にはさらなる怪しい影が潜み、何かを企んでいる様子であった。

「...クアークアー...」

その夜、何故か鴉の数が多く、まるで偵察機のように東京の夜空を飛行していた。

それは不吉なことを予兆するものであった。

第一章 鴉の眼編 第一話 漆黒の気配

東京 丸の内

東京の中心にそびえ立つ一流ホテル。普段ゆったりとした時間が流れているが、その朝はどうも慌ただしかった。

白手袋を身につけた厳つい男性たちが、ホテルの一室に向かっていた。彼らは警視庁の刑事で、他の宿泊客に悟られないよう慎重に現場へと向かった。鑑識などは変装して現場の一室に入室した。

現場を覗くとベッドに無残な姿で男性が横たわっていた。体の各箇所には切り傷があり、腹部には深い刺し傷があり、口には羽根のようなものが無理やり押し込まれており、まさに猟奇的な殺人事件であった。

「.....何もここまですることはないだろう...」

殺害現場には、遺体を見て深く溜め息をつく大柄の中年男性がいた。彼の名は重山典弘、捜査一課の警部であった。彼は遺体に手を合わせ、遺体の身元を部下の大林刑事に尋ねた。

「...名前は榎藤芳雄 四十七歳、所持品を調べると免許証の他にこんなものが...」

警部に手渡されたのは、写真付きの名刺であった。

「.....遺伝子科学総合研究センタープロジェクトリーダー.....本部は神戸...この仏さんはえらい科学者か...？」

「...ええ、スケジュールを調べると学会のために東京まで来たようです...学会が行われるのは今日の午後...」

「...室内はだいぶ荒らされているが、犯人の目星は？」

「...財布からはお金やカード類、金品などが盗まれているので、物盗りの犯行かどうか捜査を始めるつもりですが...」

「...なるほど、それにしても酷い殺し方だな...犯人は明らかにいかれている.....凶器は見つかったか...？」

「...いえ、発見されていません...それに羽根で口を塞いだことによる窒息死という場合も...」

「...いいや、この羽根は見せかけだよ、死因はやはり腹部の刺し傷.....部屋を荒らしたのもカムフラージュかもしれない.....身内の犯行かもしれないし...学会に参加する者も調べた方がいいかもな...あと彼の同僚に恨みがある者が居るかを.....」

重山は、ベテランの勘で部下たちに的確に命令した。

「...警部、こちらホテルの支配人です...」

「...まだ動揺されていると思いますが、詳しく話してもらえますか？」

「.....はい、今朝、榎藤様をモーニングコールで起こそうとしたんですが、応答がなく、心配になって部屋に駆けつけました.....そして...お客様の変わり果てた姿を目にして...」

「...遺体を発見したのはあなたですか？」

「...はい、それと従業員一人です...榎藤様は東京出張の際、いつもここに宿泊して下さる大事な常連なので、責任者である私もついて行くことにしました...」

「...予約はいつもスイートルームを...？」

「...はい、いつもこの部屋です...」

「...昨夜、彼は誰かと会う約束などしてましたか？」

「...いえ、そのようなことは聞いておりませんが...」

「...ホテル内の監視カメラの映像を確認したいんですか...」

「...はい、確認できる警備室までご案内いたします...」

重山は首を横に振り、部下数名に警備室に行くよう命じた。

「...！」

その時、警備室に向かう捜査員とはすれ違いに一人の男性が殺害現場に入ってきた。

「...何だ？あんた...ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ！」

「...ん？」

勝手に入ってきた男は、とぼけた顔で大林に応答した。

「.....彼は構わんよ、身内だ...」

「...警部？」

「...どうもお招き感謝します...よろしく」

「彼は何者です？」

「.....公安課に所属している...安藤刑事だ...」

「！...あの秘密警察の...でもなぜ？管轄が違うでしょう...？」

「...偶然、俺もここに宿泊していてね...どうも物々しいんで見物に来たわけで...殺しですか？」

「...これを見れば分かる...」

安藤はそっと被害者の姿を覗き込んだ。

「...化け物にでも襲われたんですか？」

「...れっきとした人間だと信じたい...ここまでした目的はまだ分かんが...」

「.....！」

その時、何かに気づき、安藤の顔は強張った。

「...どうした？」

「...この仏さん、見覚えが...！」

「え？それは本当か！？」

「.....ええ、確か今追っている事件に関連している人物に似ている...！ガイシャの身元は？」

「...権藤芳雄、優秀な研究員のようなが...」

「...やはりそうだ...何たる偶然だ...近くにいたなんて...！」

「.....日本国家を支える影のヒーローが聞いて呆れるな...」

大林が皮肉を呟くが、安藤は涼しい顔をしていた。

「...まだ捜査は始まったばかりなんでね...情報をかき集めている最中だ...それに現在、休暇中なんでね...」

「...く！」

大林は、安藤の発言に対し、不快な気分になった。

「...お前も先に警備室に行け、俺も後から向かう...」

「...は、はい...」

重山は邪魔者を追いだし、安藤と二人きりで話そうとした。

「...そっちは何を追っている？この研究員が何を...？」

「.....ある外国人犯罪組織を追っているんですが、この研究員との取引現場を目撃しまして...どういった繋がりがあるか調べているところでした...」

「...それは公表しない方がいいな...」

「...ええ、極秘捜査なのでできれば...」

「.....すみません、もう遺体運んでもいいでしょうか？」

「...ああ、いいぞ、運搬用のエレベーターを利用して裏口から出てくれ...」

「...はい、手筈通りに...それでは...」

権藤の遺体は搬送袋に移され、鑑識が通路の気配を気にしながら慎重に運んだ。

安藤と重山はまだ現場に残っていた。

「...それで犯人の搜索は？」

「.....それなんだが、物盗りの線は薄いと考えている...とりあえず内部に怪しい人物がいないか洗うつもりだが...」

「...確かにこれは物盗りの犯行ではないですね...いろんなことを誤魔化している...特にこの部屋中に散らばっている黒い羽根...どうも引っかけますね...？」

「ああ、被害者の口の中にも同じ羽根が...作り物じゃない...これは本物の鳥...鴉の羽根のようだ...」

「...鴉？部屋にそんなものが？」

「...さてな、鴉が犯人だなんて報告書に書けば間違いなく首が飛ぶ...深く考えない方がいいかもしれない...」

「.....あの窓は開いていたんですか？」

安藤は周りを見渡し、バルコニーの方に目が入った。

「...そのようだ、扉を開けると風がよく通ってたらしい...気になるか？」

「ええ、まあ...」

「...色んなことに首を突っ込むところは変わってないな～お前はもうこっちの人間じゃないんだぞ...」

「...すみません、つい...よくあなたに叱られたことを思い出しました...」

安藤は、元々捜査一課の刑事で今でも上司の重山とは親しい仲であった。

「...そっちの仕事はきついかな？」

「ええ、落ち着かず眠れない日が続くことも...睡眠薬が手放せません...」

「...そういえば少し痩せたな...ちゃんと食ってるかな？」

「...はい、昨夜も豪華なディナーを...」

「...朝食はまだかな？奢るぞ」

安藤たちは雑談しながら監視設備がある警備室へと足を運んだ。

「...警部、怪しい人物が！...あ...！」

大林は安藤と目が合い、嫌そうな顔を浮かべた。

「犯人が映っていたのか...？」

「...えっと、はい、これを見てください！すみません、お願いします...」

大林は、警備員に気になる映像を出すよう指示をした。

「.....これです、時間は二〇時三四分...被害者が宿泊していた部屋に来訪者が...！」

「どれ.....こいつかな？全身黒ずくめでよく分からんが...」

「...残念ながら顔は分かりませんが、間違いなく、この黒ずくめが犯人です...」

「...体型は中肉中背...男か女かさえ分からん...どう思う？」

重山は、他の部署の安藤に意見を求めた。

「...これでは何とも言えませんね...計画的な犯行かと...監視カメラのことを知っていて、人目に晒さないようにしているかもしれません...」

「...そうだな、相手はかなり手強いな...」

「...さらに不可解な点があります...」

「...何だと？」

すると、大林はまた警備員に指示して、映像をコマ送りさせた。

「...これは？」

「お気づきのとおり、この後、部屋を出入りした形跡がありません...今朝、支配人たちが訪れる時までずっと...」

「...こんなことがあったまるか！黒ずくめは何処に行った？」

「...不明です、一体何処に？」

「質問しているのはこっちだ！見落としがあるのでは...！」

「...そんなことはありません！もう何十回も見直しています！奴は突如姿を消しました！」

「...奴は幽霊だったと言いたいのか？もうファンタジーはこりごりだ...」

重山が苛立つ中、安藤は冷静に分析しようとした。

「...確かバルコニーに通じる窓が開いたままでしたよね...？」

「...ああ、それがどうした？」

「...窓に被害者の指紋は？」

「...え？」

安藤は大林に質問を投げかけた。

「答えてやれ...」

大林は、重山の命令で仕方なく質問に答えようとした。

「...権藤の指紋は検出されていない...バルコニーに近づいた形跡はないようだ...」

「...成程、では窓を開けたのはやはり彼を殺した犯人...ということに...奴はバルコニーから脱出した...！」

「！！」

安藤のとんでもない発言で、重山たちは哑然としていた。

「...はあ？何を言い出すかと思えば...バルコニーに出てどうやって逃げたって言うんだ？高さは百メートル近くあるんだぞ！」

大林は、完全に安藤を馬鹿にしていた。

「...安藤、ちゃんと説明できるんだろうな？」

「...ええ」

安藤は、自信ありげな表情を浮かべて、率直な意見を述べた。

「さっき言った通り、これは計画性がある犯行...証拠は残していないでしょう...身内の犯行だとしても、何も直接手を下すこともない...プロを雇った可能性もある...」

重山たちは反論せず、頷きながら安藤の話を聞いた。

「...それで犯人はどうやって逃げた？」

「...そう急かさないで下さい...はつきりとしたことはまだ分かりませんが、方法はいくつかあります...ロープのようなものを降ろしてそれを伝っていく...ただこれは目撃されやすいし、手間が掛かるので却下...後は空に逃げるしか...」

「...犯人に翼が生えていたとでも？」

「...大林！」

重山は、茶化す大林に叱咤した。

「...それは案外当たっているかも...例えばパラシュートを使ったとか...」

「...うーん、それだとかなり目立って目撃者がかなり居るはずだが...」

「...ええ、パラシュートだとすぐ地についてしまう...でもハングライダーなら長時間、空で待機出来る...」

「...馬鹿馬鹿しい、想像上の話だ...」

「ああ、でも犯人が幽霊だというのより現実味があると思うが.....」

「ああ？」

重山は、安藤と大林の子供染みた喧嘩に頭を抱えて呆れていた。

「...とにかく総力を挙げて犯人をあぶりだす...安藤、悪いがお前は部外者だからここまでだ...我々で捜査を続ける...何か関連性のあるネタが入れば後日教えよう...」

「...はい、すみません、出しゃばって...性格なもので...それでは退散します」

安藤は、未練を残さず、素直にその場を去って行った。

同ホテルの宴会場では、大きなイベントが終わった後で片づけをしていた。剥がされたポスターには現実離れした美しい人物が映っており、安藤はその人物をよく知っていた。

「.....昨夜は本当に良かったな～目の保養になった...人は上手く化けれるもんだな...」

安藤は、ブツブツと呟きながらホテルのチェックアウトを済ませて、玄関先でタクシーに乗り込み、何処かに消えて行った。

それから無事に最初で最後のリカのディナーショーが終わり、二日経った。

その日はリカの誕生日で、自分へのご褒美にと旅行を計画していた。旅行先は、海外でロサンゼルスとラスベガス十日間の一人旅。普段あまり海外に行く機会がなく、海外の舞台を観て、視野を広げるために彼女は計画していた。久々の長期の休みが取れて、リカは心の底から喜んでいた。

現地に着き、自分のペースで観光名所を巡って記念に写真を撮り、ラスベガスでショーを観たり、貴重な時間を体験していい気分転換となったようであった。そして楽しい時間はあっという間に過ぎて、彼女は帰国した。帰国後、リカには仕事があったが、それは舞台の仕事ではなかった。初の写真集の発売が決定され、彼女は撮影のため沖縄へと向かうことになった。

沖縄は神秘的な島国で、日本の自然の美しさが鮮明に残っており、リカはそんな景色に溶け込んで自身も感動していた。彼女は、撮影期間を仕事だと感じず、かなり楽しい時間を満喫しているようであった。

リカは、トップスターになってからハードスケジュールとなり、多忙を極めて全く落ち着く暇がなく、息詰まることもあったため、リフレッシュ出来たようであった。

それから数日後...

都内の某展望レストラン、レストランフロアの空間は円柱で少しずつ床が回転し、三六〇度、景色を見渡せるようになっている。

その夜、リカはある人物と食事をする約束をしていた。その人物の名は雨宮シズク。元芸能専門の記者である。どういう因果か、雨宮がスクープを掴もうと、歌劇団スターであるリカを尾行したのがきっかけで、いつの間にか仲良くなっていた。（※麗の章を参照）

雨宮は特別にリカのディナーショーに招待され、さらには別日に食事まで誘われていた。

「...本当にチケット譲ってくれてありがとうございました、ディナーショー楽しかったです！」

「...それはよかった、初めてだったんで不安がありましたが...」

「...貴重なものを見せてもらいました、ファンなり立ての私にも充分良さが伝わりましたよ！」

リカは雨宮に褒めちぎられ、頬を赤く染めていた。

「...最初で最後ですからね...心残りが無いよう精いっぱいやったつもりです...」

「.....もう辞められるんですね...勿体ないですね、多くのファンがそう思っているでしょう？」

「.....ええ、でも決めたことですから...次の公演に歌劇団人生の全てを注ぎます...」

「...それは楽しみです、必ず観に行きます！」

雨宮は、ファンも羨むようなひと時を過ごしていた。

「.....初めに会った時より表情がよくなりましたね...あの時は怪我人だったこともあるし...」

「...ええ、本当に命拾いしました...運が悪ければ死んでいたかも...」

「...最近やたら物騒ですから注意してくださいね...」

「...ありがとうございます、あなたを尾けなくなってから平和そのものですよ...」

食後のコーヒーを啜り、雨宮の冗談を交えながら会話は弾んでいた。

「.....仕事の方は順調ですか？」

「.....」

その時、雨宮はリカの何げない質問に対し、急に口を閉ざした。

「...どうしました？」

雨宮は表情を変えて何かもの言いたげであった。

「.....実は今の仕事...辞めようと思うんです...」

「...え？」

リカは、雨宮の突然の発言に驚愕していた。

「...今の仕事にやりがいなくて...向いてないみたいです...小さな職場だし、不満もたくさんあるんで...」

「.....それで...辞めた後、どうするんですか？」

「.....色々と考えましたが...まだ結婚する気もないし、地元に戻る気もない.....また一からやり

直そうと思います…」

「…何かプランが？」

「……フリーの記者になろうと考えています…大変だろうけど組織に縛られることはないし…報道関係の仕事に興味があるんです…」

「…そうですか」

「…偶然あなたに会えて、妙な事件に遭遇したのがきっかけかもしれません…見えない所で色々なことが起こっている…もっと視野を広げて生きて行こうと思いました」

「…もう吹っ切れたようですね、だから別人に見えたんだ…」

「…ええ、もうあなたにはどんなに感謝しても感謝しきれません！」

「…私は何もしていませんけどね～…」

リカは、雨宮の歓喜の言葉に対して愛想笑いをする事しか出来なかった。

「…リカさんこそ退団した後、どうされるんですか？」

「…え…特に何も……マイペースなもので…」

「近頃、退団しても仕事続けてる方多いですよ～リカさんも続けてほしいです…」

「はは…」

リカは愛想笑いで誤魔化し、まだまだ会話は尽きないが、夢の時間はあっという間に過ぎようとした。

「……どうも遅くまでお付き合いありがとうございました…一生の思い出にします！」

「……はは、大袈裟だな……今夜の食事は新たな一歩を突き進む前祝いだと思って下さい…まあ無理せず頑張って！」

「…はい、今度ご馳走させてください！私も応援しています！」

雨宮は、リカに元気よく手を振り、そこで別れた。リカは彼女とは反対方向の道を歩き、帰宅しようとしていた。

「.....♪」

その時、リカのスマートフォンに着信が入った。誰か確認するとリカの表情は一気に険しくなった。電話を掛けてきたのは安藤であった。

「.....もしもし？」

「...僕だ...今大丈夫か？」

「...ええ、丁度用事が済んだから...」

「...もうしばらく、表の仕事はないだろう...そろそろ本格的にこっちの仕事を手伝ってもらうぞ...」

「...分かってるわよ、明日帰るから...」

「...明日帰るんだな...？じゃあ迎えに行く...新大阪駅で待ち合わせだ...」

「...え？今都内じゃないの？」

「...ああ、出張で神戸だ...」

安藤は、神戸の警察署から電話を掛けていた。

「...もう早速労働させる気ね...」

「当然だ、こっちも大事な仕事だからな...汗水鼻水垂らして頑張ってもらうぞ...」

「...で今度はどんな件？」

「...殺しだ」

「え？それって管轄違うんじゃない？」

「詳しいことは現地で話す...それじゃあまた...」

「...あ、ちょっと...！？」

安藤は愛想悪く内容を告げて、電話を切った。リカは首を傾げた後、群衆の中を縫うようにして歩き、その場を後にした。

翌日、予定通り帰還したリカは、指示通りに新大阪駅で安藤と待ち合わせをした。待ち合わせ場所のロータリーに向かうと、クラクションを鳴らす車がりかに近づいてきた。

「...乗れ」

安藤は、車の窓を少しだけ開けて渋い声でリカを迎えた。リカは、無言のまま荷物をトランクに積んで助手席に腰を下ろした。

「...それじゃあ行くか...」

安藤は、すぐに目的地を告げず、車を発進させた。

「...サービスの悪いドライバーね、これからどうするの？」

「...現場に直行してもらおう...今日は泊まりになるかもしれん...」

「...え？そんな...そういうこと早く言ってよ！」

「...宿泊地は予約してある...ホテル住いは慣れているだろう...？」

「...そういう問題じゃないわよ...全く、詳しく訊かせてもらいましょうか？」

すると、安藤は自分のスマートフォンをポケットから出してリカに手渡した。

「...数日前、都内のホテルの部屋で遺体が発見された...観れば分かるが惨いことになっていた...猟奇的殺人事件として捜査中だ...」

スマートフォンの画面を見ると、殺害現場の写真が何枚も写っていた。それは捜査一課の元上司に頼み込んで譲ってもらい、保存したものであった。

「.....何でまたこの事件を？公安課は暇なの？」

「...いいや、そっちの件にはノータッチだ...ただこっちの追っている件と絡んでいてね...情報を提供してもらった...興味があるのは犯人ではなく、被害者だ...」

「...この無残な姿になった仏さんの正体っていうのは...」

「...遺伝子を専門にした偉い先生だ...ただ裏ではかなり危なげなことをやっているようだ...ある外国人犯罪組織を追っているんだが、その取引相手がその被害者だった」

「彼はどういう取引を？」

「...さて、詳しいことはまだ分かってないが...この研究員は、高額の金を受け取っている...このことが表沙汰になれば、たちまち波紋が起こる...！」

「...今のところは大丈夫なのね...？」

「...ああ、極秘で動いているからな...マスコミに嗅ぎつけられないよう慎重に捜査している...何としても真相を突き止めなければならない...」

「順調.....なのね...？」

安藤は、リカの言葉に対して頷こうとしなかった。

「...そうとも言えなくなってきた...ここ数日で研究員が三名犠牲になった...！」

「...連続殺人...！犯人の手掛かりは？」

「難航しているようだ...恐らくプロの犯行だろう...主犯は別に居ると推理していると僕は推理する...犯人探しは専門の課に任せて、こっちはやることもある...」

「...私たちは何を...？」

「...僕たちはまず殺された研究員たちが何をしていたかを調べる...」

「...それで何処に向かってるの？」

「...神戸だ、殺害された研究員が勤務していた研究所がある...しばらく寝てていいぞ...」

「.....いいわ、それよりあんたの方が心配よ...だいぶお疲れのようね...？」

リカの言う通り、安藤は声に張りがなく、目を何度も擦り、顔色も悪かった。彼はかなり疲れている様子であった。

「...手掛かりを掴もうとすると、死体があがるんでね...たらい回しにされた挙句、他の課と鉢合わせして変な空気になる...その繰り返しだ...ここ数日ろくに眠れてない.....アスピリンとか持っているか？」

「...どうしてそんなものを？持っているわけないわ...」

「...頭痛が酷くてね...睡眠薬と常備しているんだが.....！...おっと助けの船だ！」

安藤はチェーン店の薬局に目が行き、彼にとってそれは楽園に見えた。

「もう重症ね...病院に行けばいいのに...」

安藤は、リカの呆れ顔を気にせず、買い物籠にあらゆる薬品を詰めて、スタッフに色々と訊いていた。リカの方は、化粧品コーナーで時間を潰していた。

「...おい、今日はお泊りだ！歯磨きセットでも買ったらどうだ？」

「...要らないわ、そんなもん！買い物済んだんなら早く出る！あんたと居ると恥ずかしいわ！！」

リカは他人の振りをして、先に店を出た。再び神戸を目指す安藤たちであったが、リカは強引に運転席の方へと向かった。

「...これはどういうことだ？」

「...私が運転するわ、あんたと事故りたくないから...しばらく寝てて...」

「.....そうか、じゃあ今回はお言葉に甘えて.....」

安藤は、素直にリカの言うことを聞き、助手席へと回った。

「...ほんじゃあ行きますか～」

「.....じっとしているとしんどいな～もう何ヶ月も働いているような気がする...お前のディナーショーに行ったのは、つい最近のはずなのにな～...」

「...本当によく顔出すよね...何か嫌なんだけど...」

「そう言うなよ...こっそり行っているからいいじゃないか～」

「...表の世界では、私の目線に入らないでよ...」

「分かった、分かった、もう寝るから高速を下りたら起こせ、また指示をする...」

「了解、それじゃあ、ゆっくり休み～」

リカは、車を発進させて、一定の速度で運転して高速道路に入った。

久々にリカと安藤はコンビを組んで事件を捜査するわけだが、それには陰謀が渦巻いており、危険極まりないものであった。

第一章 鴉の眼編 第二話 疑惑の研究所

時間は正午過ぎ、リカたちを乗せたレンタカーは兵庫県、神戸市に着こうとしていた。高速を下りて、リカは久々の運転に少々くたびれた様子であった。役目を果たした彼女は、横で気持ちよさそうに寝ている相棒を叩き起こそうとしていた。

「.....あ？着いたか...？ご苦労さん～」

目を覚ました安藤は、腕を伸ばして気分を良くしていた。

「...でここからどうするの？」

「...飯時だが先に用を済ませる...さっき言った通り研究所に向かう...とりあえずこれを駐車場に停めよう...」

リカは、安藤の指示通りに駅前にある駐車場まで走らせた。

「...行くぞ」

リカは安藤の言われるがまま、ある場所を目指していた。

ポートアイランドは、神戸市中央区神戸港内にある人工島。神戸大橋及び湊島トンネルによって神戸中心部と結ばれ、都市機能を一通り備える。神戸の有名大学が開設され、医療機関、研究機関も充実している。

ポートアイランド線は、三宮駅から、ポートアイランドにある中公園駅、市民広場駅を経てポートアイランド沖の神戸空港駅に至る路線と、市民広場駅から分岐して北埠頭駅を経て中公園駅に至る路線から構成されている。愛称はポータルライナー。

リカたちは、ポータルライナーを利用して研究所に向かおうとしていた。ポータルライナーは、無人運転で静かに走行していき、窓から外を覗くと未来都市のように様々な施設が建ち並んでいた。

リカたちは遺伝子科学総合研究センターの最寄駅で降りて、研究所内に足を踏み入れようとしていた。

「...すみません、あなた方は？」

リカたちは、早速、出入り口前で警備員に止められた。

「...警察の者です、こちらの研究員が続けて殺害されているんでその件で来まして...」

安藤が警察手帳を見せ、事情を説明した。それに対し、警備員は無線で内部と連絡を取り、しばし通行許可を待った。

「...！」

その時、リカはあることに気づいた。

「...お待たせしました、通って構いません、奥の受付にどうぞ...」

「どうも」

リカたちは、受付に待つように指示され、エントランスの椅子で待つことにした。建物内を見渡すと筒抜けて広々としていて静かな時間が流れていた。

「...お待たせしました」

数分後、リカたちのもとに白衣を着た男性が一人現れた。

「あなたは？」

「...ここの責任者の不動と申します、御用は私が承りますが...」

「...ここの研究員が巻き込まれている殺人事件について、お聴きしたいことが...」

「...そのことなら先日、別の刑事さんに話しましたが...」

「...我々は別の角度から捜査しておりまして...殺害した犯人を捜しているわけではないので...」

「...はあ」

「...殺された研究員の方々ですが.....ある犯罪に加担している恐れがあります...

今回はその件で...」

「...！！」

その時、不動の表情が一変した。

「...心当たりは？隠しても無駄ですよ」

安藤は、鋭い目つきで不動を問い詰めた。

「.....分かりました、ちゃんと話すんで...場所を替えましょう...案内します...」

不動は強張った表情のまま、二人を先導した。

エレベーターを出ると、分厚い窓で覆われた大部屋がいくつも存在し、その中で、防護服を着た研究員が何やら作業していた。

「...へえ、皆せっせとやってますね～どういった研究を？」

「...申し訳ないが企業秘密のため言えません...今回中に入れたのは特別です...」

「...ほんとすみませんね...そういえば、何とか細胞で騒動を起こした研究所も、この近くだったような...」

「...はい、優秀な研究機関ですよ.....こっちも負けていませんが...ただ少し分野が違うだけのことです...本当にあの研究所は残念なことをした.....」

不動は、ある研究所の不祥事を思いだし、渋い表情を浮かべた。

「...ほう、ここは遺伝子を専門に扱っているんですよね...具体的にどういった...？」

「...人の役に立つための研究...簡単だと、そうとしか言えませんね...なんなら講義を行います...が...」

「...いえいえ、無知だとばれてしまいますんで...今ので充分わかりました...」

不動は、安藤の発言にうすら笑みを浮かべた。しばらく通路を歩いていると、一室から白衣

を着たスレンダー美人が出てきた。

「...私は、プロジェクトリーダー補佐の二階堂と申します...ここから先はこの白衣とカードキーがないと入れません...規則ですので...」

二階堂は、研究所のロゴが入った紙袋から白衣を取り出し、リカたちに手渡した。

「このカードキーで、研究所の各箇所をある程度行き来出来ます、無償でお渡ししますが、帰る時にちゃんと返却して下さい」

「...やはり、こういった場所は警備が厳重ですね...ここまで来て、監視カメラをどれだけ目にしたか...」

「はい...後で、情報漏えい防止のための同意書に記入してもらいますので...」

リカたちは奥の応接室に連れられ、そこで聴取を取ろうとした。

「...では殺害された権藤氏について、色々とお聴きします...知っていることは全て話して下さい...」

「...はい、分かりました」

「...最近、彼に変わったことは？」

「...変わったことと言えば、研究に没頭していた彼が、珍しく定時に帰ることがあります...」

「...彼は、何と言って帰られるんですか？」

「...ただ急用があると...」

「一人で研究所を出ていますか？」

「はい、恐らく...」

安藤は、不動の表情や仕草を気にしながら聴取を続けた。

「.....もう余計なことは省きましょう...あなたは権藤氏の何を知っていますか？」

「...！！」

その時、不動は冷や汗を掻き、安藤から目を逸らそうとした。

「...不動さん？」

二階堂は、不動を心配そうな目で見ていた。

「.....権藤は本当に優秀な研究員でした...順調にエリートコースを進み、大きなプロジェクトを任せようになった...しかし、じき私の跡を継ぐと思われるその矢先でした...」

聴いているリカたちは、固唾を呑んだ。

「...ここでは医療、創薬の他に携わっているものがあります...それは軍事絡みのもので政府の要請で開発、研究を行っています...最近のことですが...」

「...軍事！それはどういった...？」

「...秘密事項なので詳しくは言えませんが、この先、自衛隊が戦争に巻き込まれるのを想定して備えるためのものです...非常に危険な研究です...何卒口外しないようお願いします...！」

「...あなた方は、それを快く引き受けたんですか？」

「...いいえ、はじめは引き受けなかつもりでした...しかし彼が...権藤がぜひやってみたいと前向きな姿勢で言い出したんです...普段、冷静な彼からは信じられない言動でした...」

「...それで彼が中心になって研究を...？」

「...はい、積極的に参加していました...そこからです...彼に異変が起こったのは...何かに憑りつかれたみたいで、別人のようでした...政府関係者と密会などして、我々の知らないところで、良からぬことを実行しようと考えていたようです...」

「...勿体ぶらないで教えてくださいませんか？どのような研究を...？」

「...それは言えません、こればかりは国家機密なので...」

安藤は、さらに真相を突き止めるために次なる手を考えた。自分のスマートフォンを取り出し、例の画像を不動たちに見せた。

「...ここに映っているのは権藤氏です、他にも研究者が...ほとんど殺されています」

「.....これってどういった現場の写真なんですか？彼らは何を？」

安藤は、不動たちの目をじっと見て、嘘をついてないかを見抜き話を進めた。

「...場所は都内の某高級クラブ、一ヶ月前に撮られたものです...一緒に写っているのは、我々が追っている外国人犯罪グループ...彼らに心当たりは？」

「あるわけないじゃないですか！！」

不動は、安藤の不愉快な質問に憤怒した。

「...本当に何も知らないようですね...失礼しました...」

「...やはり、彼は、何か事件に巻き込まれたんですね...？殺した犯人はまだ分からないんですか？」

「残念ながら...これといった手掛かりがないようです...我々は管轄が違うので、これ以上のことは言えません...」

「そうですか.....」

不動は、いい答えが返ってこないことを悔やんで俯いた。

「...組織絡みで今回の事件に関与していないことを信じたとして、あと権藤氏、殺害された研究員の仕事を拝見させてもらいたいんですが...」

「それは出来ません！研究室に部外者を入れるわけにはいきません！例えば警察でもね...」

「...本当に秘密主義ですね...では彼らの素性を知るために経歴書のようなものを見せて頂きたいんですが...」

「...経歴！」

「それくらいならいいでしょ？捜査のための材料に使うだけです...外部に漏らすことは絶対にしません...どうかご協力を...！」

安藤はリカと共に深く頭を下げて、情報提供を懇願した。

「.....分かりました、信じますのでちょっと待ってもらえますか？二階堂君、後を頼む...」

不動は研究員の資料を取りに行くため、一旦退室することになり、しばらくの間、部下の二階堂が対応することになった。

「それでは待っている間、こちらの書類の記入をお願いします...」

「...例の情報漏えい防止の書類だね～」

「...よく目を通してご理解の上、ご記入して下さい...」

「はいはい、しっかりしているね～美人だし...まだ若そうだけど...失礼だけど歳はおいくつ？」

「...27ですが」

「...ほほう、あなたも優秀な研究員なんでしょう？」

「...そんなことないですけど...」

「いや～タイプだわ～もし今夜、時間があれば、高級レストランで食事でもどう？」

「そんなこと急に言われても...」

安藤は、二階堂をナンパし始め、リカは、それを呆れ顔で見ていた。

「...安藤刑事、彼女、困っているんで止めてあげて下さい...」

「何だい？妬いているのかね？」

「...冗談が過ぎますよ...安藤...刑事！」

リカは怒りが込み上げ、安藤を殴りたい気分ではいっぱいであった。

「...全くせっかくいいムードだったのに...一人で来ればよかったな～ぶつぶつ」

安藤が愚痴をこぼす中、リカは何か落ち着かない様子であった。

「.....あのすみません、お手洗いにいきたいんですが...」

「はい、奥に進んでもらって突き当りの左に行けばありますので...」

「ん？どうした？馬鹿食いしすぎで大きいのがしたくなったか？」

「...違います、ほほほ」

リカは、安藤の冗談に苦笑いで返して退室した。

「.....研究所出たらぶっ飛ばす！」

リカは、下唇を噛みながら呟いた。彼女はすぐさまトイレに向かうが、それには他の目的があった。

一方、安藤と二階堂が居る応接室、安藤が書類に目を通していている中、二階堂は眉をひそめて安藤をじっと見ていた。

「...何か言いたそうな顔だね～」

「え？」

「さっきのデートの誘いの件ではなさそうだな...もっと重要なことだね...喋ってみなよ...」

二階堂は、安藤の優しい対応でひと決心して重い口を開こうとした。

「...あの...もし...権藤さんが殺害されてなかったら...逮捕していましたか？」

「...！」

その時、安藤は二階堂の発言に興味を持った。

「...彼は犯罪グループとつるんでいた...証拠も挙がっているしな...彼の口から真相を聴きだしたかったから...多分逮捕するだろう...仕事だからね...」

「...やはりそうですか...」

二階堂は、当然の答えが返ってくることを承知していながら、酷く落ち込んでいる様子であつた。

「...あなたは、権藤氏とどういった関係なんだい？」

「...単なる上司と部下です...権藤先生には大変お世話になりました...確かに彼は変わった一面を持っていますが、悪行に手を染めるような人ではないと信じていました...だからショックが大きくて...！」

「...成程、それはお気の毒に...確かにあなたの言う通り、彼が犯罪に加担しているとは思えない...だから、余計に調べる必要があると思うんだけど...」

「.....そうですね、どうか真相を突き止めて下さい...」

その時、少し納得したのか、二階堂の強張った表情は、消えつつあつた。それからしばらくすると、不動が研究員の資料を抱えて戻ってきた。

「...おや？連れの女性の方が見当たらないようですが...」

「ああ...多分大きいのを出すのに時間掛かってるんでしょう...」

「はあ？」

「...デリカシーがない男は最低ですよ、安藤さん！彼女ならお手洗いに行かれました...ちょっと見て来ましょうか？」

「そうだね、そろそろ我々も会議だから、お引き取り願いたいのでね...」

「...どうもすみません」

二階堂は、リカの様子を見に行こうと応接室を退室して、不動は、分厚いA4サイズの封筒を

安藤に差し出した。

「...安藤さん、これが権藤の経歴が載っている資料です...データは渡せないなのでコピーしてきました...」

「...わざわざすみません、事細かに載っているようですね...」

「...ええ、彼が指揮するプロジェクトチームのメンバーの経歴も載っていますから...その中に殺害された研究員も載っているので、何かの参考になるでしょう...」

「恩に着ます...」

「...必要なくなれば、そちらで責任を持って処分して頂きますか？重要な個人情報なので...」

「分かりました、約束します...！」

安藤は、リカたちが戻ってくる間、経歴書の一部に目を通そうとした。

一方、リカが居る場所は、トイレではなかった。彼女は研究所内を見回り、手掛かりになるものをこっそり探索していたのであった。

「...それにしても広い研究所ね...通路だけでも中距離走ができそう...」

そんな呆然として歩くリカの前に一つの扉が現れた。

「...あれ？おかしいな、開かない...」

渡されたカードキーが反応せず、リカは困り果てていた。

「...そこで何してるんですか？」

「！！」

その時、リカは表情に出さなかったが、仰天している様子であった。

「...二階堂さん...！」

「...心配しましたよ、戻って来ないんで...どうしてこんなところに？」

「...いや～私、極度の方向音痴でして...気づけばこの辺りに来ていました...」

リカは、どうにか誤魔化そうとした。

「...確かにここは何も目印がなく、だだっ広いから初めて来た人は迷いますよね～やっぱりついて行けばよかった...」

「...お騒がせしました、それにしても、ここは何処なんでしょうか...？この扉、開かないし...」

「...ここは第一研究所につながる渡り廊下です...ここから先は、一部の人間しか入れません...というか現在使われていません...」

「...何でまた？」

「.....責任者である榎藤先生がもう居ないので...閉鎖することになりました...」

「...そうですか.....」

「もう第一研究所を使用する権利があるのは、私と不動センター長くらいです...」

「...あなたのカード—キーなら、この扉を開けられるってことですか？」

「...はい、開けられますけど...」

「...今開けてもらうのって可能ですか？」

「...部外者を入れるわけにはいきません、規則ですのでご理解下さい...」

「はは...当然ですよ...もう忘れて下さい...」

「他の場所なら、後日案内しますけど...」

「...いえ、大丈夫です...もうお邪魔することないので...」

リカは、二階堂の誘いを丁重に断り、安藤が待つ応接室に戻ろうとした。

「おお、戻って来たか...」

「...彼女、道に迷っていたようです」

「全く世話が焼けるな...」

「すみませんでした...」

「...ではそろそろお開きということでよろしいでしょうか？」

「はい、色々のご協力感謝します、もうお邪魔することないのでご心配なく...」

「...そうですか、また何かあれば連絡してください...」

安藤たちは、不動から名刺をもらい、白衣とカードキーを返却した後、玄関先まで見送ってもらった。

「...さて今日はここまでだ...ひとまず引き上げるか...なかなか口を割らないが、かなりの情報が訊きだせた...それでそっちはどうだった...？」

「...ひとどおり偵察したけど...セキュリティーは厳重ね...何も異常は起きなかったけど、監視されていたみたい...彼女が現れたタイミングが良すぎるわ...」

「...不審な点は？」

「第一研究所という場所は限られた者しか通れないようになっている...かなり臭うわね...」

「...忍び込めるか？」

「...ええ、下準備は済ませてきたわ...」

「...よし、今夜は作戦会議だ...！」

リカたちは、あることを企てて研究所を後にした。

神戸市内、某高級ホテル

リカたちは、捜査対象の研究所の侵入を翌日に控え、最上にあるホテルで一泊しようとした。安藤が予約した部屋に入ると、荷物が大量に届いており、段ボール箱が山積みになっていた。

「...あいつが幸せそうに馬鹿食っている間に組み立てておくか...」

安藤は、嫌味を呟きながら作業を始めた。

一方、リカは、ホテル内のバイキングレストランで食事を満喫していた。

「...んま、ここの味は変わらないね～」

リカは地味な服装に着替えて、呑気に口を頬張っていた。山盛りに盛られた料理もマジックのように消え、全て彼女のお腹の中に入った。

「...あいつは何も食べないのかな～どうでもいいけど.....！」

その時、リカはあることに気づき、思わず食事を止めた。一人の客がリカとすれ違い、その客は、大きなレンズのサングラスをして、お洒落なソフト帽を深く被り、全身を黒で統一していた。特徴として、美人ではあるが、どうも近寄りがたい女性であった。ただ、リカは自分と同じ匂いがすると肌で感じていた。謎の女性は、一人で予約制の席に座り、すぐ立ち上がろうとせず、ワインを注文しそのまま座っていた。リカは謎の女性のことが気になり、さりげなく様子を見ていた。

「♪～」

その時、リカのスマートフォンに着信が入り、すぐに応答した。

「...もしもし？」

「こっちの準備は出来た...十分後、俺の部屋に来てくれ...」

「...了解」

リカは覇気のない声で、安藤の指示に応じてレストランを後にした。彼女はまだ謎の女性のことを頭から離れなかった。

リ力は指示通り十分後、安藤の部屋を訪れた。部屋の奥に進むと、最新の機材が並べられており、まるで秘密基地のような空間であった。

「...せっかくのスイートルームも狭く感じるわね...」

「...ちゃんと許可は取ってある...では早速始めるか...明日、研究所に潜入するわけだが、まず情報を整理しよう...まず今日会った二人...まずセンター長、不動義人 四十九歳、権藤の一年先輩で、共同チームで仕事していたようだが、十年前に意見の食い違いでチームは分裂した...」

「...例の軍事的なことが関わった研究ね...」

「ああ、不動氏は猛反対したが、上層部は権藤の意見を受け入れた...どうやら不動氏より権藤の方が優秀のようだな...表向きは権藤のことを心配しているように言っていたが、実際は、権藤の実力に嫉妬していたように思える...」

「彼はシロね...とても共謀しているとは思えない...」

「ああ...自分は無関係なという顔をしていた...聴取にも思ったより協力的だったからな.....資料をざっと読んだが、権藤のチームメンバーは皆、権藤の教え子...精鋭揃いだ...第一研究所は彼らが使っていたわけか...」

「...彼女も気になるけど...」

「...不動と一緒にいた美人研究員か...確か権藤のチームリストに載っていたな...二階堂愛美 二十九歳、三年ほど権藤の下でアシスタントをしていたが、途中から何故か不動氏の下で働き、彼の助手を務めている...彼女も若くして優秀だ...」

「...そのようね、第一研究所に立ち入ることが出来る数少ない人物よ...」

「彼女は、権藤を尊敬していながら、何故、彼から離れたか気になる...」

「...調べる必要がありそうね」

安藤は、研究所の機密情報ネットワークにハッキングし、研究所内の立体マップを開いた。

「...所有している施設は四棟...そのうち一棟は食堂や仮眠室、リフレッシュルームがあり

、残りは研究施設...中でも第一研究所は謎に包まれている...ここだけ見取り図が表示されない...」

「...直接、自分の目で確かめるわ...」

「バックアップは任せろ...必要な物は、大体揃っている...」

「...明日は忙しくなりそうね...」

こうして、リカたちは研究所の陰謀を暴こうと密かに動こうとしていた。

世は明けていき、運命の日を迎えた。安藤は宿泊部屋で待機していたが、そこにリカの姿はなかった。彼女は既に研究所に向かっているようであったが、勿論真正面からではなかった。現在、彼女が居るのは地下、古い地下水道から研究所の潜入を試みていた。

「.....ザ...ザザ...そっちの調子はどうだい？」

「...少し気分が悪いわ...黴臭いし、鼠がうようよ居る...」

リカたちは、無線で連絡を取り合っていた。

「...そこしかルートがないんだ...我慢してくれ...」

「...それで標的の方は？」

「.....待て」

安藤はリカの質問に答え、速やかにタイピングした。

「...彼女が居ないと話にならないからね～」

「...ちゃんと現場に居るぞ...反応も良好...心配ない...」

リカは昨日、二階堂に発信器を仕掛けていたのであった。彼女は、二階堂を利用しようとしていた。安藤は、リカと二階堂の発信器を気にしながらオペレート作業を続けた。

一方、研究員たちは何も知らず、いつものように作業に打ち込んでいたが、二階堂だけ不動

に呼び出されていた。

「...昨日来た連中、どうだった？」

「...思ったよりいい方たちでした...」

「...ふん、コソコソ嗅ぎまわっているのが気に入らん...例の件は無関係だ...何も公表する必要はない...彼が起こしたトラブルだ」

「...はい」

「...警察だろうと好き勝手にさせない...構うことはないぞ...」

「...分かりました」

その時、不動は二階堂の様子を見て、少し疑問に思った。

「.....一つ訊くが、君は何故彼の下から離れたんだ...？何か特別な理由が？」

その時、二階堂は表情を曇らせ、重い口を開こうとした。

「.....権藤先生は素晴らしい方です...ただ別の世界にいらっしゃる方なので、私はもうついていけないと判断しました...これが離れた理由です...」

「...そうか、確かに彼は変わり者だ...しかし才能がある...私など足元にも及ばない...しつこいが、本当に後悔してないな...？彼から離れたことに...」

「ええ、一つも後悔していません...！」

不動は二階堂の目を見て、嘘偽りがないことを信じた。

「...よし、閉鎖している第一研究所のことだが、権藤たちが行っていた研究履歴を全て抹消しようと思っていてな...あの研究所はリニューアルして、新人研修の場を設けるつもりだ...もう軍事関係からの要請は受けない、世間にいちいち公表する必要はない...我々は何も知らなかったんだ...いいな？二階堂君...」

「.....はい」

素直に応じた二階堂であったが、何処となくぎこちなかった。

一方、リカは研究所の侵入に成功し、通気口を静かに匍匐前進していき、慎重に標的に接近しようとした。

「.....彼女が居るのは第二研究所の通路...センター長室から移動中だ...」

「.....監視カメラがない場所は？」

「トイレのみだ...他に死角になる場所は見当たらない...」

「...待つしかないわね」

リカは、仕方なく二階堂がトイレにやって来るまで、天井裏で待つことにした。

「...！リカ！」

持久戦覚悟で構えていたリカであったが、運は彼女を味方にした。二階堂はリカが待つトイレに向かっていたのであった。

「...色々策を考えていたんだけどね...これは手っ取り早い...」

リカは、すぐさま二階堂の頭上で待機しようとした。二階堂は個室に入って便座に腰を下ろした後、携帯端末を取り出してメールの確認をしようとした。

「.....どうした？」

「...しっ！」

リカは、二階堂の動きに注目した。二階堂は深刻そうな顔で、黙々とタッチ操作をしており、潜むリカに重い空気が伝わっていた。メール内容も気になるところだが、リカは二階堂がタッチ操作を終えた直後、あるものを発射した。

「...！」

二階堂に命中したのは、麻酔針であった。彼女は座ったまま静かに眠り込んだ。

リカは二階堂に近づくため、慎重に個室に下りていった。そして、彼女は次なる準備に取り掛かった。

数分後、リカたちが入っている個室の扉が開かれ、中から出てきたのはリカではなく、二階堂であった。しかしどうも様子がおかしかった。

「...調子はどうだ？」

「.....良好よ、そっちはちゃんと見えてるの？」

「ああ、早くトイレを出てもらえるか...？女子トイレなわけだし...」

リカは、二階堂に変装していた。

顔は3Dプリンターで精巧に作られた変装マスクで、肌の質感など、細かいところがリアルに再現されている。喉元に変声器が内蔵されており、二階堂の声色に合わせた。体型や身長はほぼ変わらないので、服装を変えるだけで済んだ。

さらに小型ワイヤレスカメラを取り付けているため、安藤もリカが見ているものを確認することが可能となる。下着姿になった二階堂は、眠ったまま、トイレの個室に閉じ込められた。

これで準備万端となり、リカは第一研究所に侵入しようとした。

「...長く時間を取るな、危険を感じればすぐ戻って来い...」

「...了解、おっと、早速前方に障害が...」

変装したリカの前には、一人の男性研究員が接近しようとしていた。

「...やあ、愛美ちゃん、センター長に何言われたんだ？」

「.....えっと第一研究所のことでちょっと...」

「...ああ、随分と大変な件を任されたね...」

「...ええまあ、研究所でデータ整理するよう任されました...それでは...」

「...ねえねえ、今度の日曜日、一緒にディナーでもどう？」

「...あのすみません、他に予定があるので...」

「...そうか、またお預けか...恋人と会う約束とか？」

「.....いえ、そういう人は居ません、それでは私急いでいるので...」

リカは、どうにか最初の障害を切り抜けた。

「...さすがは舞台女優、少しも不自然じゃなかった」

「...勿論よ、昨日彼女と会って、表情のつくり方、口調や仕草、細かい癖など全てコピーしたわ...精巧なこのマスクと私の演技力があれば、そう簡単にばれないわ...」

「...しかし、さっきの彼は可愛そうだな...偽物の彼女にフラれるなんて...」

「...彼も慣れっこでしょ～挨拶みたいなものよ...それにしても、何処にでも似た者は居るものね...警察と研究者にはろくな男が居ない...」

安藤は、リカの眩きを耳にして、苦笑いを浮かべていた。

「...なるべく人に会っても、軽い挨拶程度で済ますんだ...あまり時間を取るとぼろが出る...」

「...了解、位置は合ってる？私、道覚えてなくて...」

「ああ、そのまま通路を真っ直ぐ進んで、突き当りを右だ...全面ガラス張りで第一研究所につながる渡り廊下がある...しつこく言うが、通るには例のカードキーが必要だ...」

「...ちゃんと持っているわ」

リカは、第一研究所につながる扉に辿り着き、二階堂から奪ったカードキーを端末に挿し込んだ。

「！」

扉は無事開かれ、リカは、ついに謎に包まれた場所へと足を踏み入れることになった。真っ暗だったフロアは、リカが入った途端に電源が入り、息を吹き返したかのように一気に明るくなった。

「妨害する物はないようだな...よし、お前の判断で動け...手掛かりになりそうな物を掻き集めるんだ...」

「...言われなくても急いでやるわ、この静けさが逆に不気味ね...」

リカの言う通り、長く手を付けていない研究施設は、冷たい空気に覆われ、埃が舞って、じっとしては居られなかった。

リカは、壁に貼られた館内マップを頼りに施設を走り回った。まず彼女は、研究者が個人で使う研究室の方に向かった。

リカは、榎藤の研究室を発見し、端末に例のカードキーを挿し込んで、開くかどうか試してみた。

「...開いた！」

「...これだけ順調だと気味が悪いな...」

リカは、手荒な真似をせずに済み、榎藤の研究室に忍び込んだ。室内は、ほとんど資料やごみに占領されていた。中央のテーブルを見ると、飲みかけのコーヒーマグが入ったカップが置かれていて、ついさっきまで榎藤がいたような感じであった。

「！」

リカは、あるものに目が入った。それはきちんと置かれた二枚の写真であった。一枚の写真には研究風景が写っており、そこには榎藤と二階堂も写っていた。

「研修か...？この時の彼女はあどけない表情で楽しそうだ...榎藤は何とも朗らかな表情だ...まるで別人じゃないか...何が彼を変えたんだ...？」

安藤は、ここ最近の榎藤の写真と見比べていた。

「...安藤、こっち！」

リカに呼び掛けられ、安藤はまた驚くことになった。もう一枚の写真には、仲良く肩を組んだ権藤と不動の姿が写っていた。その姿は若く、まだ新人時代の頃のようにであった。

「.....とりあえず研究室に置かれている小物や所持品を撮影して、こっちに送ってくれ...」

「了解、彼のパソコンがあるようだけど...」

「起動可能か？」

リカは、権藤のデスクトップパソコンを起動させた。

「...パスワードが分からないわ」

「...入力する必要はない、例のディスクを使え、パスワードを解読してログイン出来る...」

リカは、安藤の言う通りに渡されたディスクを本体に挿入した。すると、パスワードは勝手に入力されて画面が開いた。

「...たいしたものね...改めて思うと恐ろしい組織だわ...」

「黙って作業を続けろ...ここに情報が隠されているはずだ...」

「...へいへい」

リカは、安藤の指示で、速やかにパソコン操作を開始した。覗いてみると、膨大な数のデータフォルダが存在し、手当たり次第調べる必要があった。

「...慌てることはない、例のディスクがあれば、すぐ整理出来る...」

「心強いわね...」

「...検索欄に `フォルダ仕分け、と入力しろ」

リカが指示通りに入力すると、数秒でフォルダが二つの枠に仕分けされた。

「右の赤い枠に入ったフォルダだけコピーしろ...」

「...え？」

「今、必要なものと不要なもので分けられた、ほとんどダミーだ、ロックされたデータだけ頂戴する...フラッシュメモリー持っているだろ...急げ！」

「...！！」

急かされたりカは、あたふたしながら専用のフラッシュメモリーを本体に挿し込み、コピー作業を始めた。ダウンロードバーは順調に動きだし、容量が大きいため完了まで五分ほど掛かるようであった。

「...さて、あとは逃げるだけ.....！」

一仕事終えたりカであったが、安心したのも束の間、彼女に脅威が迫っていた。

「...ビュ！」

その時、空気を切り裂き、リカに目がけてあるものが放たれた。

「...おい、どうした！？」

安藤は、リカの異変に気づき、思わず声を張り上げた。

「.....私の他に鼠が居たとはね...」

リカは、パソコンの画面を見つつ、手の指二本で、後頭部を狙った鋭利な刃物を押さえていた。その刃物は刃幅が非常に狭く、長細い形状のナイフで、あと一センチずれていれば、串刺しになるところであった。

「.....誰か居るのか？」

安藤は、声を少し震わせながらリカに質問した。

「...ええ、今から顔を拝むところよ」

リカは、小声で安藤に伝えてからゆっくりと振り向こうとした。彼女の背後には明らかに人が

立っていた。どんな人物か調べようとするリカであったが、顔は覆面で隠されていて、全身黒タイツで覆われて、リカより不審な人物であった。

「...何だ、奴は？どうやって忍び込んだ？」

「...訊いてみるわ、何者なのか...」

「.....」

謎の侵入者は、一切声を出そうとしなかった。

「.....この関係者じゃないわよね？あなたは何者？ここに來た目的は？」

「.....そちらこそ目的は何だ？変装までして.....スパイさん？」

「...！」

やっと声を発した謎の侵入者であったが、声は加工されており、男性か女性か識別出来ずにいた。さらにはリカの変装が見破られていた。

「.....奴は手強そうか？」

「...さてね、やってみないと分からないわ」

普段、クールに対処するリカでも、少々焦りの表情を浮かべた。

「.....何としても情報を入手して、無事帰還してくれ...！」

「...簡単に言ってくれるわね」

リカは苦笑いを浮かべて、フラッシュメモリーを気にしつつ、目の前の敵に立ち向かおうとしていた。

「...お互い予期せぬ事態に遭遇したようだね...！」

謎の侵入者の表情は分からないが、感情が高ぶっているのは口調で読み取れた。

「...ええ、もう力づくでおたくの正体を暴くしかないようね...」

二人の間に火花が散り、激闘が繰り広げられようとしていた。先手を取ったのは謎の侵入者で、またもやナイフを投げつけて、リカの動きを封じた。彼女は謎の侵入者の巧みなナイフさばきを紙一重で避けていった。まだデータのコピーは途中なので、リカはパソコンから遠ざけようと相手を思い切り廊下の方へと押し出した。

「...もっとスマートに出来ないのか？」

安藤は、頭を抱えて戦闘の模様を見ていた。リカはお構いなく間合いを詰めて行き、ナイフを放たれないよう、接近戦に持ち込んだ。

「...ドゴドゴドゴ...バキ...！」

リカの反撃が開始され、謎の侵入者は押され気味であった。そのうち防御しきれず、リカの強烈な蹴りが謎の人物に命中し、そのまま相手は数メートル吹っ飛ばされた。

「.....ぐ」

謎の侵入者は、かなりダメージが残っているようで、体勢を整えるのに時間が掛かっていた。

「ふう、私としたことがムキになったわ」

リカは膝をついている謎の侵入者の覆面を掴んで、そのまま脱がそうとしていた。

「...やめろ」

謎の侵入者の抵抗も虚しく、覆面は脱がされた。

「え？」

ようやく相手の顔を拝めたりカであったが、顔を合わせた瞬間、啞然として体が固まってしまった。

「ヴォンヴォンヴォン

「！！」

その時、警報音が所内に鳴り響いた。リカはそれで我に返り、謎の侵入者は覆面をすぐに被り直して、その場から逃げようとした。

「...ちょっと待って！」

リカは、謎の人物を追跡しようとした。

「お前の方こそ待て！侵入がばれたんだろ？もうコピーは終了しているはずだし、早くお前もズラかれ！」

「...了解」

リカは、仕方なく脱出に徹した。彼女は、フラッシュメモリーとディスクを回収して、一目散に逃げようとした。

一方、謎の侵入者は、警備隊に追われていた。

「...ドガガガ...ドン...ガガン...！」

警備隊は自動小銃を装備しており、構わず謎の人物に発砲した。必死に攻撃をかわしていく謎の侵入者は、壁に何かを仕掛けた。それはプラスチック爆弾であった。

「ドガ！」

その直後、壁が爆発して、謎の侵入者はそのまま勢いをつけて、爆発で開いた穴に飛び降りた。ただ、そこから地上まで三十メートル近くの高さがあるため、無事では済まない。謎の人物は、自然落下で地面に着く前に何かを発射した。それは丈夫なワイヤーであった。ワイヤーの先端が適当な場所に突き刺さり、謎の侵入者は、遠心力でターザンのようにつた渡りして地上に降りて、無事に研究所から脱出していた。

一方、リカは、まだ所内で逃げ回っていた。警備隊に追われつつ、彼女はロビーに辿り着いた。

「...あれ？二階堂...？」

リカは、二階堂に変装したままだったため、すれ違う同僚の研究員は、騒然としていた。そ

の頃、本人はトイレの中でぐっすりであった。

「...あ！」

その時、リカは偶然にも不動と遭遇した。

「.....二階堂君...？何をしているんだ？」

「...ドン！」

リカは、研究員が群がっている場にわざと突っ込んで倒れ込んだ。不動も巻き込まれて、彼女は倒れていく研究員の隙間を縫って、出入り口の方に走って行った。

「...！」

外へと逃げ出せたりカであったが、既に武装した警備隊に包囲されていた。

「...リカ」

モニター越しでリカを心配する安藤であったが、彼女はまだ諦めてなかった。

「...コロコロ」

いつの間にか地面にピンポン玉くらいのサイズの球体が転がっていた。

「ブシュー！」

気づいた時にはもう遅く、球体から謎のガスが噴き出し、警備隊は身動きが取れなかった。ガスの正体は、催涙ガスであった。リカは、その隙に研究所を出るトラックの荷台に飛び移った。こうして、任務は遂行されたのであった。研究所全体は錯乱状態となり、しばらく落ち着きを取り戻すことは出来なかった。そんな中、密かにほくそ笑む者が一人紛れ込んでおり、その場から去って行った。無事に脱出出来たりカは、変装を解き、安藤のもとへ戻ろうとしていた。

「...何故、彼女が？...」

その時、リカは、何処か腑に落ちない表情を浮かべていた。

事件の真相はさらに闇に埋もれ、リカたちは、さらに危ない領域に足を踏み入れるのであった

。

第一章 鴉の眼編 第三話 鴉の眼

久々に大きな仕事を済ませたリカは、直ちに宿泊しているホテルへと戻ろうとした。タクシーを拾ってホテルに着いた彼女は、自然にフロントで鍵を受け取って、まず安藤の部屋へと向かった。

「...コン...コンコン...コン...」

リカはノックで合図を出し、安藤はそれを確認してから扉を開けようとした。

「...お疲れさん、何か飲むか？」

リカは静かに頷き、安藤の気遣いに応え、冷蔵庫に入っているミネラルウォーターを譲ってもらった。

「...はあ、久々にスリルを味わったわ...」

リカは、ミネラルウォーターを男前にかぶ飲みしながら椅子に腰を下ろした。

「...さすがだな、美人博士の発信器は遠隔で停止させた...お前が潜入した証拠は残っていないはずだ...勿論彼女も疑われることはない...」

「.....ええ、ただ途中乱入してきた奴が気になるわ...あいつがいなければもっと楽に動けたのに...」

「...本番にはトラブルがつきものだ...舞台でもそうだろう？」

「...相手はかなりの手練れよ...ほぼ互角かも...」

「...心当たりは？」

「...ないわ」

「.....」

リカは、安藤の問いに答えるのに少々時間が掛かって疑わしかったが、安藤は敢えて問い詰めようとせず話題を変えた。

「...とにかく無事でよかった、例のものを返してもらおうか...」

リカは、上着の内ポケットから特殊ディスクとコピーに使用したフラッシュメモリーを出して、安藤に渡した。

「このディスク、かなり役に立っただろ？うちの課に開発部門ができてね...ご自慢のアイテムだ...」

「...仕事だとはいえ、警察がすることじゃないわね...」

「...ああ、そこらの産業スパイと何も変わらない...僕たちは警察であり、警察じゃない...正義を志すためにはあらゆる手段を要する...C I Aだって、目的のためなら民間人を傷つける場合がある...そういうのを承知して、仲間になったんだろ？」

「...ええそうよ」

真っ直ぐな目で滑らかに話す安藤に押され、リカは反論しなかった。

「...お前が命懸けで持ち帰った情報だ...本部に持ち帰って、丁重に扱う...潜入して何か気づいたことは？」

「...警備は異常なほど厳重ね、昨日、あなたと訪ねた時、警備員は拳銃を携帯していた...それで今日はMP 7を装備していたわ...」

「...それって自衛隊が使用するマシンガンじゃないか！やはり何か隠しているな...あの研究所...！」

「...もう一度侵入して調査することは不可能でしょう...？次行けば、確実に殺されるわ！」

「...もうあの研究所に用はない、充分に収穫はあった、一旦引き揚げよう...僕は東京に戻る...お前は自宅に戻って、普段通りにしてくれたらいい...連絡があるまで待機だ...」

こうして神戸での特殊任務を終えて、リカはようやく解放された。

神戸 遺伝子科学総合研究センター

数日後、不動は二階堂を呼び出していた。用件は、第一研究所で起きた騒動についてであった。

「...どうにか落ち着いたな、警察のような真似をして悪かった...」

「...いえ」

「...君の疑いが晴れてよかった、つまり、何者かが君に変装して、無断で研究所に潜り込んだというわけだね...？」

「...ええ、そうです...」

「...ご丁寧にカードキーを返してくれたよ...もう無くすんじゃないぞ」

「...はい」

不動は、回収したカードキーを優しく二階堂の掌に置いた。

「何者か心当たりは？」

「...いえ、いつの間にか眠っていて、閉じ込められていました...犯人の顔は、見ていません」

「そうか...今のところ、何も手掛かりがない...こうなると、そこらの産業スパイじゃないってことだ...まるで映画の世界だな」

「...権藤さんの研究室が、荒らされたんですか？」

「...ああ、彼のパソコンを使用した跡が...」

「中のファイルを覗かれたんでしょうか？」

「だろうな、情報を盗まれた恐れが...」

「...情報が洩れたらまずいのでは...」

「.....勿論だ、かと言ってどうすることも出来ない...」

「.....」

不動は困り果てている様子で、二階堂は何やら考えて込んで俯いていた。

「...どうした？」

「...え？いえ、ちょっと気になることが...」

「...言ってみたまえ」

「...侵入した者に心当たりがないと思ったんですが、あることを思い出しました...」

「それは本当か？」

「はい、侵入された日の前日、刑事が二人訪ねて来ましたよね...？」

「...ああ、男女ペアでな...」

「...その女性刑事の方がトイレに行くと言って、しばらく戻って来ないので心配になって見に行くと、何故か第一研究所につながる扉の前に立っていたんです...」

「...何が言いたい？」

「...もしかしたら、侵入したのはその女性刑事ではないかと...！」

その時、不動は二階堂の発言に対し、若干冷や汗を掻いて、苦笑いを浮かべた。

「...何を言い出すかと思えば...馬鹿馬鹿しい...その根拠は？」

「彼女、道に迷った振りをして、研究所内をうろついていたかもしれません...そして、私がカードキーを持っていることを知り、侵入する際、私になりすました、権藤さんの経歴を事細かに探っているみたいだし...やっぱりあの二人が怪しいですよ...！」

「...二階堂君、それは考えすぎだぞ、君の言い方だとまるでプロのスパイの行為だ、彼らは警察の人間だ、いくらなんでもそこまでしないだろう...冷静になりたまえ」

「.....はい、すみません」

二階堂は不動に相手にされず、腑に落ちない表情を浮かべた。

「...とにかくしばらく様子を見て、警察やマスコミ関係者が来ても何も話す必要はない...もっとセキュリティを強化すれば問題ない...何か意見は？」

「...ありません」

二階堂は何か思い詰めた表情で、センター長室を後にした。研究所内で何か起こっているのは確かだが、それは闇に葬り去れようとしていた。

一方、兵庫県、リカの自宅マンション

ある早朝、リカを訪ねる者が居た。オートロックのチャイム音が、ぐっすり眠っているリカの部屋まで届き、彼女は思わず飛び起きた。

「.....何？こんな朝早くに.....」

リカはかすれた声を発し、目を擦りながら受話器がある方へと向かった。

「...はい、どちら様？」

リカが、インターホンのカメラ映像で来訪者を確認すると、相手はパーカーのフードを被って俯いており、ちゃんと顔が確認出来ず、しばらく無言であった。

「.....あのこんな時間に何の用ですか？勧誘はお断りだし、悪戯なら警察呼びますよ！」

当然のことながら、無理やり起こされたリカは機嫌が悪く、謎の来訪者に怒りをぶつけた。

「.....突然すみません...これには事情が.....話したいことがあるので、入れてもらえませんか？」

「...！」

謎の訪問者は何かを警戒して小さな声で喋り、リカはその声に少し聞き覚えがあるようであった。とりあえず彼女はオートロックを解除した。それから少しして部屋のチャイムが鳴り、リカは、恐る恐るチェーンロックをしたまま扉を開けた。

「...あなた、何者？」

リカがそう尋ねると、謎の訪問者はフードをめくり上げ、ゆっくりと彼女に顔を近づけた。

「...お早うございます」

「！」

リカは訪問者の顔を見て、目が点になった。

「...こんな朝早くにお邪魔してすみません...」

「...どうしてあなたが...？」

謎の訪問者は、リカがよく知っている人物であった。彼女はチェーンロックを外して、辺りを気にしながら来訪者を招き入れた。

「...リビングの方へ」

リカはスリッパを用意して、奥のリビングへと案内した。

「そこに座って...何か飲み物を...」

「...どうぞ、おかまいなく」

リカは、訪問者にアイスカフェオレを勧めた。

「...よく私の好みを知っていますね...こうやって会って話すのも初めてなのに...」

「...以前ドラマで共演した時、休憩中によく飲んでいたのを見たから...」

「...本当にたいした観察力ですね.....あとお住まいもちゃんと考えてある...厳重なセキュリティ、外から監視されない位置、狙撃されにくい場所、安全な条件が揃っている...私もこういう場所に引っ越さないと...」

「お褒めの言葉どうも...仕事の一環よ、それで用件は？」

リカはソファに深く座り、訪問者の目をじっと見ながら訊ねた。

「お聴きしたいことがあります...早速ですが、数日前に神戸の遺伝子科学総合研究センターという所に行ったりしていますか？」

「...！」

リカは、訪問者の質問に強く反応したが、冷静さを保ち、ある疑問を解決することが出来た。

「...やはりあなただったのね、私に襲い掛かったのは.....！」

「...はい、色々と調べさせてもらいました、相棒の刑事と研究員連続殺人の件で、センター長たちと会っていますね...そして、翌日、あなた一人で研究所に侵入した...」

「その通り、あなたこそどうしてあの場所にいたの？サユミ...」

「...こっちも仕事ですよ、裏のね...偶然は怖いですね...」

謎の訪問者は、リカと同じ歌劇団に所属する後輩の舞台人であった。名はサユミ。普段はマイペースでおっとりした性格であるが、舞台に立つと別人となり、存在感がある姿を魅せる。透き通るような歌声と、芝居に対する熱い想いを武器に、新時代のスターの地位へと登りつめた。リカと同じく、裏稼業で秘密警察として、密偵活動を行っている。

「...殺害された研究員の件と関係が？」

「はい...リカさんはどういったきっかけで侵入を？」

「...殺害された研究員が、ある闇取引に関わっていると分かり、手掛かりを掴むために侵入したわけ...」

「...成程、近からず遠からず...接点はありそうですね...同業者といえども、自分の仕事内容を話すわけにはいきませんが、ただ、あの研究所のことに関われば、酷い目に遭う...今回は忠告しに来たんです...」

「...どういうこと？」

サユミの顔は、話す度に強張っていった。

「...私は元々、ある製薬会社の人間を追っていました...闇取引の情報が入ったのですが、現場に居たのは、製薬会社の人間と外国の犯罪組織...」

「...それってうちが扱っているものと似ているね！」

「...恐らく標的は同じでしょう...こちらも捜査しているうちに、例の研究所のことが浮上しましたから...」

「...それで偶然にも鉢合わせしたわけね」

「ええ、こうも偶然が重なるとは...予想外のことが起こって焦りました...殺された権藤氏の情報を探っていたんですね...？」

「ええ、重要人物だからね、コピーさせてもらったわ...あなたもそれが目的...？」

「.....」

その時、リカの問いに対して、サユミは静かに口を閉じた。

「何か事情がありそうね...話してみて...」

サユミは、頷いて自分の身に起きたことを素直に話そうとした。

「...一ヶ月ほど前のことです、裏の仕事で闇取引に関わっている一人に接触しようとしたんですが...」

その夜、サユミと相棒の刑事の桜塚は、大手製薬会社社員である角田純也 四十七歳を尾行していた。彼らは問題なく尾行しているように思われたが、角田はふと立ち止まり、一度自分のスマートフォンの画面を確認した。するとその直後、彼の様子が変わって、突然全速力で走り出した。

「...しまった、気づかれたか？追うぞ！」

サユミは、見失わないよう桜塚と共に角田を追いつけた。角田は、奥へ奥へと人気のない裏通りに逃げて行った。それはまるで、サユミたちを誘い出しているようであった。

「...どうもおかしい、どうしてこんな場所に...？」

桜塚は疑問を投げ掛け、嫌な予感は見事に的中した。細い路地の角を曲がろうとすると、角田の姿はなかった。

「...そんな、彼は何処に？隠れる場所はないわ...」

「...注意しろ、この場所は異様だ...」

サユミたちは走ろうとせず、一步一步慎重に前に進んだ。

「...？」

すると、彼らの前方に一つの人影が現れた。

「...誰？そこに誰か居るのは？」

サユミが呼び掛けると、その人影は近づいて不敵な笑みを浮かべた。

「.....俺たちが追っている者ではないな、ここで何している？」

サユミたちの前に突如現れた人物は、黒羽根に覆われた上着を着用し、全身は黒で統一され、闇夜に溶け込んでいて、無気味であった。

「...ここに一人の男性が通ったはず、知らないですか？」

サユミは相手の姿に動揺せず、黒ずくめに質問した。

「.....彼は渡さないよ、特に君たちのようないつとうしい狗にはね...！」

黒ずくめは、どうにか聞き取れる低い声で答えた。彼は姿を消した角田のことを話しているようであった。

「...角田のことを知っているな、お前は何者だ...？」

桜塚は、黒ずくめに警察手帳を見せて職務質問しようとしていた。

「.....知る必要はない」

黒ずくめは、サユミたちに従おうとせず、挑発的な態度を取っていた。

「...どうやら力ずくで訊き出すしかないようだな...！」

「...やってみなよ、抵抗はするよ」

サユミたちは前のめりになって、黒ずくめから目を離さなかった。

「！」

黒ずくめがまず先手を取り、襲い掛かった。二人は協力して相手の動きを封じようとした。

桜塚は、黒ずくめを地面に押さえつけようとするが、なかなか上手くいかなかった。黒ずくめは、細身の割になかなかの怪力で逆に桜塚が押し出された。

「...こいつ、何者だ？ 気味が悪い...」

「.....どうしたの？ もっと遊んでよ、刑事さん」

桜塚は黒ずくめの挑発に乗り、装備している拳銃を構えた。

「...桜塚さん！」

「...おやおや、ここは日本だよ、一般市民にそんなの向けていいの？」

「...ふん、何が一般市民だ...！ 俺は今まで色んな悪党を見てきたが、お前は特にいかれている...とても普通の人間とは思えない...何処からやって来た？」

「ふーん、結構勘が鋭いね、当たりだよ、私は人間じゃない...」

「...だったらお前は何だ？」

「.....化け物さ」

「！」

「ドン...！」

その時、黒ずくめは抵抗しようとしたため、桜塚はすかさず威嚇発砲した。

「え...？」

威嚇発砲したのと同時に、黒ずくめの姿が消えて、桜塚たちは慌てふためいていた。

「.....そんな、何処に消えた...？奴は...」

桜塚たちは動揺しつつ、辺りを隈なく探した。

「.....背中を見せたらもうゲームオーバーだ...」

「！！」

その時、桜塚の背後に視線を感じ、そのまま彼の体は固まった。

「...いつの間に？」

「...言っただろ？化け物だって...もう降参するかい？」

「...相手が悪かったようだ、でもまだ諦めねえよ...」

「.....じゃあ仕方ないな」

「...あが.....！！」

その時、ぽたぽたと桜塚の血が垂れ落ちていった。黒ずくめは、指先を尖らせて桜塚の背中を深く刺した。黒ずくめの指先はまるで槍のようであった。指を抜くと、黒ずくめは返り血を浴びて、桜塚の血がついた手を嬉しそうにサユミに見せた。桜塚は、力尽きて静かに倒れた。

「桜塚さん！！！」

サユミは、桜塚の変わり果てた姿を見て、逆上し、すかさず黒ずくめに得物のナイフを放った

。しかし、それは命中しなかった。黒ずくめは、またもや姿を消し、攻撃を回避した。

「...汚いわよ、早く出て来なさい！」

サユミの怒号が鳴り響くと、気配を消しつつ背後に黒ずくめが現れて、そこから彼女にヘッドロックを掛けようとした。

「...ぐ、しまった...！」

「怒りからは油断しか生まれないよ、筋はいいが、まだまだだね...」

「...そのまま絞め殺す気？」

「...君をどう料理するかは、こっちの自由だ...簡単に殺すには惜しいな、一つ面白いことがある...」

黒ずくめはそういうと、上着のポケットからあるものを取り出した。それは注射器であった。

「...何を？」

「...丁度、君のような人材を探していた、今夜はついてる...」

「...何をごちゃごちゃと...！」

「.....君は大手歌劇団の劇団員だろ？」

「！！...それが何だっていうの？」

黒ずくめは、やたらサユミに興味を持っており、注射針を彼女の首筋に当てた。

「...下手に抵抗しない方がいい、肌が傷つくよ...！」

「...やめ.....て...」

サユミは、強引に謎の薬剤を注入された。

その直後、彼女は大量の汗を流しながら腰が抜けたのか、そのまま足が崩れていった。

「.....まだ試作段階ですぐに効果は出ない...次に会うのを楽しみにしているよ...」

黒ずくめはそう言い残して闇へと消えた。黒ずくめが去った後、体が自由になったサユミは横たわっている桜塚の容体を確認し、直ちに救急車を呼んだ。

サユミは、リカに悲惨な体験談を事細かに話した。

「本当にあれは悪夢でした...とんでもないことに首を突っ込んだと実感しました」

「...そんなことがあったの...それで相棒の刑事の方は...どうなったの？」

「.....それは」

同じ頃、東京 某総合病院。

安藤は東京に戻っており、見舞いのために病院へと訪れた。

「よう、調子はどうだい？」

「...どうってこの通りだ...来るのが遅すぎるぞ...リハビリも終わって、三日後に退院だ」

患者は、呆れた顔で安藤に接した。

「こっちも忙しくてね、驚いたぞ、久々に飲みに誘おうと思ったら、背中刺されて入院しているって聞いたから...」

「驚いたぞ、久々に飲みに誘おうと思ったら、背中刺されて入院しているって聞いたから...」

患者は安藤の友人で、サユミの相棒でもある桜塚であった。安藤とは同期で一番気が合う仲であった。

「...えらい目に遭ったが、命が助かっただけまだましかな...」

「...何処の馬鹿に刺されたんだ？」

「...さてな、薄気味悪い奴だった...思い出したくもない...」

「...そう言わずに話せよ、お前ほどの男が油断してそうなんだ...興味がある！」

桜塚は、仕方なく重い口を開こうとした。

「...全身真っ黒の変質者だ、相棒も襲われた...！」

「...相棒...確か最近トップスターになった娘か...？」

「...ああ、彼女が無事で良かった...せっかくのお披露目公演が台無しになるところだった...しかし...」

「...しかし、何だ？」

桜塚は、眉を顰めて、サユミのことについて口にした。

「.....実は彼女、その怪しい人物に無理やり、謎の薬物を注入されたんだ...」

「...謎の薬物？」

「...今のところ体に異常はないようだが、たまに違和感があるみたいだ、何を体内に注入されたか気になって、僕がこんな目に遭ったため担当を外されて、彼女は独自で捜査を始めた...変なことに巻き込まれてなければいいんだが...」

「.....一つ気になるんだが、お前たちを襲った人物、こいつのことじゃないのか？」

安藤は心当たりがあり、桜塚にあるものを見せた。それは権藤の殺害現場となったホテルの監視カメラ映像を静止画にしたものであった。

「...ああ、そうだ、顔は分からないが背格好や服装が同じだ...これって！」

「...ああ、お前たちを襲った者と、ここ最近、研究員を次々に殺害している犯人は同一人物だ...！」

「...世間を賑わせている例の連続猟奇殺人のことか...何故、お前が殺しの担当に？」

「...いや、偶然、現場に居合わせていたんだ、殺害された研究員は、別の件でマークしていた...彼は、巨大な外国犯罪組織とつながっている...」

「！...まさか標的が一緒ってことか？」

「そのようだな、合同捜査になりそうだ」

「...だとすれば話が早い...頼みがある！」

桜塚は、真剣な眼差しで安藤に助けを訴えた。

リカの自宅マンション。

リカとサユミは、捜査内容を話し合っていた。

「.....調べていくうちに、マークしている製薬会社と神戸の研究所が、提携していることを知りまして...有数な企業と機関だったため、目が行きました...それで自分の勘を信じて、一人で例の研究所に訪ねることにしたんです」

「...でも、あなたが先に研究所に行ったならおかしいな、責任者はあなたのことと言ってなかったと思うけど...」

「...私が訪ねた時は、若い女性研究員が応対してくれました...その日、責任者は不在だったため、代理だったみたいです...」

「...その女性って二階堂って娘？」

「そうです！やはり会われたんですね...彼女に変装していたから気になりました」

「私たちが訪ねた時、責任者と一緒に居てね、侵入する際、利用させてもらったわ」

「完璧に彼女に化けていましたね」

「ありがとう...それで彼女とはどういう話を？」

「...例の製薬会社とどういう事業をしているか詳しく訊こうとしましたが、彼女は機密情報のため話せないと...そのかわりある人物の名を出すと、彼女の様子が変わりました...」

「...権藤ね？」

「はい、彼がカギを握っているようですが、まさかあんな目に遭うとは...一度会おうと思っていましたが、それは叶いませんでした」

「...確か私はディナーショーの最中だった...まさか、開催場所のホテルに権藤が宿泊していたとはね...」

「...本当に不気味なほど偶然が重なりますね...例の殺人事件のことについても調べましたが...驚きました、その犯人は私たちが襲った者に間違いないでしょう、特徴が一致しているんで...」

サユミは、専用のスマートフォンからホテルで起きた殺人事件の記事を開き、核心に触れようとしていた。

「間違いないわ、これでようやく枝分かれした線が一本につながったかな...？」

「あの二階堂っていう女性、権藤氏の教え子だったそうですね...」

「ええ、かなり彼を尊敬しているようね、でも、彼のチームから外されたのは何でだろう？」

「...そうですね、チームから外されても、彼のことを想っているようでした...彼女と色々と話していくうちに気が合い、研究所の侵入に協力してくれたんです...彼女がセキュリティーのプログラムを一時的に狂わせ、潜入しやすい環境を作ってくれたんです」

「...そうか、それで潜入しても、しばらく警報が鳴らなかったのね...研究室にも簡単に入れたし...」

「...ええ、一定時間、厳重なロックは解除されます...だから、普通のカードキーでも認証される...誤算はあなたが居たことでした」

「悪かったわね...」

「...いえ、いいんです、あなたで良かった...そこで勝手なお願いなんですけど...」

「...え、何なの？」

一方、桜塚が入院している病院。

「...何だ、頼みってというのは？」

安藤は、不安げな面持ちの桜塚の答えを待った。

「...俺は、この通りしばらく使えない...彼女一人で捜査を続けるのは無理だ...そこでお前たちの力を借りたい...出発点は違ったが、獲物は一緒だ...うちの相棒と一緒にこの難事件を解決して欲しい！これは友としての頼みだ...」

安藤は、怪我の痛みに耐えながら、声を張って頼んでいる友人の姿に心打たれた。

「...断る理由はない、仲間は一人でも多い方がいいからな、これで一つ貸しだぞ」

「...仕方ない、退院したら高い酒奢ってやるよ」

「これで真の標的が何か分かってきた、もう、外国犯罪組織はどうでもよくなってきた...重要なキーワードは研究所、榎藤、そして、謎の黒ずくめといったところか...最後のはしっくりこない...何か別名を...」

一方、リカの自宅マンション。

サユミは、座った姿勢から前のめりになって、リカに頼みごとをしていた。

「...研究所で手に入れた情報を提供してもらえますか？」

「...え？コピーしたデータのこと？」

「はい、私に注入されたものの謎が解けるかもしれません...お願いします！」

「...別にいいけど、データは私の手元にないわ、相棒に渡したから...頼んでみるわ」

「ありがとうございます！」

サユミは、嬉しさのあまり、強張った表情を崩した。

「...こちらこそ感謝するわ、やっとこれで、頭の中のもやもやが無くなったわ、やはり黒ずくめが気になるわね...」

「本当に不気味さが漂う奴でした...声だけ聞いても性別が識別出来ず、暗闇で表情もはっきり分かりませんでしたし.....ただ気になることが...」

サユミは、一呼吸してから話を続けようとした。

「`眼、です、眼が光っているように見えました...何か見透かしたような嫌な感じで...私はこう呼んでいます、`鴉の眼、とね...」

「...鴉の眼...！？」

「...とても人間の眼とは思えませんでした...まるでずる賢い鴉のようで...」

「成程...名案ね、これからそう呼びましょう.....！」

その時、リカたちはある異変に気付いた。

「.....クアー...クアー...」

外から聴こえる鳴き声が気になり、カーテンを開けてみると、衝撃的なことが起きていた。

「...ちょっと何？気持ち悪い...」

空には無数の鴉が飛んでおり、異様な光景であった。鴉の群れは、リカたちが居る場所を囲んで監視しているように見えた。さらに、今朝は大気が不安定のため、曇り空になっており、上空は不気味さが増していた。

「...随分と鴉が多いわね、なんか不吉～」

リカは呑気であったが、サユミは嫌な予感がして、顔色が悪くなっていた。

「.....すみません、リカさん、カーテンを閉めてもらえませんか？」

「...ああ、そうね、こんなもの見ても仕方ないし...」

リカたちは、鴉のことを忘れて話の続きをしようとした。鴉は、しばらくして散らばって去って行ったが、一羽だけ妙な鴉が紛れ込んでいた。その鴉をよく見ると、首に小型カメラが装着されていた。彼女たちは何者かに監視されていた。

リカの部屋を監視している者が居る場所は、薄暗く静かな空間で外の世界と隔離されて光を一切通さない地下のようであった。監視者は、盗撮した映像を何度も確認していた。その人物の様子は明らかに異常であった。

「.....またいい素材が見つかったな～彼女も魅力的だ...監視を怠らないようにしないと...ふふ」

監視者の周りには、いくつか人影があり、無言のままでぴくりとも動かなかった。監視者の主犯格は、不敵な笑みを浮かべて何か良からぬことを企んでいるようであった。

サユミは、リカに用件を伝えて帰り支度をしていた。

「...本当に朝早くからお邪魔してすみませんでした...連絡先交換したんで、今度会う時は必ず連絡入れます」

「ええ、また遊びに来て、出来ればもう少し遅い時間に...」

「...はは、了解です、今日公演があるんで、朝しか時間がなくて.....」

「...そうか、トップお披露目公演だったわね、歌劇団の代表作だし、色々と大変ね、今度、観劇に行くから」

「はい、ぜひ観に来て下さい、私もリカさんの公演を観に行きますから...」

「...秋になってもお互い落ち着く暇はないようね...」

「ええ、でも、あなたに会って、気が楽になりました、カフェオレご馳走様でした！」

サユミは、リカにお礼を言った後、再び変装して、颯爽と歩いて去って行った。彼女は、凜とした表情で、戦場である大劇場へと向かった。

リカの方は特に予定がなく、サユミが去った途端、気が抜けて眠気が襲って来たため寢床へと戻った。しばらくの間、休息の時間が設けられたが、彼女には、想像絶する事態が待ち受けていたのであった。

秋晴れの空、ようやく、うっとうしい暑さから解放される時期が近づいて来ていた。

リカが所属する歌劇団大劇場は、その日、休演日で人通りは少なく、静か極まりないものであった。大劇場最寄駅近くのコンビニエンスストアを覗くと、雑誌コーナーに一人の長身の女性が立ち読みをしていた。サングラスや帽子で変装しているが、その女性は、紛れもなくリカであった。ただ、このコンビニエンスストアには、劇団員がよく来店しており、地元の人間はそう驚くほどではないことであった。また、リカは買い物するために来店したわけではなかった。彼女は、誰かと待ち合わせしているようであった。それから数分後、一人の客が来店し、まっすぐ雑誌コーナーへと向かった。

「.....プライベートでもスター気取りか？」

客の一人が、リカに馴れ馴れしく声を掛けてきた。

「.....休みの日でも、ファンの人は、この辺うろついてるんでね...夢を壊さないためのものよ...」

「...難儀な仕事だな～」

リカの前に現れたのは、安藤であった。

「...急に呼び出して悪かったわね...」

「...いや、構わんよ、珍しいな、お前から呼び出しとは...」

二人は適当に商品を手に取り、さりげなく小声で話を始めた。

「...急を要するんでね、どうしても例のコビーした情報が欲しいの...」

「.....どうやら進展があったようだな、お前の方にも...ネタが飛び込んできたか？」

「...ええ、まあね、多分そっちが掴んだネタと似ているわ...」

「...そうだな、だから情報交換する気はない、このフラッシュメモリーの中身を見れば答えは出る...」

安藤は、そっとリカにフラッシュメモリーを手渡した。

「...もう全部見たの？」

「...ああ、徹夜してな...膨大な量で不要な部分があったから、それは削除しといた、それは編集したものだ...かなり分かりやすくなっているだろう...」

「...そう、だと助かるわ」

「.....見る時は注意することだ...見なかった方が良かったと後悔するかも...」

その時、安藤の声は、若干震えていた。

「.....そんなに衝撃的なの？」

「...見れば分かるさ、お前には見る権利がある...」

「え...？」

安藤は、意味深な発言をしたが、はっきりと話そうとしなかった。彼は明らかに何か隠しているようであったが、リカは敢えて問い詰めようとしなかった。

「...とにかくこれで真相が明らかになりそうだ...長い時間、終着駅のない列車に乗ってるような感じだったが...これで終点に辿り着けばいいが...」

「...そうね、」

「...あまり深入りするのは禁物だ...今まで担当した件の中で一番やばいかもしれない...」

「珍しいわね、怖気づいたの？...かと言って引き下がれないでしょう？」

「...勿論だ、あくまでも挙げるのは、外国犯罪組織だ、何があっても、そっちを優先に...標的を見失うな」

「分かってるわ、これでもプロだから」

「...自信たっぷりだな、期待しているぞ」

安藤は軽く笑みを浮かべ、週刊誌とお気に入りのガムを手に取り、レジへと進んだ。リカは先に外へと出ていた。

「...今日、劇場は休みみたいだな～閉まっていると街全体が寂しく感じる...」

「...他に娯楽がないからね、昔は遊園地や動物園があって良かったけど...温泉でも行ってきたら...？」

「...いや、歌劇団以外興味ないんでね、もう帰るよ、動きがあれば連絡する、そっちも何かあれば連絡を...」

「ええ...それじゃあまた...」

安藤は、リカに背を向けてから手を振り、駅の方へと向かった。リカは自宅の方へと帰って行った。

「！」

その時、何か冷たい視線を感じたが、リカは、敢えて気にせず、颯爽と歩きだした。リカに視線を向ける者は、危害を加えようとせず、じっと監視していた。

それから何事もなく、時が流れてリカは再度、サユミと会う約束をして自宅に招いていた。

「...すみません、またお邪魔して...」

「...いいのよ、カフェオレ飲むでしょ？」

リカは、サユミにお気に入りのカフェオレを差し出し、本題に入ろうとした。

「.....疲れた顔ね、大丈夫なの？」

「...ええ、なんとか、最初は稽古や仕事の疲れかと思ったんですが、たまに動悸が激しくなったり、魘されたりする時があって、検査に行ったんですが、原因不明で...恐らく例の薬が原因かと思いますが...」

「...相棒から重要な情報を預かっているの、私もまだ目を通してないから、一緒に見ようと思って...」

「...ありがとうございます」

リカは、仕事専用のノートパソコンを起動させ、安藤から借りたフラッシュメモリーを挿入した。中身を開こうとすると、極秘と太い文字で表記されたデータフォルダが保存されていた。

「...これは！」

リカたちはデータを閲覧しようとするが、画面上にはびっしりと画像や文字が詰まっており、驚くばかりであった。

「...データはだいぶ削除したと言っていたけど、かなりの量ね...」

「.....でもこれは価値がありますよ、有力な情報が詰まっているのは間違いない...」

「...そうね、じっくりと見てみましょうか」

リカたちは順に資料を閲覧した。専門的用語、化学式、数式などは無視して黙読していき、改めて、権藤という研究員がどれだけ優秀かを知ることとなった。

「...専門外でよく分からないけど、ノーベル賞みたいなのを獲れる人物だということは伝わったわ...」

「そうですね、稀に見る才能の持ち主ってことですね...」

「...気になる箇所があったら言ってよ」

「...はい、早速、気になる箇所がありました！」

サユミの目に留まったのは、報告書のある項目であった。

「.....Mプロジェクト？これね...」

そこには、ある計画内容が事細かに記されていた。

この研究が無事完了すれば、科学の進歩が証明されることになる。今回、研究しているのはあらゆる障害を防ぐ万能な細胞、これは体内にある悪性の腫瘍、毒素、病原菌を一瞬で消滅させ

る働きがあり、また、常人以上の身体能力を目覚めさせ、外傷や疲労に対しては驚異の回復力を身につけることが出来るものである……

リカたちはしばらく瞬きせず、眉間に皺を寄せて読み続けた。

……当初、この研究は医療に役立てようと進めてきたが、防衛省の要請により、軍事に活用させようと、実用化計画が開始された。これがミューテーションプロジェクト、通称、Mプロジェクトである。

画像が数枚挿入されており、そこには、権藤とスーツ姿の男たちが数人写っていた。

「彼らは…？」

「…政府のお偉いさんでしょう、ニュースで見たことある人物がちらほら…」

研究に没頭していると、十年の歳月が流れようとしていた。これまでに数えきれないほど実験は失敗し、困難を極めて、挫折したが、ようやく、希望の光が射し込もうとしていた……

「……ミューテーション、突然変異…明らかにまともじゃないわね…」

報告書には、実験結果の様子が写っている画像が挿入されており、それは見るも無残な光景であった。人体実験をしていたのだろうか、血まみれで横たわっている姿が多く写っていて、さらにそのような状況で、平然な顔をして、実験結果を記録している研究員の姿も写っていた。

「……とても人間がすることだと思えない…彼らは狂っていますね…」

「……これを世に出せば、たちまち問題に…あの研究所は責め立てられるのは間違いないわ…」

「……ええ、つまり、はじめの研究資料は、この危険な実験で使用された薬剤の詳細でしょう…化学式とかはよく分かりませんが、成分なども記載されていたので間違いありません…」

「…あなたはこの薬剤を投与された可能性が…！研究資料を読み解けば、解決の糸口が見つかるかもしれないけど…私たちはこの分野は素人だし……」

リカはお手上げ状態であったが、サユミは何故か少し自信に満ちた表情を浮かべていた。

「…何かいい案でも？」

「.....はい、切り札があります、一人頼りになる人が...」

「...それって誰なの？」

「...二階堂研究員です！」

その時、リカは意外な人物の名を聞いて、つい口が開いた。

「...彼女とまだ付き合いが？」

「ええ、かなり協力的です、もう友達みたいな関係で...」

「私は、もう彼女に会えそうにないからね...」

「...そういえばこの前、一度彼女から連絡が入って、リカさんのことを疑っていましたね...恨んでるかも...」

「...思った通り、彼女鋭いわね...」

「ええ、いい味方を見つけました、敵に回すと手強いです」

「私はしばらく顔を合わさない方がいいかも...」

「...そうですね.....あと一つお願いしたいんですが...」

「...何なの？」

「ちょっと予定があるんで...この情報データの一部をコピーさせて欲しいのですが...彼女に見せたいので...」

「...そんなのお安い御用よ」

「彼女は、権藤氏の件についての真相を追及しています、このデータを見せれば、興味を示すでしょう...私に射ち込まれた薬剤の謎が解けることを願うばかりです...」

「まだ続きがあるようだから、あとはこっちで読んでおくわ...」

「...すみません、今は自分のことで精一杯で...薬剤のことが解決すれば、捜査にすぐに協力しようと思います...」

「...オッケー、どうも最近、妙な視線を感じてね...例の`鴉の眼、が関係しているかな？」

「...恐らくそうだと思います、私と接触していることを嗅ぎ付けて先輩も標的にされたようですね...」

「奴の目的は？」

「未だに分かりません、奴の気配を感じることがありますが、姿を現しませんから」

「...私一度も会ったこともないからね、また訊くけど、どんな奴？」

「...簡単に言えばとっつきにくい人物です、異世界に居るような感じがして...危険極まりないのは間違いないです...」

「...そう、周りでコソコソされると腹が立つからさ、攻めて来ないなら、こっちから攻めようと思うんだけど...」

「...充分注意して下さい、罠にはまれば抜け出せなくなるかも...」

「ええ、そろそろケリをつけたいの、表の仕事も忙しくなるんでね...」

「そうですね、もうてんでこ舞いです！」

「何年やっても慣れないよね～」

「...私は、とにかく今の公演を頑張らないといけないんで、障害になるものはさっさと片づけないと...」

「お互い頑張りましょう！」

り力たちは、お互いの握り拳を合わせて別れの挨拶をした。

「またまたカフェオレご馳走様でした～」

サユミは、リカに礼儀正しくお辞儀をして、その場から颯爽と去って行った。リカはサユミが去った後、コーヒーを飲みながら権藤の報告書の続きを読もうとしていた。彼女は関連資料に目を通していくうちに衝撃の事実を知り、読み終えた後、どっと疲れが出て、溜め息をついて目を休めていた。一方、彼女の自宅付近に怪しい影が潜んでいたが、特に何も起こらなかった。

それから数日後、リカは、運命的な日を迎えようとしていた。

その日、リカは本業の仕事場で聖地である歌劇団大劇場へと向かっていた。とはいっても、稽古場や舞台の上ではなく、観客席の方であった。彼女は周りのファンに注目されながら劇団員の仲間と指定された席に座り込み、観劇を楽しもうとしていた。彼女たちが観劇する公演は、歌劇団きっての超大作であることから、力の入れ具合が半端ないものであった。舞台セットや衣装などは豪華で美しい音楽が奏でられ、独特な世界観で盛り上がるものであった。

サユミはトップスターに就任し、本拠地である大劇場のお披露目作品がこの作品であった。その日は千秋楽で、リカは偵察も兼ねて、約束通り彼女の公演を観劇しに来たのであった。

第一幕のプロローグから名場面があり、何度も観ている者も初めて観る者も、作品の世界観に引き込まれようとしていた。同業者であるリカたちは、先輩後輩関係なく、作品を通して、そこから色々と学ぼうとしていた。観劇に集中しているうちに第一幕があっという間に終わり、休憩時間となった。リカたちは外の空気を吸おうと客席を立った。

「...あっち、席が空いてる、座って飲もうか？」

リカたちは、コーヒーが入ったカップを持ってテラスに出ようとした。その日、天気はよく、日向ぼっこするには丁度いい気候であった。彼女たちは、そこで観劇した作品の感想を述べたり、プライベートの話をしたりと、会話が弾んで大いに盛り上がっていた。リカはこのまま和やかな雰囲気が続くことを願っていたが、それは叶わず、水を差すものが徐々に近づいていた。

「...！」

リカが何気に周りを見渡すと、突如、彼女の顔色が変わった。テラスで寛ぐ大勢の観客の中に、怪しい人物が自然と紛れ込んでいた。それは「鴉の眼」であった。リカは「鴉の眼」と目が合った瞬間、動揺して鳥肌が立っていた。

「...リカ、どうしたの？」

劇団仲間がリカの異変に気づき、一斉に呼び掛けた。彼女の目線の先を辿ると「鴉の眼」は居なかった。やがて、体の硬直がなくなり、リカは落ち着きを取り戻した。

「...ごめん、ごめん、心配させて」

「...本当に驚かせないでよ！大丈夫？気分でも悪いの？」

「...そういうわけじゃないけど。最近疲れが取れないんだよね...はは」

「...何それ？あんた年寄り臭いよ」

「...自分で言うのもなんだけど、こんな細い体でよく倒れないよね～」

「はは、うちらは化け物みたいなものだからね～」

リカは冗談を交え、どうにか誤魔化した。リカの目の前に現れた`鴉の眼、が本物か幻かは謎のままであった。

休憩時間が終わり、リカたちは指定の観客席へと戻り、続きの第二幕を観劇しようとした。

物語は佳境に入っていき、サユミたちの芝居は、激しさを増していた。どろどろとした古きヨーロッパの世界観が美しく表現され、気づけばフィナーレであった。サユミは男性でも女性でもない、さらには人間でもない表現しにくい難役を演じ切った。最後に彼女は、役とは違った可愛い表情を浮かべながら観客側に手を振った。

リカたちを含めた観客は、盛大な拍手でそれに応えた。こうして、何の事故もなく、千秋楽公演が閉幕したのであった。

その後、リカだけは大劇場から出ようとせず、サユミに会うため、一緒に居た仲間と別れた。彼女は専用口から劇団員の楽屋の方へと向かった。リカが楽屋の方に顔を出すと、まず若手の劇団員が居て、突然の彼女の登場に驚き、深々と頭を下げた挨拶をした。リカはそれに対して優しく応対した。楽屋の中にはお祝いの花の他、ファンからのプレゼントがどっさりと積まれていた。

「サユミちゃ～ん！」

リカが大声で呼び掛けると、ひょこっとサユミが顔を出した。

「あ、どうも、いらっしやい～」

サユミはようやく落ち着き、劇団仲間と雑談していた。

「...あら、お久しぶりね」

リカに声を掛けたのは先輩劇団員で、名はミチコ。芝居、踊り、歌と卓越された実力派で、歌劇団のプロフェッショナルが集まった班に属し、日々活躍している。リカは若手時代、彼女と共演し世話になっている。また、裏の世界でも優秀な密偵として活躍している。

「ご無沙汰しています、すみません、急に割り込んできちゃって...」

「...いいわよ、サユミちゃんに用事？珍しいツーショットね」

「ええ、まあ...」

「...最近調子はどう？次、サヨナラ公演よね？また才能ある人材が去って行くから寂しいわ...」

「...そんな、私なんか大したことないですよ、ミチコさんのような実力者が歌劇団に残ってくれて本当に助かってます...最後に一緒に舞台に立ちたかった...」

「...そうね、最後の舞台、絶対観に行くから...」

ミチコは、軽くりカと会話して、先輩の気遣いで、席を立とうとした。

「...裏の仕事の方はどう？難航していると耳にするけど...」

「はい、結構手強くて...」

「.....物騒な噂を聞くわ...私たちのような人間が狙われているみたい...注意しないとね...」

「...！」

普段、穏やかなミチコの表情が一瞬険しくなり、リカの目が点になった。彼女は意味深なことを言い残し、その場を去って行った。

「...優しい人だけど、やっぱりベテラン...貫禄があるよね、とても敵わないわ...」

「ミチコさんから色々と教わりました、あの人の力でどれだけ助けられているか...」

「...ええ、敵になれば恐ろしいわ、私たちが裏で何をやっているか把握しているみたい...」

「はい、彼女は国内を問わず、世界各国の情勢に驚くほど詳しいですから...」

「へえ、そうなんだ.....そろそろ本題に入りましょう、それでそっちの方は？彼女に会ったの？」

「ええ、コピーしたデータに目を通してもらいました、思った通り、食いついてくれて...」

「彼女はどんな反応を？」

「...驚いた様子でした、長年、権藤の傍に居ながら、知らないことがたくさんあったと...かなりショックを受けているようで...」

「あなたに注入された薬剤の件は？」

「薬剤の設計図のようなデータが記載されていたので、それを見て検討すると...解決策を見出すには時間が掛かるようです...」

「そう...それで体の異常は？」

「...症状は特に変化がありません、魘されたり、軽い目まいや吐き気が度々...」

「...よくそれでちゃんと舞台に立てるわね」

「不思議に上演中は異常がないんです、よくあるでしょ？集中しすぎて、体の調子の悪さが吹き飛ぶっていう...」

「...まあ、たまにあるけど...でもあまり無理しないようにね！」

「はい、ご心配なく...そちらは有力な情報が入りましたか？」

「ええ、例の報告書のことで重要な手掛かりが...それを知らせに来たの」

「話して下さい...」

リカはサユミに包み隠さず、衝撃的な事実について話そうとした。

やがて、時間は流れていき、気づけば真夜中であつた。リカはサユミと別れ、特に急ぐこともなく帰宅しようとした。

彼女は、自宅の最寄駅から夜風を浴びながら、近くの大きな公園を通ろうとした。夜更けの公園は人気がなく、なんとも不気味な空間であり、リカはペースを上げて抜けようとしていた。しかし、それを嘲笑うかのように脅威が迫ろうとしていた。彼女は、即座にそれを察した。

「...！！」

突然、リカは背後から襲われたが、動きを読んで難なくそれを回避した。襲撃者は逃げようとせず、彼女の前に姿を現した。

「.....普通に登場出来ないの？これで会うのは二度目になるのかな...？」

リカは、気軽に襲撃者に声を掛けた。

「...今晚は、会うのは初めてかと思いますが.....まあいい、手荒な挨拶をして、申し訳ない...」

「...新手のストーカー、変質者でもないようね...心当たりがあるとすれば、仲間を襲った`鴉の眼、...！」

「.....そう呼ばれているんだね...」

リカの目の前に立っているのは、正真正銘`鴉の眼、であつた。

「...仲間を随分と可愛がってくれたようね、本名が知りたいわ」

「...私に名前などない...どう呼んでもらっても結構...」

「思った通り変わっているわね...ここ数日監視していたのは、あなたね...？」

「...ああ、私だけじゃない、君は多くの者に視られているが...隙が全くないね...」

「...仕事柄、尾けられるのは慣れっこでね...その逆の場合も.....で目的は？」

「...君に興味を持った、友達と同様にね...」

「...成程、こっちで色々調べさせてもらった...あなたが何者か知っているわ...」

「...へえ、仕事が早いな、こちらも経歴を調べさせてもらった...本業は大手劇団の舞台女優、裏では忠実な国家の狗の...真似事、本業の方は、引退するそうじゃないか...悔いはないのか？」

「あなたには関係のないことよ、何処まで調べてた？」

「...関係があるもの、全て調べ上げた、今の時代、情報は簡単に手に入り、有利な武器になるからね...もし、裏稼業のことがばれたら、大変なことになるね...いつ起爆してもおかしくない爆弾のようなものだ...君たちは、大きなリスクを背負っているじゃないか...」

「...まあね、あなたこそ堂々と外を歩けないでしょう？その厚着はまだ早いわよ...」

リカは怯むことなく、言い返すネタはいくらでも持っていた。

「やはり、君は面白いな...是非仲間として迎えたい、どうだい？悪いようにはしないよ、転職にもってこいだ」

「...私は他にやりたいことがたくさんあるんでね...答えはノーに近いわ...あなたは被害者のはずなのにどうしてこんな真似を？」

「...！」

リカの発言が引っ掛かったのか、`鴉の眼、の滑らかな口調は、突然止まった。

「...権藤氏の極秘資料を読んで体が震えたわ、あなたは元々普通の人間だった...しかし突如、悪魔の実験のサンプルとなり、その姿に変わった.....」

権藤の極秘資料には、こう記載されていた。

実験の結果、私が開発したものに適した人材が判明したので、流れをまとめてみた。まず強靱で巨漢の男性で試そうとしたが、ことごとく失敗、次に若い健康的な男性も試してみたが、結果は同じであった。副作用で妄想、幻覚、攻撃的になるなど統合失調症様症状がみられることがある。

これ以上、死体の山を増やしたくないので一旦実験を中止して考え直した。あと考え得られることは一つしかないわけで、対象は女性ということになる。

しかし、こういった女性を選ぶかでかなり長い時間を費やした。まず若い女性で試してみた、長く苦痛に耐えたが失敗に終わり、次に筋肉質で体が大きい女性を試そうとした。これは成功かと思われたが、途中暴走して自滅した。また失敗は続くが、少し収穫があり、私は思わず心が震えた。このままめげずに実験を続けようとした。

そして、運命の時が訪れた。ある日、私は仕事の付き合いである場所に連れられた。そこは演劇をしている有名な劇場であった。

舞台作品を観るのは初めての経験であったが、開演してすぐ虜になってしまった。

出演者は、皆、女性で男性役も演じているわけだが、現実には居る男性より勇ましく色気があった。何より驚いたのは、プロのモデル級のスタイルと体の柔軟性、女性が女性を持ち上げるリフトという技であった。すっかり魅了された私は、嫌なことを忘れていい気分転換となった。

まさか、これが仕事に活かされるとは夢にも思わなかった。私は劇団員に対し、異常なほど興味を持った。求めるのは特異な肉体、答えを見出したい私は、若手の劇団員を一人拉致し、ついには実験に利用し、結果は成功した。見事に薬の苦しみに耐えて、究極の生命体に転生したのである。

開発した薬品に適しているのは、地道に鍛錬を積んでいる肉体で柔軟性があり、持久力がある女性と判明したのである。これでようやく、長きにわたる実験に成果が出たこととなった。この画期的な研究で誕生した薬品を、墮天使の贈り物「ルシフェル」と名付けた。

資料には背筋が凍る内容で埋まっており、やっていることは極めて残忍な大量殺人であった。これにより、権藤は被害者ではなく加害者の印象が強くなったのであった。リカは、身内が関わっていることに対し、冷静ではいられなかった。

「...あなたがうちの劇団員だなんて...！信じたくないわ」

「...事実だ、素直に受け止めてもらうしかない...先輩」

「.....ただ、あなたと会話して同業者だということがよく分かった...その羽根に覆われた上着で体を大きく見せて、男性を装っている、実際は細身、声は潰して、男性の口調で話している...男役の独特なキザな言い回しが耳に残るんでね...」

「...さすがだね、私はもう女性を捨てた...前職で経験したことが役に立っているよ...それで評価は？」

「...下手とは言えないけど、本番の舞台での経験不足が目立つ、高得点ではないわね」

リカは先輩の一面を見せ、率直に後輩を批評した。

「私もあなたのようになりたかった...どうしてこんな目に遭ったのか分からない、一生、神を恨むね...」

「.....あなたには訊きたいことがたくさんある、例の研究所のこと、権藤氏や関係者を何故殺したか、海外犯罪組織とのつながり、そして仲間に投与したものなど...どれから話してくれる...？」

「...どれも説明するのに時間が掛かりそうだね...一番知りたいことは何？」

「...そうだね、やはり仲間のことが気になる...彼女はここ数日、あなたのことで悩まされている、投与したのは危険な代物でしょ？...この先、どうなるか知りたい...」

「...フフ、順調のようだね、そのうち苦痛が快樂に変わる...」

「...私は意外と気が短い、回りくどい言い方をせず早く言いな...！」

リカは苛立って、若干声が低くなり、`鴉の眼、を思い切り睨み付けた。

「...種を植え付けたのさ、遅効性だからじき効果が表れ、生まれ変わる...私のようにね...！」

「...やはり...！何故、彼女を？」

「.....同士を集めていてね、とは言っても強制的にだけど...彼女は充分条件を満たしている...勿論、君もね！」

「...！成程、それでサユミと同じように薬物を投与するため襲ったわけだ...」

「ああ、大人しくしないなら力づくでこの薬を注入する...！」

「鴉の眼、は、手品のような手つきで注射器を出した。

「...こっちも容赦しないよ、あなたを捕らえたら一気に仕事が片付く...どうせならお友達も呼んだら？」

リカは、物陰に隠れている「鴉の眼、の仲間に気づいていた。彼女は多くの監視役に包囲されていた。

「その必要はないよ、私一人で楽しませてもらう...」

リカは軽く笑みで返し、戦闘態勢を取ろうとした。しかし、こんな時に限って銃を携帯しておらず、丸腰で相手をしなければならなかった。「鴉の眼、は構えて先手を取ろうとして、指先をぴんと伸ばした。それは鋭利な刃物のようで、リカに向かって何度も突こうとした。リカは、「鴉の眼、の強力な突きを紙一重で避けていき、反撃の時を窺っていた。

「！」

リカは隙を狙い、「鴉の眼、に足払いをして体勢を崩した。彼女は、すぐに押さえつけようとするが、「鴉の眼、はすぐさま体勢を立て直して距離を取った。次はリカの反撃が始まり、強烈な蹴りをお見舞いした。「鴉の眼、は瞬時に攻撃パターンを読んで防ごうとするが、防いだ腕はあまりの威力で痺れていた。「鴉の眼、は苦戦する中、楽しそうな表情を浮かべた。リカの方は、真剣な表情を崩さないまま攻撃を続けた。そして、ついに追い詰めることが出来て、彼女は「鴉の眼、の腹部に蹴りの突きをお見舞いした。

「？」

しかし、手応えがなく、リカの前の標的は、いつの間にか黒羽根の塊となっており、姿がなかった。これは、「鴉の眼、が得意とする変わり身の術であった。気づけば、「鴉の眼、はリカから数メートル離れた場所に居た。

「ちっ、すばしっこいわね」

「...惜しかったね、なかなかやるじゃないの...続きはするだろう？」

「勿論、これからよ」

リカは一呼吸して「鴉の眼、の挑発に乗った。

「...ふ」

ゝ鴉の眼、は軽く不気味な笑みを浮かべ、何故かりかに背中を見せてそのまま走り去った。

「...なめるのもいい加減に下さいよ！」

リカは、罨と分かっているながらゝ鴉の眼、を追いかけた。彼女は、並木道を駆けて行き、木々の茂みの中で消えた。

「...いい歳してかくれんぼか」

リカは顰め面でゝ鴉の眼、の気配を探った。ゝ鴉の眼、は暗闇に紛れ、ひっそりとリカの隙を狙っていた。さすがにリカも気配を上手く察知することが出来ず、相手から来るのを待った。すると、ゝ鴉の眼、は素早くリカに飛び掛ろうとした。彼女は逃げ遅れてしまい、体を締め付けられた。その時のゝ鴉の眼、は、まるで獲物を狙う大蛇であった。

「...グ...苦しい...！...」

リカはもがき苦しみ、抵抗しようとするが、ゝ鴉の眼、はビクともしなかった。ゝ鴉の眼、はリカの動きを封じ、その隙に例の薬品を注入しようとしていた。

「.....なめんなよ！！！！！」

リカは、急に大声を出して、とてつもない怪力でゝ鴉の眼、の体を持ち上げた。

「...！」

リカはゝ鴉の眼、をおんぶした状態から思い切り上に放り投げた。ゝ鴉の眼、は、そのまま地面に叩き付けられそうになったが、地面に着く前に両手を左右に広げて、ピタッと停まった。その姿は宙に浮いているように見えた。

「...はあ、何でもありか...」

リカは、呼吸を整えて悔しい表情を浮かべた。

「...はは、ますます好きになった、神経が高ぶってたまらないよ」

二人はほぼ互角で、戦いは激化していく一方であった。綺麗に整備された公園内は、二人の攻撃で次第に荒れ始めて、静けさは無くなりつつあった。

「...これはまずい！」

お互いの攻撃で並木の木々をなぎ倒した後、いつの間にか、二人は公園の外に出ていた。`鴉の眼、は構わず公道まで後退した。

「...どうした？掛かってこいよ」

「あいつ、わざと外へ...！」

リカは、騒ぎになるのを気にして、躊躇しているようであった。そんな時、車が数台、リカたちの近くを走行していた。

「...しまった」

リカは車に気づき、歩道に戻ろうとするが、`鴉の眼、はじっとその場で立ったままであった。

運転手は`鴉の眼、の存在に気づき、何度もクラクションを鳴らすが、`鴉の眼、は無視してどうもしなかった。焦った運転手は、ブレーキが間に合わず、ハンドルを切って避けようとした。しかし、操作を誤り、対向車線の車と衝突してしまい、さらには後方の車にも衝突して大事故を招いた。

「...何てことを！」

リカが悲惨な光景を目にしている中、`鴉の眼、は、無邪気な子供のような表情を浮かべ、嬉しそうであった。

「早く私をどうにかしないと、犠牲者が増えていくよ...」

`鴉の眼、は余裕の表情を浮かべ、挑発を続けた。幸い真夜中で人氣がなく、車の量が少ないので、被害を最小限に抑えることが出来るが、それでも、リカはこの状況は不利だと悟って何か策を練った。

「どうした？考え事か？」

「...！！」

隙だらけのリカに、`鴉の眼、は容赦なく攻撃を仕掛けた。

「...ズバ」

`鴉の眼、は、凶器と化した手でリカの体を斬りつけた。致命傷にはならなかったが、かなりのダメージで、リカの動きは少し鈍くなった。

「.....悔しいけど、ここは退却ね...」

リカは反撃をしようとせず、逃げることに集中した。当然のことながら、`鴉の眼、は逃がそうとせず、次なる手を考えていた。

「？」

気づけば、リカの周りに無数の黒羽根が舞っており、たちまち、彼女を囲うようにして渦巻状になっていた。そこから脱出しようとするが既に遅く、渦を卷いた羽根は、リカの体を覆って動けないようにしていた。

「...が...苦しい.....息が...！」

やがて、黒羽根は密閉された暗闇を作り、中の酸素はわずかとなった。最終的にリカを閉じ込めた羽根の塊は、綺麗な球を描いていた。リカはそれが原因で、完全に沈黙した。

「.....やっと大人しくなったね、とんだじゃじゃ馬だ...」

身動きが取れないリカの傍に`鴉の眼、が現れて、背後から抱きしめた形で彼女に体を締め付けていた。リカは二重に体を固められ、為す術がなかった。

「...ちょっとちくつとするが我慢してくれ」

優位に立った`鴉の眼、は注射器を取り出し、強引にリカの腕に注入した。

「...あ...が...！！！」

リカは、危険な薬剤を注入された瞬間、引きつった声を出して、力が抜けていくようであった。

外の世界では、衝突事故と車道の真ん中にある黒い球体で騒ぎになり、野次馬が集まっていた。しばらくすると、黒い球体に異変が起こり、徐々に形が崩れていき、羽根が一気に散らばって行った。そして、中からリカの姿が現れて、ようやく地獄から解放されたのであった。

「...仕事は終わった、また会おう」

`鴉の眼、はそう言い捨てて、リカの前から姿を消した。また、`鴉の眼、の仲間の気配も同時に消えていた。

リカは意識が朦朧としていたが、パトカーのサイレンの音が耳に入ったことで、我に返り、全力でその場から走り去った。野次馬たちは、呆然と立ちすくんでいた。

リカは、とてつもない敗北感を味わいながら姿を消した。

この悪夢のような出来事がきっかけとなり、さらなる絶望的な展開が、待ち受けていたのであった。

パトカーのサイレンが鳴り響く真夜中、負傷したリカは、ある場所に転がり込んでいた。そこは住宅街にある診療所であった。リカはそこで治療を受けていた。

「.....全く、今夜は特別よ、そろそろ寝ようと思ってたんだから...」

ぼやきながらリカを治療しているのは、三十代の女性医師であった。

名はアンジュ、リカの親友で現在、街中の診療所を営んでいるが、以前は、リカと同じ歌劇団に所属していた。ファンに惜しまれつつ、七年で退団した。普通の男性より逞しい印象があるため、男役が似合うが、彼女は、可愛い娘役をずっと演じていた。副業として、テレビに出演をしており、退団後も多くの劇団員と付き合いがあり、患者は劇団員が多く、リカもよく利用している。

「.....悪いわね、他に当てがなくて...」

リカは、大きな病院だと、一般市民に多大な迷惑が掛かると思って配慮していた。

「...怪我は大したないわ、問題はそれよ...」

アンジュは、リカの二の腕に注目して、そっと指差した。見ると若干注射された跡が残っていた。

「.....これは治せないわよね？」

「...ええ、専門外よ、悪いけど、私の力じゃとても...ただ事じゃないわね...？」

「ええ、とても厄介よ...」

「私は、もう裏の世界と関わっていないから情報は入らないけど、かなり危ない橋を渡っていることは分かる、良かったら話してよ、治療代はタダで一晩泊めてあげるからさ...」

リカは、アンジュの優しい言葉に感謝して安堵の表情を浮かべた。リカは、親友の診療所で一晩過ごすこととなった。

一方、一仕事を終えた `鴉の眼、は、隠れ家に帰還していた。彼女は従者に囲まれ、大きく

て綺麗に装飾された椅子に腰掛けていた。頬杖を突いたり、足を組んだり、何ともふてぶてしい態度であった。

「今夜は実に愉快だ、そろそろ仕上げといくか...」

鴉の眼、は気分良くしている中、一人の従者が彼女の前に現れた。その従者は、他の従者と何か違う空気感を持っていた。その従者は黙って 鴉の眼、の前で跪いて、忠誠を誓っているようであった。

「.....いい仕上がりだ、早速働いてもらうよ...ふふ」

鴉の眼、は不敵な笑みを浮かべ、歓喜に酔いしれていた。

そして、恐怖の夜が明けて、新たな一日を迎えようとしていた。小鳥の囀りが聴こえる清々しい朝に、忙しく外出する者がいた。それはリカであった。アンジュは、診療所と併設されている自宅で眠っており、リカはお礼の書置きを残して、アンジュを起こさず診療所から去ろうとした。リカは自宅に戻ろうとするが、突如、自分のスマートフォンに通話着信が入った。

リカは、発信者の名前を見て、嫌な顔をした。発信者は安藤であった。切れば怪しまれるので、彼女は仕方なく電話に出ることにした。

「...もしもし？」

「.....今、家じゃないな？何をしている？」

安藤は機嫌悪く、挨拶なしで早速本題に入ろうとした。リカの居場所は、スマートフォンのGPSで探っていた。

「...ちょっと友達と朝まで飲んでいたのよ」

「...下手な嘘だな、ネタはあがっているぞ」

安藤は、あっさりとリカの嘘を見抜き、真相を訊きだそうとしていた。今朝の朝刊に昨夜起きた 鴉の眼、との騒動が小さく載っていたが、安藤はこれを見逃さなかった。記事に目を通すと、交通事故と処理されているが、現場はリカの自宅に近いため、怪しいと踏んだ。それですぐさまリカに問い詰めようとした。

「...さすが、全てお見通しね、悪いけど今は話せない...色々とあってね...会ってから話すわ...」

「.....一気に進展したな、それで奴には会ったのか？」

「...ええ、私、狙われているみたい...喧嘩負けちゃったわ...」

「.....そうか、お前でも敵わない相手だったか...その声だと元気そうだな...それでこれからどうする？」

「...さ～昨夜のことで疲れたから帰って寝たいわ...」

「...その方がいい、しばらく外を出歩くな、こっちもいいネタが入ったんだ、近いうちにそっちに行く...いいな？」

「りよ～かい」

「.....権藤の研究資料に全て目を通したのか？」

「...ええ、隅から隅までね...あなたの言った意味が分かった...権藤という男、ぶっとなでいるわね、許せないわ...！」

「...ああ、天才の枠を超えた変人だ... `鴉の眼、とやらが被害者側だったわけだ...」

「...間違いない、資料のリストに彼女の写真が載っていたわ...」

「お前の後輩だろ？」

「...はっきり知らないわ、まだ無名の新人でしょう」

「.....お前にとって辛い相手だ...次はちゃんと対応出来るのか？出来なければ死ぬぞ」

「...ええ、勿論、心得ている...」

その時のリカは、切ない表情を浮かべていた。

「...とにかくそろそろ終いにしよう、解決しても後味が悪いと思うが...」

「...そうね」

電話を切った後、リカは少しの間、そっと目を閉じて、じっと立ち止まった。朝の冷たい空気が彼女の傷口に沁みていた。

自宅マンションに着いたリカは、エレベーターで自室に行く前に、エントランスに設置されているポストの中を覗こうとした。

「...！」

すると、朝刊と案内の郵便物の他に、黒い怪しい封筒が一緒に入っていた。切手は貼られておらず、差出人も不明であった。どうやら差出人から直接投函された物であった。リカはその場で開けず、自分の部屋で開けることにした。

自室に帰ってきたリカは、まず、冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出して飲み干し、気持ちを落ち着かせた。そして、問題の黒封筒を開封しようとした。中には手紙が一通入っていた。目を通すと差出人が判明した。

この手紙を読んでいる時、あなたは疲労感でいっぱいだろう。しかし、まだ終わってない。楽しいショーの続きを見たければ、誰にも言わず一人で来るように...また会えるのを楽しみにしている。

通称 〃鴉の眼、

〃鴉の眼、の手紙に目を通したリカは、少し苦い表情を浮かべた。指定された時間は日付が変わる深夜零時丁度、同封された地図で行先を確認して、リカは決着をつけるために 〃鴉の眼、と会う決意をした。

リカは、念のために 〃鴉の眼、と会うことをサユミに伝えようとしたが、電話はつながらず、留守電に伝言を残したり、メールを送ったりと返事をもらうために手を打った。しかし、彼女から返事が返ってくることはなかった。その時、リカは何か用事があって出られないと思い込み、追求しようとしなかった。

〃鴉の眼、と会うまでまだ時間があるため、リカは、しばし休息を取ろうとした。

ふと気づけば、リカは光に閉ざされた闇の空間にいた。彼女は何故そんな場所に居るか分からなかった。

「...ここは？」

何もない静かな空間でリカは途方に暮れ、しばらく歩き続けた。歩いても歩いても同じ光景が続き、さすがに飽きてきたリカであったが、目の前にぽつんと一人の後ろ姿が見えた。彼女は何か希望の光が見え、その後ろ姿を追った。

「.....ちょっと待って！」

リカが声を張り上げて呼び止めようとするが、前の人影は一定の速度で歩き続けて止まろうとしなかった。リカは走って前の人影に追いつき、肩をポンと叩いた。すると、謎の人物はゆっくりと振り向いた。

「...！！」

リカは呼び止めた相手の顔を見て、思わず背筋が凍りついた。

「.....なぜあなたが...？」

謎の人物の正体は、サユミであった。しかし、普段の彼女と雰囲気違って、顔色は蒼白で目つきは悪く、まるで別人であった。サユミは、無言のままリカの手を払いのけて、そのまま進み闇の方へと消えた。リカは、動揺を隠せずそのまま手と膝をついた。どうしていいかわからずじまいの彼女であったが、しばらくすると、自分の異変に気付いた。

「.....何？体が.....！！」

彼女の体は、見る見ると毛に覆われ、目は充血し、牙が生え、爪が急激なスピードで伸び、野獣に変身していった。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

変身したリカは、苦しみを訴えるかのように咆哮した。

「.....！！！！！！！！？」

その時、リカは咄嗟に飛び起きた。彼女が居る場所は自宅のリビングで、どうやら今までの出来事は、夢のようであった。悪夢に魘され、リカは、大量の汗を掻いていた。

「.....はあ、眠らせてもくれないの？...っけもう夕方か〜結構眠ったようね〜」

リカは嫌な目覚めで休息を終え、変な夢でサユミのことが気になり、返事がないか確かめるが、彼女からの返事は一切なかった。

「嫌な予感しかしないんだけど…」

リカは、不安と汗を吹き飛ばそうと、バスルームへと飛び込んだ。シャワーで汗を流した後、彼女はせっせと出掛ける準備をしようとした。簡単な料理で食事を済ませて、服装や持って行く道具を選んだ。

彼女は本業でも副業でも、仕事柄、シックで目立たない服を好んで着ている。華やか衣装は本業の舞台の時に着るくらいであった。季節が秋に変わろうとして、日が沈み始めると若干肌寒さを感じるため、長袖のメンズ用シャツをクローゼットから取り出した。自分の部屋には武器が収納されていて、愛銃を取り出して弾を補充した。

リカの愛銃は、グロック26というオートマチック式の拳銃で、彼女専用に改良されている。掌紋認証システムが搭載されていて、持ち主以外の者が引き金を引くと強力な電流が流れる仕掛けとなっている。その他に磁力センサーが内蔵されており、手放したとしても身につけている特殊ブレスットに引き寄せられ、瞬時に発砲出来る。また、発信器も内蔵されている。

リカは愛銃をホルスターに納め、黒のジャケットで身を包んだ。そして、髪型をオールバック調に整え、そろそろ出発しようとした。

リカはマンションの駐車場へと向かい、愛車のアルファロメオMITOに乗り込んで出発しようとした。外に出ると、空は真っ暗で彼女はカーナビに頼らず、頭の中で行先までの地図を描いて発進した。

鴉の眼、が居る場所は、混んでいなければ半時間以内に着ける距離であった。リカの運転する車は、賑やかな繁華街から離れて山車道の方へと進んで行った。リカの所属する劇場は、山に囲まれたのどかな環境に建っていた。山手には、高級住宅地が建ち並んで、そこから街の夜景を一望できた。

リカは高級住宅街を抜けて、人気のない場所まで進み、獣道の前で車を停めて、自力で目的地へと向かおうとした。周りには当然灯りはなく、視界が悪いため非常用ライトを取り出した。

そして、しばらく足場の悪い獣道を歩いて行くと、重い空気がのしかかり、どうも居心地が悪かった。何かを感じ取ったリカは、警戒して歩くスピードを緩めた。

「...！！」

すると、前方に人影が見えて、リカは、すかさず銃を構えた。

「.....」

しかし、前方の人影は、抵抗せず手を挙げて、じっと立っていた。

「.....あんた... `鴉の眼、じゃないわね...仲間？」

「.....」

謎の黒ずくめは声を出さず、ジェスチャーでリカに指示をした。

「.....何？案内してくれるの？」

黒ずくめは二度頷き、奥へと歩き出した。

リカは、呆れながら黒ずくめの後をついて行った。途中分かれ道となっており、案内役が居なければ、迷っていたかもしれないとリカは思った。奥に進むにつれて異様な空気が流れ、立ち入り禁止のための柵が造られているが、かなり古くくたびれており、長い間、放置された状態であった。数分ほど険しい坂道を登って行き、なだらかな

地に辿り着くと、そこには大きな洞穴があった。

「.....ここに奴が...！」

案内人の黒ずくめは、一度リカの方を振り向いてから洞窟に入った。彼女は緊張しつつ洞窟へと足を踏み入れた。

中は思ったより道幅が広く、かなり距離があり、ひんやりした空気が流れていた。耳を澄ませると、雄叫びのような音が聴こえ、その正体は、外からの強風のものであった。その夜、台風が接近しており、その影響のものであった。黒ずくめはかまわず前に進んで行き、中間地点でリカの前から姿を消した。

「...あれ？どこ行ったの？ここまだ途中じゃあ...？」

不安に駆られるリカの声が、洞窟内に響いた。

「……もう一本道だ、そのまま前に進めばいい、私は、そこで待っている…！」

「…え？」

その時、何処からともなく、`鴉の眼、の声が聴こえ、リカは指示に従った。

しばらく歩くと大きな空洞があり、ゴールのようであったが、真っ暗で`鴉の眼、の姿を確認することが出来なかった。

「ちょっと何処に居るの？」

すると、急に火が灯され、洞窟内一帯が一気に明るくなった。

「…首を長くして待っていた…ようこそ我が城へ…」

リカの前に、薄気味悪い笑みを浮かべた`鴉の眼、が現れた。

「……ここに来るだけでどっと疲れたわ、あなたの部下か知らないけど、もう少し愛想がいい案内役をよこしなさいよ」

「余計なことを喋らないよう黙っている、悪く思わないでほしい…」

気づけば、リカは`鴉の眼、の従者に囲まれていた。

「…それで今度は何の用？こんな台風接近時に…」

「天候には恵まれなかったが、今夜は記念すべき夜だ…存分に楽しんで行ってもらおうと思う…」

「…早くケリをつけたいんでね…もう喧嘩の続きする？前の時は負けたつもりはないけど…！」

「…まあまあ、そう熱くならないで、楽しみは最後にとっておいて、君には見せたいものがあるんだ…ついて来てくれたまえ」

「鴉の眼、は、齒が浮くような台詞でリカを招き入れた。後から気づいたが、周りを見渡すと人工的に造られた通路や階段があった。

「ここは一体？」

「君でもここは知らないだろう？案内してあげよう」

リカの周りには、監視役として従者がつき、鴉の眼、は案内役に徹した。人工的な通路をしばらく歩いていると、また新たな空間が広がり、リカは、衝撃の光景に思わず口をぽかんと開けていた。

「...これは...！」

目の前には、古びているが立派な建造物がいくつも建ち並び、駅のホームもあり、電車一両がそこに停まっていた。また、重機があちこちに残っており、この場所は建設途中のようで、明らかに一つの都市であった。

「...どうだい？知らなかっただろ...？こんな物があったなんて...」

「...何なの、ここは...？」

リカは、目を点にして鴉の眼、に質問した。

「.....いわば見捨てられた理想だ、本当ならここに新たな都市が出来る予定だった...しかし、計画は失敗した...」

「...あなた、色々と詳しそうね」

「ああ、今は隠れ家として使わせてもらってる...その前は研究施設として使われ、私はここで転生した...良かったら教えるけど、この秘密を...」

リカは頷き、鴉の眼、の話を聞こうとした。

「...もう三十年くらい前になる、発案は歌劇団創始者である財界トップの一族、新たな街づくりをテーマに大きな計画が実行されようとしていた...一つは、山中に住宅地、娯楽施設建設、もう一つは、民間鉄道を通して下界の中心繁華街、歌劇団劇場を行き来出来るようにする...まさに夢のような計画だった...」

「そんなことが...！全く知らないわ」

「私もここに来るまで知らなかったよ、極秘で行われていたんだろう...」

「...でもこの様子だとまだ途中みたいだけど...？」

「ああ、計画は難航していた、山肌を削り自然破壊することに反対する者が結構居てね...何度も話し合ったが、意見は食い違う一方だった...そして、虚しく時間が経っていき、障害が次々と舞い込んできた...」

「障害？」

「...まずはバブル経済崩壊、他に歌劇団劇場の観客減少、関西の大震災、所有している人気娯楽施設の閉鎖、これらが原因で、理想の計画に手をつけられなくなった...どうにか困難をクリアして、山手の高級住宅街は実現出来たわけだが、この通り、大規模な都市開発計画は白紙になった」

「成程、知らない所でそんなことがあったのね」

「黒歴史みたいなものだ、知っているのもごくわずかだろう...」

「...あなたにはまだ訊きたいことがある...なぜ研究者たちを殺したのか...」

「いいだろう、話そう...彼らは、いわば生みの親だが、ある時、異変が起きた...最強の人間を量産させようとするが、日々、実験体が強力になっていくことを恐れ、手を引こうとしていた...つまり我々はお払い箱...それで反乱を起こした、今まで彼らの言いなりだったが抵抗したよ、それで...」

「...殺したのね！」

「...ああ、何処に逃げようと逃がしはしない、彼らが居なくても、研究は続けられる...貴重な根を絶やしていけない...転生して知能も発達してね、せっせと自分の仲間を増やしていったよ...」

「.....海外犯罪組織との関係は？」

リカは次の質問に移ろうとした。

「...大事なお得意様だ、あらゆる場所から実験材料をかき集めてくれるんでね、厚い信頼関係で成り立っている、彼らも追っているんだったね？」

「ええ、元々はそっちを追っていたんだけど、だいぶ、あなたに振り回されたわ...目的は何なの？」

「.....偉そうにいうべきじゃないが、この世界を闇へと葬り去る、一度リセットするべきだと考えている...」

「とてもついて行けないわね...」

「じき、理解してもらえらるだろう」

「...それでこれから何が起こるの？」

「...今夜は大事な儀式の夜だ、君が居なくては、何も始まらない...君は生贄だ...」

「怪しい宗教団体？そういうのお断りだけど...こっちも暇じゃないんでね...さっさと始めなよ！」

「...それではもう一人の主役に登場してもらおうか」

「え？」

するとホームにある車両の中から一つの気配を感じ、それは姿を現した。

「...え？どうして？」

リカは目の前の人物と顔を合わせた瞬間、鳥肌が立った。

「...ふふ、驚きの連続だな、彼女はずっと君を待っていた...」

驚愕するのも無理はなく、突如登場したのは、サユミであった。しかし、彼女はいつもと様子が違っていた。美しくはあるが可憐さがなく、まるで人形のように、服装は黒で統一され、舞台の衣装のようであった。

「...道理で連絡が取れないわけね、あなたが拉致してたわけだから...」

「それは違うな、彼女が自ら望んだことだ、もう立派な仲間だ...」

「...何を馬鹿な！サユミを連れて帰るわ、さあ行きましょう.....？」

サユミはリカの呼び掛けに対し、無反応であった。

「無駄だよ、彼女は私の声には反応しない...もう言いなりだ」

「.....洗脳したのね？」

リカは怒りを露わにして、`鴉の眼、に訊ねた。

「...彼女を返して欲しければ、条件を呑むことだ」

「...条件とは？」

「.....彼女と闘ってもらう、勿論、本気でね...」

「何ですって！」

「彼女は私のように生まれ変わった...どれほどの力があるか確認したくてね...」

「...まさか例の薬のこと？」

「ああ、もう効果が表れ、見事に開花した...あとは実戦経験だ、相手役は君が適任だろう、さあ、面白いショーを見せてくれ」

「...ふん、そんなこと応じるわけが...！」

従者の一人がサユミに近づき、あるものを渡した。それは洋風の槍で`一角獣の槍 ユニコーンランス、というサユミの専用武器であった。その槍は、彼女の身長（一六九センチ）をはるかに超え、一瞬で危険な武器と知らしめた。

「...サユミ、あなた...！」

「君がやる気がなくても、彼女は闘う気満々だ...言うておくが、逃げ場はないよ、周りにいる連中も私ほどではないが、かなり手強い、いくら君でもいっぺんに相手は出来ないだろう...？」

「彼らも転生した者たち.....！何処までも非道な...！」

リカは頭の中で色々考えるが、いい策が浮かばず、立ちすくんでいた。

「！」

すると突如、サユミが襲い掛かり、リカは、紙一重で攻撃をかわした。彼女は、衝撃で頬を切っていた。

「...もう始まっているよ、ぼやぼやしている暇はないんじゃないかな？」

「...く、どうやら本気のようなね！研究所での続きでもしましょうか...」

リカは、焦りの表情を浮かべて構えようとした。

「じっくりと見物させてもらうよ」

そう言って、`鴉の眼、たちは巻き込まれないよう安全な場所へと離れた。洗脳されたサユミは容赦せず向かっていき、リカは対応に追われた。彼女は避けてばかりで

愛銃を抜こうしなかった。

「...おやおや」

`鴉の眼、は、不敵な笑みを浮かべて高みの見物をしていた。リカは`鴉の眼、の条件に応じたが、まだ積極的に動こうとしなかった。サユミは、細身の体で巨大な槍を巧みに操り、リカを追い込んでいった。サユミの技量は、明らかに初めて腕を交えた時より向上していた。

「...サユミ、目を覚まして！」

リカの願い虚しく、サユミは命令通りに動くロボットのように攻撃を続けた。

「...避けてばかりでは、無駄に体力を消耗するだけだ、反撃しないとやられるぞ」

「...五月蠅い！」

リカは、`鴉の眼、の忠告を無視して防御に徹した。彼女はたちまち無駄に体力を消耗していき、動きが鈍くなっていた。リカは危機を感じ、建造物が密集する場所に身を隠そうとした。サユミは即座に彼女の後を追った。`鴉の眼、たちも監視するため、二人を追った。リカは、物陰で体力を回復させ、サユミの隙を窺った。彼女は胸元のホルスターから愛銃を抜こうか抜かないか躊躇していた。だが、そんなことをしているうちに二人の距離が詰まって行った。

サユミは、槍をゆっくりと振り上げ、リカはその瞬間、銃を抜いてサユミの前に現れた。サユミは撃たれると思って警戒したが、リカは撃とうとせず、その場から去って行った。

「これは演習じゃないってことが分からないかな～」

`鴉の眼、はつまらない顔をして、次なる策を考えているようであった。

リカたちは建設中の街中で暴れ回り、サユミの槍の威力は凄まじく、瞬く間に周辺は瓦礫の山と化した。リカは銃を構えつつ、逃げることで必死であった。サユミの方は楽にリカの動きを捉えて、とことん追い込んだ。ついにリカは不利な状況が我慢出来ず、闘う意志を見せた。

「...ドン、ドンドンドン！！！！」

リカは引き金を引き、サユミは華麗な槍さばきで銃弾を弾き飛ばした。彼女は弾切れになるまで撃ち続けて、またその場から立ち去ろうとした。

「少しはやる気になったか...？」

`鴉の眼、に期待に胸を膨らませて、二人の死闘を観戦していた。

「.....ふう、彼女の洗脳を解かないと、どうしようもない、何か手は？」

リカは何度も考えるがいい策が思い浮かばず、とりあえず弾を装填した。サユミの猛攻はとどまらず、すぐにリカを見つけて仕留めようとした。サユミの一突きがリカに襲い掛かり、背後にある壁は粉碎されて、彼女は攻撃を避けきれず、かすり傷を負った。そのまま倒れ込みと思いきや、リカは、銃身をサユミに合わせて、すかさず発射した。

「...！」

リカが発射した弾は、サユミの肩に命中した。彼女はわざと急所を外した。サユミは声を上げることもなく、衝撃でそのまま静かに倒れた。

「...はあ、はあ」

リカは、地に膝をついて呼吸を整えた。

「...今のはなかなか良かったよ、その調子で頼む...」

「.....ふう、何言ってんの？利き腕、潰したんだから勝負は決まりでしょう？」

リカは勝利を確信したが、`鴉の眼、はなぜか笑みを浮かべていた。

サユミは仰向けで寝ていたが、しばらくしてから何事もなかったかのように起き上がった。その姿はどうも不気味であった。

「...何？妙な違和感が...！」

「本番はこれからだ...」

リカは、`鴉の眼、の得意げな顔の意味を理解してなかった。サユミの撃たれた肩は何ともないのか、血も止まり自由に腕を動かして、自分の武器を拾い上げた。

「これは.....どういうこと？」

「...！」

さらに驚愕することが起こった。サユミは、肩に撃ちこまれた弾を筋力で押し出して摘出していた。

「どうだい？これでダメージゼロだ、残念だったな...これで振り出しだ」

「.....まさか例の薬の力？」

「ああ、薬の効果で驚異の防御力、回復力を身につけたわけだ、中途半端な攻撃は、通用しない、今度は急所を狙うんだな」

「ちっ...」

「さらに付け加えると、彼女はまだ本気を出していない...君もそうだろう？」

「...まあね、こっちは殺す気でやってないんでね...」

「...余裕があるね、まだどうにか助かると思ってるんじゃないのか？今、君に与えるべきものは敗北感、危機感、絶望感だ...」

「...どうする気？あなたも参戦する？」

「いや、わざわざ私自ら手を下す必要はない、そのクールな表情が一気に崩れる方法があるんでね...」

「じゃあ、見せてもらおうじゃないの...」

「鴉の眼、は、リカを陥れる策を持ち合わせていた。」

「...サユミ、もう本気で行きなさい、真の力を解放するんだ！」

サユミは、「鴉の眼」の命令に従い、その直後、彼女の体に異常が起きていた。

「...サユミ？」

サユミの様子を見ると、まず、体中に血管が浮き出て、鬼の形相になっていた。次に髪の毛が異常に伸びて、背面を覆うほど長髪になり、茶髪から青みがかった白髪へと色を変化していった。引き締まった体つきは、さらに筋肉質になり普段の彼女より大きく見えた。

「.....これが彼女の真の姿だ、本領発揮といこうじゃないか！」

「...まるで化け物じゃない、何てことを！」

リカは、サユミの変わり果てた姿を見て冷や汗が止まらなかった。

「さあ、波乱の第二ラウンドだ！」

リカが不安げな表情を浮かべる中、「鴉の眼」の掛け声がゴングとなり、本当の地獄が始まろうとしていた。二人の死闘が激しさを増すのと同時に、外では台風の影響で天候が荒れ、暴風雨が降り注いでいた。

「...サユミ、あなた...なんて姿に！」

劇薬を投与され、洗脳されたサユミは大きく姿を変えて、リカに襲い掛かろうとしていた。青みがかった白髪に鋭い目つきと爪、その姿は妖艶さを漂わせて、美しくもあり、背筋が凍る怖さがあった。

「これが薬の驚異的な力だ、彼女は、最強の肉体を手に入れたわけだ...いくら頭がきれる君でも勝てる策はない、さあ絶望を味わえ！」

`鴉の眼、は、サユミを利用して、リカを脅かした。

「...ちっ、時間を掛けるのが、逆に事態を悪くした.....！」

リカは下唇を噛みしめ、自分を責めた。

「...！！」

気づけば、リカの目の前にサユミの姿があり、得物の槍を振り下ろそうとしていた。リカは、咄嗟に攻撃を回避しようとした。

「...ボゴオオオオオ！」

地に叩き付けられた槍は、半径十メートル以上の円形の窪みを作るほど抉った。リカは逃げ切ることが出来ず、衝撃波で吹き飛ばされた。`鴉の眼、は、満面の笑みで二人の死闘を見届けていた。

「.....これは彼女の力じゃない、次元が違いすぎる...！」

リカは、化け物となったサユミの力に改めて驚愕した。サユミの猛攻は止まらず、標的となるリカは、微塵も落ち着く暇がなかった。洞窟内の建造物は二人の死闘の影響で耐えられず、次々と崩れていった。

「やれやれ、だいぶ家が荒らされたな、そろそろ引越するか...」

リカたちの闘いが激しさを増す中、`鴉の眼、は呑気に呟いていた。

リカは銃の連射で必死に応戦するが、今のサユミには全く効果がなかった。銃弾は体の至る場

所に命中するが、変身前より速い速度で傷口が回復していった。

今のサユミは、スピード、パワー、スタミナなど全て常人離れしており、とても太刀打ち出来そうになかった。

リカはひとまず瓦礫の山に身を潜め、弾を装填しながら策を練っていた。しかし、何も思い浮かばず困惑していた。

「...また時間稼ぎか、もう、彼女の力は実証出来た...そろそろ終わりにしようか.....あぶり出さんだ...！」

サユミは、`鴉の眼、の言葉に頷き、何かを始めようとしていた。リカは物陰からその様子を窺った。

サユミは、まず巨大槍を天に向け、ずっとその状態であった。何か起こるかと恐れたが、特に何も起こらず、静かな時間が流れた。それに引き替え、リカの呼吸の乱れは治まりそうになかった。異変が起こったのは中ではなく、外であった。悪天候の空を見上げると、広範囲で青白い光が発せられていた。

「...グォログォログォロ...！！！」

その後、とてつもない轟音が鳴り響いた。それは雷鳴であった。何度も雷鳴が起こり、雷が発生していた。リカたちが居る付近にも雷が発生し、ついには、落雷で多くの木々をなぎ倒した。その雷は、意思があるようで、あるものを狙っていた。予感の的中し、また落雷が起こり、それは山肌を貫き、リカたちが居る洞窟へと到達しようとしていた。サユミは雷が近づいて来るのを感じ取り、すぐ落雷地点の方へ飛び上がった。

「...一体何が？」

リカは、まだ状況が呑み込めず、呆然としていた。

雷は、ぴったりサユミが居る場所に落ちた。雷はサユミに直撃せず、彼女が持つ槍に吸い寄せられた。

「！！」

雷を吸収した槍は青く発光して、凄まじいエネルギーを帯びていた。サユミはその槍をリカが

居る地上に向けて、そのまま突撃した。

「.....何でもありなの？」

リカは信じられない光景を目にして、為す術がなかった。

「ドゴオオオオオオオオオオオ！」

洞窟内は雷光に包まれ、その直後、爆音が鳴り響いた。`鴉の眼、たちは、巻き込まれるのを恐れて避難した。サユミが落下した場所は、クレーター状の窪みが出来ており、地形が変わっていた。それはまるで隕石が落ちた跡であった。廃墟と化した都市部には、澄ました表情を浮かべたサユミが立っていた。

「...手加減を知らないな、そこを気に入っているんだが.....彼女の気を感じない...綺麗に消し飛んだか？」

`鴉の眼、の言った通り、リカの姿は見当たらなかった。

「.....残念だな、彼女にも期待していたんだが、やはり劇薬の力の前では無力か...」

`鴉の眼、は何処か納得出来ない表情を浮かべていた。彼女はリカの死体を確認したため、サユミと従者と共に探そうとした。一見、決着がついたように思われたが、耳を澄ませると、鼓動のような音が鳴り響いて、ここから想像絶することが巻き起ころうとしていた。

ここはある暗闇の中、リカはその場で動けずにいた。彼女は、サユミの攻撃で服はぼろぼろ、血まみれで瀕死の重傷を負っていた。心音が弱まっていき、あまりのダメージで痛みを感じず、リカにはうっすら黄泉の世界が見えていた。

「.....我ながら酷いざまね、悲鳴をあげることも出来ない...あとは死を待つだけか.....サヨナラ公演控えているっていうのに実に無念だわ...！こんな所で死ぬなんて.....」

リカは静かに目を閉じて、覚悟を決めようとしたが、何やら様子がおかしかった。

「...あれ？もう死ぬんじゃないの？死ぬ時ってこんな感じなの？.....」

リカには今の状況が把握出来ず、少しの間じっとしていると、またもや異変が起こった。

「...え？何？体が.....熱い！！」

リカは、耐えられない熱さにより、さっきまで弱かった鼓動が激しくなっていた。彼女は、体の異常に対し、抵抗することが出来ず、まばゆい光に包まれた。

「……ドドドドド！」

その時、瓦礫の山が崩れ落ちる音がして、`鴉の眼、たちはそれに気づいた。リカは瓦礫に埋もれていたが、押しのけて姿を現した。

「…まさか！」

`鴉の眼、は突然の事態に哑然とし、リカがいる方へと向かった。

「…！！」

リカの近くには一人の従者が居て、目の前にいるリカに立ち向かおうとした。しかし、`鴉の眼、がリカを発見した時、既に遅かった。リカに立ち向かった従者は、無残にも横たわっていた。こうして事態は急展開を迎えた。

第一章 鴉の眼編 第六話 悪夢からの脱出

鴉の眼、は目の前の光景に驚愕していた。彼らの前に立っているリカは、まるで別人であった。サユミと同様、大きく姿を変えていた。

リカの場合、背中を覆うほどの赤みがかったドレッドヘアーが目立ち、獣のような鋭い目つき、爪、牙まで生えており、まさに野獣であった。それは夢で変身した自分の姿に近かった。また、瀕死の重傷を負ったはずのリカの体は完治していた。

「.....これが彼女の覚醒した姿...！想像以上のものだ...！どうだ、最強の力を手に入れた感想は？」

普段、感情を表に出さない鴉の眼、は、リカの変わり果てた姿を見たことで、衝撃を受けていた。これが彼の真の狙いであった。

「.....グルルルル」

覚醒したリカは理性がないようで、口を利けなかった。彼女は倒した従者を蹴り飛ばした。

「...薬が効きすぎたか...？君に投与したのは新作でね、普通二、三週間掛かるところが、二、三日で効果が現れる...ただし、長時間激しい運動をしたり、命の危険性があれば一日で効果が現れる...実験は成功したようだ、実にめでたい.....さて、これで最強の戦士を二体手に入れたわけだが、どちらか消えてもらおう、殺し合って生き残った者を同士とする.....そういうことだから相手になるんだ...行け！」

鴉の眼、はサユミに命令し、覚醒したリカと闘わせようとしていた。サユミは素直に応じ、リカに接近していった。リカはサユミが近づいても全く動じず、じっと睨みつけていた。そして、サユミが構えとリカの顔が陰しくなり、何かを始めようとした。

「...ウオオオオオオオオオオオオオオオ」

リカは、急に叫びだした。それは凄まじい衝撃波を発生させ、サユミは身動きが取れなかった。鴉の眼、たちにも影響し、従者はリカの咆哮に耐えられず、ほとんど倒れ込んで気絶する者も居た。

「...素晴らしい！」

鴉の眼、にはリカの咆哮が応えておらず、異常なほど彼女の力に感動していた。

リカの咆哮に耐えたサユミは、怯むことなく、襲い掛かろうとした。リカもすかさず、戦闘態勢を取った。サユミは跳びあがり、リカを捉えて槍を力強く振り下ろそうとした。リカは避ける素振りを見せず、そのまま立っていた。

「...！！！」

サユミの強力な一振りがリカに目がけて浴びせられたが、どうも様子がおかしかった。砂埃が舞う中、サユミは地に足をつかず、宙に浮いていた。

「...なんと！」

サユミの槍は、リカの腕で防がれていた。リカは片腕で槍を押さえつけて、とてつもない怪力を披露していた。サユミは力負けして、一旦リカから離れようとした。しかし、リカは彼女を逃がそうとせず、槍の先端辺りを掴んで、そのままサユミごと放り投げた。サユミは天高く舞い、地面に叩き付けられた。リカはサユミが居る場所へと駆けて行き、彼女の様子を窺った。

「.....」

`鴉の眼、は、黙って成り行きを見ていた。放り投げられたサユミには特にダメージがなく、かまわずリカに迎え撃った。闘いは長引きそうで、実力は互角のように思われたが、覚醒したリカは狂暴で、パワーは圧倒的にサユミを凌駕していた。

「...ガシ！」

リカはサユミの頭を鷲掴みして、乱暴に振り回して、最後に地面に叩き付けた。サユミはかなりのダメージを受けているが、まともや、驚異の回復能力が働いて意味がなかった。死闘が続く中、お互いの力は少しも衰えることなく、無限大でただ無駄に時間が経っていくばかりであった。それにより、さっきまで機嫌がよかった`鴉の眼、は表情が曇っていった。

「...ちっ、これでは埒が明かない、あまり実力差がないとこうなるのは当然だが...」

`鴉の眼、はますます機嫌が悪くなり、あることを気にし始めた。結末が見えない状況だが、ピリオドを打つ事態は突然起ころうとした。

「.....！！！」

その時、`鴉の眼、の顔色が悪くなっていき、ある気配に気づいた。

「.....パーティーはもう終わりだ」

突如現れたのは、歌劇団に所属するミチコであった。

「...何だ、貴様？どうしてここが？」

「...以前からお前をマークしていてね、後輩のお蔭で辿り着けた...うちの看板女優返してもらおうか...？」

今のミチコは、普段のおっとりした雰囲気がなく、冷酷が見え隠れして別人であった。

「...彼女たちの仲間か...！一足遅かったな、可愛い後輩もあのざまだ」

「...あらあら、よくもあんな醜い姿に...お前もうちの劇団員出身だったみたいだけど、容赦しないよ、覚悟しな！」

ミチコは怒りを露わにして、`鴉の眼、は迫力で押されそうになった。

「.....ふふ、私に楯突く気か？それなら相手をしてやっていいが...」

「お前と遊んでいる暇はない、仲間救出を優先する...」

「...ほう、どうやって？あの二人の間に入れば間違いなく死ぬぞ」

「.....別に近づかなくても、二人の暴走は止められるぞ...」

「何...？」

ミチコは強気な発言をして、何かを始めようとした。彼女は静かに口を開き、何やら呟いた。

「...♪」

ミチコが発してるのは、歌のようであった。

「.....何だ？ここは舞台じゃないぞ、歌の上手さを自慢したいのか？」

`鴉の眼、はミチコを侮辱するが、状況は変わりつつあった。

「...！？」

ミチコの美しい歌声は、暴走しているリカたちの耳にまで届き、二人は反応して闘うのを止めて聴く姿勢を取った。

「.....この歌声...！まさか！」

鴉の眼、は、ある異変に気付いたが、時は既に遅かった。従者の様子もおかしく、頭を抱えて苦しそうな表情を浮かべた。しまいには、電池が切れたように動かなくなった従者が居た。

「♪♪♪～」

「.....歌うのを止めろ！！！！」

鴉の眼、にも影響して、逆上した彼女は、ミチコに襲い掛かろうとした。

「.....ぐは！」

襲い掛かった鴉の眼、は急に倒れ込み、驚愕の表情は浮かべた。

「リーダーの独唱会の邪魔をしないでもらおうか？」

「文句があるのなら我々が相手をする！」

「...まだ仲間が居たのか...！」

鴉の眼、の目の前には、さらに助っ人の歌劇団メンバーが立っていた。

一人目の参戦者の名は、エリコ。真っ直ぐな性格で、悪役からコミカルな役まであらゆる役柄を演じることができる。最近では実力が認められ、ミチコと同じく、ベテランが集まる劇団員グループへと配属となった。また、裏の世界でも優秀な密偵として活躍している。

二人目の参戦者の名は、アヤコ。遅咲きではあるが、圧倒的な歌唱力を持ち、表現豊かな演技に定評がある。普段でも男らしさが滲み出ており、男役に適している。サユミとは同期で頼れる兄貴分として、彼女を陰から支えている。裏稼業では、危険な敵地に乗り込み、日々、犯罪組織を撲滅している。

さらには、若手ホープから三人、参戦していた。

一人目の名は、サヤカ。長身を誇り、舞台映えする実力派若手歌劇団スターとして、現在売出し中である。彼女の母親も同劇団に在籍しており、父親はスポーツ選手の経歴があり

、恵まれた体型と運動能力を親からちゃんと受け継いでいる。愛車は国産車のセリカ。

二人目の名は、レイ。少女漫画に出てくる主人公のような美形で、早くから注目される舞台人である。純粹さと妖艶さを兼ね揃え、得意のダンスで舞台を彩る素質を持っている。裏稼業はまだまだ未熟なのが目立つが、潜在能力を秘めており、周りから期待されている。

三人目の名は、ミナミ。長身と鍛え抜かれた肉体とは裏腹に、愛くるしい表情が特徴である。彼女は地道に経験を積んでおり、同期のレイと同じくダンスを得意として、共に歌劇団の未来を担うスターとして、日々成長している。裏の世界でも新人で、先輩からみっちりと教育されている。

鴉の眼、は突然の六人の登場で、焦りの表情を浮かべた。

ミチコの歌は、リカたちにも効果が現れ、赤ん坊が子守唄を聴く時のように心地よくなり、ゆっくりと倒れ込んだ。ミチコは、それを確認して歌うのを止めた。

「...ね？言った通りでしょ、形勢逆転ってやつかな...」

鴉の眼、はミチコの得意げな表情が気に食わないようで、冷静な判断が出来なかった。

「.....許さないぞ、せっかくの楽しいショーを台無しにして...！このまま逃げられると思ってるのか？」

「ああ、そのつもりだけど、黙って通してくれないよね...？」

「...当然だ、私に楯突こうなど百年早い...身の程知らずもいいところだ」

「...妄想を膨らますのは勝手だけど、こんな作り物の部下を従えて、地下に籠って満足かい？」

「.....馬鹿にするのも大概にしろー！！！！！」

鴉の眼、は憤怒して、ミチコたちに襲い掛かろうとした。

「それじゃあ手筈通りに...」

ミチコは後輩五人に指示をして、自分だけリカたちのもとへと向かった。

洞窟内は至る所から従者が現れて、それはゾンビのようであった。完全に包囲されたミチコたちであったが、強行突破しようとした。ミチコは、装備している苦無を広範囲に打って突破口

を作った。エリコたちは、ミチコをリカたちのもとへと向かわせるために囿となった。

「さ～て、暴れちゃいますかね～」

敵に囲まれたエリコは、余裕の表情を浮かべて攻めようとした。彼女はヨーヨーを取り出して、それを武器として使用した。ヨーヨーは鋼鉄製で、距離を取りながら従者に放った。それは一撃で致命傷を与え、次々に従者は倒されていった。倒された従者はしだいに砂状に変化していき、風化していった。

「.....エリコさんはいつでも楽しそうだな、私は真面目すぎるのかな...？」

アヤコは皮の手袋を装着し、ぶつぶつと呟いていた。彼女は目で威嚇して、自分の領域を作った。何人もの従者が襲ってくるが、アヤコは微動だにしなかった。彼女は拳を握りしめて従者を殴打した。アヤコのパンチは鉄球のように重く、一瞬で五人以上の従者をなぎ倒した。彼女は軽やかな動きで従者を翻弄していた。焦った従者は、銃や剣を使おうとしたが、アヤコは、既に次の手を打っていた。

「...？」

彼女の口から低音の声が発せられ、その影響か、従者の持つ剣は勝手に折れて、銃は使用不能となった。

「...未完成だけど、結構上手くいったな～またミチコさんのレッスン受けないと...」

「私たちも先輩たちに続くぞ！」

「了解！」

若手のサヤカ、レイ、ミナミは、先輩たちに負けじと敵に挑もうとした。

サヤカは、いつの間にか標的の背後に回り、敵の武器を奪い取って、それで応戦していた。レイは常人以上のスピードで標的を凌駕して、接近戦で華麗な連続攻撃を浴びせた。ミナミは可憐な表情から想像出来ない怪力を披露して、標的は手が出せず、いとも簡単に、次々となぎ倒されていった。ミチコは後輩を信頼し、ひたすら前進した。

一方、ミチコの歌で気を失ったりリカは少しずつ意識を取り戻そうとしていた。

「.....あれ？私どうなったの？」

リカは醜い姿ではなく、元の姿に戻っていた。彼女には覚醒した時の記憶がなかった。錯乱状態となっているリカであったが、さらに脅威が近づいていた。

「.....変身が解けようだな」

「...！！」

リカは、`鴉の眼、の影に覆われていた。

「...ショーはまだ終わっていない、まだ付き合ってもらおう...さっきみたいに暴れてもらおうか...！」

「.....もうあんたにはお手上げよ...」

リカは冷めた態度で大の字に寝そべり、抵抗しようとしなかった。

「素直に服従する気になったか？いい心がけだ...さあ来るんだ」
`鴉の眼、は優しく声を掛けて、リカに手を差し伸べた。

「.....ドン！！」

「？」

その時、銃声が鳴り響いて、熱を帯びた薬莢が転がるのと同時に事態は急変した。

「.....こんなことが.....騙したのか？」

リカは不意を突き、愛銃で`鴉の眼、に風穴を開けていた。手放した愛銃は内蔵された磁力センサーにより、ご主人のもとに吸い寄せられ、標的に噛みついたのであった。

「...私の本業は役者よ、勝つために手段を選ばないのはお互い様でしょ...？」

「...さすがは先輩...勉強になったが可愛くないね...」

「...あんたよりかはマシよ」

鴉の眼、は嫌味を言って、笑みを浮かべたまま風化していった。

リカは一呼吸して、ゆっくりと銃をホルスターに納めた。

「.....ケリがついたようね、手間が省けた...」

「...ミチコさん...どうして？」

リカの前には、苦無を構えたミチコが立っていた。

「...説明は後にして、今はここから脱出することを考えましょう、手伝ってもらえる？」

ミチコの傍には、意識を失ったサユミが居た。彼女もまた変身が解けていた。ミチコはサユミを担ぎ、リカはサユミの武器である巨大槍を運ぼうとした。

数えきれないほど居た従者は、エリコたちの手により全員倒されていた。

「...あなたたちは！」

「...どうも、初めましてに近いでしょうか？」

リカは、エリコたちとあまり面識がなかった。

「...細かい挨拶は抜きにして、早く出ましょう、台風とあなたたちの闘いで、地盤が崩れてきている...あと数分で土砂と岩盤で埋まってしまう...」

「.....ドゴゴゴゴゴゴゴ」

ミチコの言った通り、落盤の音が耳にはっきり伝わり、洞窟から脱出することに専念した。

「...急いで、生き埋めになる...！」

リカたちは、迷路のような通路を全力疾走で駆け抜けた。

「.....もう少しで出口だ！頑張って！」

ミチコの掛け声で、歌劇団メンバーは、外の世界へと必死に駆けていこうとするが、ここで

また問題が起きようとしていた。

「.....危ない！！」

リカたちの頭上に巨大な岩石が落下し、彼女たちは咄嗟に安全な場所に引き下がった。落下した岩石は、リカたちの通行を妨げた。

「...しまった、これじゃあ外に出れない！もうちょつとなのに...！」

「...完全に塞がれましたね、他に道はありません...」

「...こんな時に限って爆薬を持っていないなんて...万事休すか...」

「...助けを待つしかないのでしょうか？」

「...それは期待できないわ、助けのヘリが来るのは朝方で、指定した場所にしか来なから.....」

「.....そうですか、このままでは体が冷えて、窒息死してしまいます...何か手は？」

無駄に時間が流れていき、もう助かる手段がないと思われたが、一人だけある決断をしている者が居た。それはアヤコであった。

「.....あの皆さん、私に賭けてもらえませんか？」

「...何か策があるの？」

ミチコは、興味を抱いてアヤコに訊ねた。

「...ええ、一つだけあります！」

アヤコは真っ直ぐな目で、ミチコたちに答えようとした。

「...リカさん、その槍、借りたいんですが...」

「.....え？これは私のじゃないから別にいいけど....」

「...そうでした、サユミ、ちょっと借りるね」

アヤコは、意識を失っているサユミに囁いてから槍を手にした。

「アヤコ、どうする気？」

「.....この岩壁を破壊出来るのは、この槍だけです...そして、サユミの他に扱えるのは私だけ...やらせて下さい！」

「...分かった、あなたに命を預けましょう」

「ありがとうございます！」

アヤコは、仲間の期待を胸に臨もうとした。リカたちは、アヤコの邪魔にならないよう後方へと下がった。アヤコは槍の柄を強く握りしめ、構えながら集中した。そして、槍の先端を前方に激しく突いた。

「うおおおおおおおおおおお...」

アヤコの気合の突きで、岩壁は貫通していき粉碎された。これで外に通じる脱出口が作られた。

「やった！」

「...なんと、サユミ以外にあの槍を扱える者が居たなんて...」

ミチコたちは、アヤコの実力に驚愕している様子であった。アヤコは反動で尻餅をつき、息が上がっていた。

「...大丈夫？」

リカは、アヤコを気に掛けて手を差し伸べた。

「.....大丈夫ですけど、一度、使っただけで手が少し痺れています...あの細い体でよく振り回しているなど、同期ながら感心していますよ...はは」

リカはつられて笑い、アヤコと肩を組んで外へと出た。

外に出ると、さっきまでの悪天候が嘘のようで、静かな空間へと変わっていた。もう台風は過ぎ去って行き、雨もすっかり止んでいた。まもなく夜明けのため、空は明るく視界は良好であった。リカたちは無事救助へりに拾われて、朝日を浴びながら山岳地帯を後にした。リカは疲れでいつの間にか眠ってしまっていた。

鴉の眼、の巣は、土砂や落石で埋まって壊滅した。こうして、悪夢の夜は消え去ったのであった。

気づけば、リカたちは患者衣を着てベッドの上で寝ていた。リカが最初に目があったのは、親友のアンジュであった。リカたちは彼女の診療所に搬送されていた。

「...意識ははっきりしているようね、気分はどう？」

アンジュは、リカの容態を軽く確認してから彼女の両肩を軽く叩いた。

「まだちょっとフラフラするわ、昨夜のこともよく覚えていない.....そういえばサユミは？」

リカが心配しているサユミは、隣のベッドで大人しく眠っていた。

「しばらくすれば気が付くでしょう、彼女の場合、肉体的にではなく、精神的にダメージが大きかったみたい...」

「...そう、こうやって生きているのが不思議ね、何が何だか...」

「悪い夢から醒めたと思えばいいんじゃない...？事件は解決でしょう？」

「.....そうだといいけど、ミチコさんたちが居なかったら私たち終わってたわ...先輩たちは何処に？」

「また迎えに来ると言って、すぐ帰って行ったわ...ほんと忙しい人たちね...」

病室にあるテレビの電源をつけると、朝のニュースが放送されており、深夜に起きた台風で被害を受けた現場が中継されていた。リカたちが居た洞窟付近の映像も流れていて、上空にはテレビ局のヘリと自衛隊のヘリが飛び回っており、現場は物々しい雰囲気にも包まれていた。台風の餌食となった山々は、大規模な土砂崩れや落雷の被害で、大きな傷を負った。

「...あなたたち、こんな所に居たのね...ほんと生きているのは奇跡だわ...」

「あの洞窟の中で何回死にかけたか分からない、変な気分よ」

「...確かに、血まみれのあなたを見た時は引いたわ、でも、体には傷一つついてなかった、とっくに癒えていたのね、彼女も...信じられない回復力だわ...」

「皮肉にも、あの薬に救われたようね、化け物に近づいたかも...」

「...まだ薬の効果を解明出来る手立ては？」

「さて...サユミが色々やってくれているようだけど...」

「...とにかく今のところ、体に異常がないから安心だわ、ここは地下の特別病室で貸切だから、長く居られるわ、ゆっくりして行って...」

「お言葉に甘えてそうさせてもらおうわ...また世話になるわね...」

リカは感謝の意を表し、アンジュはそれに対し、親指を立てる仕草を見せた。アンジュはキザな男性のように決めて、颯爽と病室を後にした。

リカはサユミの顔をちらっと見てから、掛布団を被って体を休めた。その日、ここしばらく落ち着く暇がなかったリカにとって、貴重な時間となった。

時間は流れ、日は沈んで夜中になり、リカは、天井を見上げながら考え事をしていた。

「...ゴソ」

「...え？」

その時、隣のベッドから物音がして、確認すると、サユミが目を開いていた。

「...サユミ！気が付いたのね！」

「.....リカさん？ここは？どうなったんですか？何も分からない、教えて下さい！」

意識を取り戻したサユミは、まだ錯乱状態になっていた。

「...もう大丈夫だから落ち着いて！ゆっくり説明するから...」

サユミはリカに説得され、徐々に落ち着きを取り戻した。

「まずここは診療所よ、私たちは助かったの... `鴉の眼、の脅威から解放された...」

「...私は、ここ数日の記憶がなくて.....どうなったんでしょうか？」

リカは一度口を歪めて、真相を話そうとした。

「...あなたは、`鴉の眼、に洗脳されていたのよ、そして、あなたを利用して私を殺そうとした...」

「...そんな！」

「...私も投与された薬物により、化け物になって、あなたを殺そうとした...その辺は私も記憶がないけど...」

「...！」

その時、サユミは土下座の体勢になり、リカに謝罪しようとした。

「す...すみません、私が未熟なばかりに酷い目に遭わせてしまいました...！もっと早く対処していれば！どうお詫びをしたらいいか.....！」

「.....頭を上げなさい、サユミ！あなたのせいじゃないわ、私の油断があつて起きたことよ、それに私たちはここ最近、運が悪かったのよ、だから自分を責めないで！」

リカは、サユミを慰めて泣き崩れる彼女のベッドに移動して、優しく抱きしめた。

「.....」

巡回でリカたちの病室に訪れたアンジュは彼女たちと顔を合わせず、少しの間、壁際で待機していた。

その後、リカとサユミは`鴉の眼、との死闘で負った傷が癒えていき、完全復活を遂げようとしていた。

「...ムシャムシャ...ガツガツ.....バグ！」

二人は長く食事を取っていないため、信じられない速さで、丼ぶり一杯のご飯を平らげていた。

「.....病み上がりの食べ過ぎは、体に毒だと思うけど...」

アンジュは、リカたちの食事風景を見て呆気にとられていた。

「そんなこと言ってられないわ、三日間お腹の中、すっからかんだったんだからエネルギーを補給しないとね～おかわり！」

「...先輩の言う通りです...バグバグ...」

サユミの口の周りには、ご飯粒がついていて、上品さが微塵も感じられなかった。リカは丼ぶり十五杯、サユミは十杯おかわりして、賑やかな朝食は終わろうとしていた。

「もう！食っちゃ寝ばかりしてないで、体を動かしなさい、働かざる者食うべからず、その積みである丼ぶりは、自分たちで洗いなさいよ！あと掃除と洗濯をお願いしたいわ...」

アンジュは、元気になったリカたちを召使いのようにこき使おうとしていた。

「...プルルルルルル」

受付の電話が鳴りだし、アンジュは慌てて受話器を取ろうとした。

「...はい、もしもし？.....」

アンジュは、患者からの電話だと思い込んでいたが、どうやら違うようで、深刻そうな表情を浮かべて、電話相手と何かを話していた。

一方、リカたちは、まんまとこき使われ、せっせと家事や仕事の手伝いをしているうちに、時間は正午過ぎになっていた。

アンジュの診療所から外を見ると、近くの駐車場に一台の桃色のワーゲンビートルが駐車され、車の扉が開くと、頑丈そうなアタッシュケースを持った人物が現れた。その人物は、そのまま

診療所に向かおうとするが、明らかに患者ではなかった。

そして、謎の人物が診療所に入ろうとすると、受付には何故かりカが居た。リカは、アンジュに受付の仕事を任されていた。

「今日は～診察券お願いします～……！」

リカは、何気に謎の来訪者に声を掛けたが、顔を合わせた瞬間、表情が一変した。

謎の訪問者もまた、驚いている様子であった。

「……どうしてあなたがここに…？」

「……刑事さんこそ何故？」

お互い慌てる中、そこにひょっこりアンジュが姿を見せた。

「…あら、いらっしやい～」

アンジュは、謎の訪問者に動じず、歓迎していた。

「……あなた、彼女が来ることを知っていたの？」

「…ええ、朝に電話掛かってきてね…アポは取っているわ…さあ奥にどうぞ」

謎の来訪者の正体は、遺伝子科学総合研究センター、プロジェクトリーダーを務める二階堂愛美であった。アンジュは、奥の休憩スペースに案内し、リカとサユミは、二階堂と向かわせて座らせた。アンジュは、仕事で一旦その場を去った。リカと二階堂の間には、気まずい空気が流れた。

「…あなたが呼んだの？」

「はい、万が一、私と連絡が取れない場合は、ここに連絡するよう言っておきました」

「成程、こんな所で会うとは思わなかった…」

「…あなたもサユミさんと同じ秘密警察だったんですね…」

「ええまあ、その節はどうも、お世話になったのと同時に色々にご迷惑を掛けまして…」

リカは、情けなく謝罪する組織幹部のように深々と二階堂に頭を下げた。

「…もう遠い昔のこと、全然気にしていませんので悪しからず…」

二階堂は大人の対応で受け止め、リカに対して温かい笑みを浮かべた。それでリカは胸を撫で下ろして笑いで返した。

それから気まずい空気は過ぎ去って行き、そろそろ本題に入ろうとした。

サユミがまず、話を切り出した。

「二階堂さん、今日仕事は？」

「久々に休みを頂きまして、最近、働き詰めだったので…いい機会でした」

「わざわざすみません、そのアタッシュケースは何か関係が…？」

「…ええ、報告書、例の薬の設計図を読み解き、やっと解毒剤を作ることに成功しました…サンプルですが…」

「…ついに完成したんですね！」

アタッシュケースを開けると、そこには注射器と薬剤が入った容器が収納されていた。

「……問題の劇薬ですが、あれは投与されると悪性の細胞が侵入し、一時的に体内の細胞を支配します、最悪の場合、悪性の細胞が暴れ回り、肉体が蝕まれて突然変異を起こす…つまり化け物へと変身します…」

リカとサユミはお互いに目を合わせ、心当たりがある表情を浮かべた。

「…確かに問題の薬剤は、危険性がありますが、万能ではありません、驚異の回復力を持っていたとしても効力が弱まり、限界が訪れる…また、太陽の光が弱点で昼間は肌の露出が出来ず、長時間の外出が出来ません、なので、暗闇に潜んで生きていくしかありません…」

「夜行性なのか...まるでドラキュラみたいだな～」

「...昼間は、厚手の服を着て物陰に隠れて、体を守っていたんですね...もし、太陽の光を浴びるとどうなりますか？」

リカが呑気に冗談を呟く中、サユミは真面目に質問した。

「...細胞が破壊され一瞬で消滅...つまり即死です...」

「...そういえば！」

リカはふと洞窟で`鴉の眼、が風化していくことを思い出した。

「.....榎藤さんは例の薬を完全なものにしたかったようですが、断念されたようです...究極の研究は未完に終わった...」

三人は榎藤の名が出ると、俯いてしばし無言となった。

「.....彼が私から遠ざかった意味がようやく分かりました...」

「...え？」

リカたちは、二階堂の突然の発言に対し、強く反応した。

「...榎藤さんは、自分の才能を恐れていたんです、次第に自分をコントロール出来なくなり、マッドサイエンティストになってしまった...道を間違ったと分かった時は既に遅く、孤独を感じて酷く悩み苦しんでいた...、彼は悪の道に引きずり込まれないよう、私をチームから外したんだと思います.....榎藤さんの専用机の引き出しの奥から遺書らしき物が発見されました...文章は手書きで文面からまだ正気だった頃に書かれた物だと担当の刑事さんが言っていました...その矢先殺害された...」

リカたちは二階堂の意見に反論せず、納得して考え込んだ。

「.....惜しい方ですね、名誉ある賞をもらってもおかしくないのに...」

「...榎藤さんのしたことは、異常なことかもしれませんが、角度を変えれば、素晴らしい研究です...完成すれば多くの人の助けになる...私はそう確信しています、だからこの解毒剤を作り

ました！」

二階堂は、権藤の死を無駄にせず、彼の意志を引き継ごうとした。

「.....それで私のために解毒剤を作ってくれたんですね...！」

「...慎重に作ったのでまだ未完成、徐々に改良して行くつもりですが...どうされます？もう試してみますか？」

二階堂は深刻な表情を浮かべ、サユミの答えを待った。しかし、サユミの答えは意外にも早かった。

「...お願いします、あなたを信じます！」

サユミは不安に駆られることなく、即座に答えを出した。

「...分かりました、それでは準備しますので...」

「.....あの～」

話し合いが順調に進もうとする中、水を差す者が現れようとしていた。

「...どうしました？」

「実は私も例の薬を投与されてまして.....」

「.....！」

二階堂は、驚きのあまり腰を抜かしそうになっていた。

「...うちの先輩にも使用出来ますか？」

サユミの質問に対し、二階堂は困り果てていた。

「...申し訳ありませんが、この解毒剤はサユミさんの細胞を基にして、作られているので彼女以外に使用することは不可能なんです.....投与されたのが、同じ物かどうか気になるし...」

「...そうか〜残念〜」

「そう落ち込まないで下さい、あなたの細胞の一部を採取すれば、解毒剤が作れますよ」

「そうですか！なんかラッキー♪」

「...とにかく、今回はサユミさんに解毒剤を投与しますので...」

二階堂は気持ちを切り替えて、準備をしようとした。

「...話は弾んでる？お茶でもいかが？」

アンジュが人数分のお茶と茶菓子を運んできて、またもや二階堂は緊張感がなくなった。こうして、シリアスな会話は中断され、女子のティータイムが開かれた。他愛無い会話をした後、ようやく解毒剤がサユミの体に投与された。

「よし...これでしばらく様子を見ましょう、一度では悪性の細胞が完全に消滅しないので、複数回の投与が必要です、月に一回、お邪魔して大丈夫ですか？」

「...どうぞ〜お茶用意して待ってるわ」

二階堂は、アンジュから訪問許可をもらい、帰り支度をしていた。

「...リカさん用の解毒剤は、出来るだけ早く完成させます、それまで何か異常があれば、この薬を服用して下さい、一時的に効果を弱めます、それでも駄目ならすぐに連絡を！」

「ありがとう、頼りになるわ」

「私もあなたたちに会って、人生観が変わりました、今度、舞台観に行くんで...」

二階堂は安堵の表情を浮かべ、軽くお辞儀をして診療所から去って行った。

「本当にしっかりしているわね...」

「ノーベル賞も夢じゃないわね...」

リカとアンジュは、コーヒーを啜りながら、二階堂の背中を期待の目で見ている。

それから時間は夕刻になり、一人の謎の訪問者が突如、アンジュの診療所の扉を開いた。

「...あら」

受付に居たアンジュは、謎の訪問者と目が合った。リカはその頃、何故かアンジュの家で洗濯をしていた。

「リカ、あんたにお客さんだよ！」

アンジュは、診療所とつながる扉を開けて、リカを呼んだ。

「私に客？」

突然の客に心当たりがないリカであったが、とりあえず作業を止めて診療所に戻った。

「.....地下の病室で待っているよ」

「...誰なの？いったい...」

「男よ、ちょっとあんたと同じ匂いがする」

アンジュは、敢えて訪問者の名を言わなかったが、リカは、訪問者の正体を把握したようであった。リカは病室で待つ謎の訪問者と目が合った時、大きな溜め息をついた。

「...久々に相棒に会って、その態度はないんじゃないか？」

謎の訪問者の正体は、安藤であった。

「長い付き合いだけど、あなたの顔を見ると疲れが出るわ...よくここが分かったわね」

「偶然、お前の仲間と会ってな、ミチコ...と言ったかな？彼女に教えてもらった...先輩だろ？」

「ええ、大ベテランよ」

「...彼女から色々と話を聞いた、俺が来るまでじっとするよう言ったはずだが...」

「...ごめん、招待状が届いていたんでね...」

「また奴と接触したのか...放っておけばよかったのに...」

「そうはいかないわ、大事な仲間が捕らわれていたからね...」

「...成程、例の後輩か、彼女は何処だ？無事なのか？」

「...ええ、今、夕飯の買い出しで出かけているわ...」

「それは良かった...行方をくらまして、彼女の相棒が心配していたんだ...で標的はどうなった？」

「.....仕留めたわ、私が...」

「...そうか、生け捕りは出来なかったか...追っている連中に伝えと、どんな顔するかな？」

安藤は冗談を交え、リカにある報告をしようとした。彼女は静かにベッドに腰を下ろした。

「...俺たちの本来の任務は、外国犯罪組織を引きずり出すことだ...お前が寄り道してる間に標的の身元が割れた...」

「...！」

「奴らは、主に人身売買や麻薬密売で名を売っていた... `スキャリー・グレイン、これが組織の名だ...人の名前みたいだろ...」

「研究所とどういう関係が？」

「...奴らは例の劇薬のことを知り、大きなビジネスにつながると察し、権藤たちと協定を結んだ、奴らは世界中から薬の実験台になる人材をさらって行った...これが闇取引の真相だ...余談だが、研究所と業務提携していた製薬会社の社員も無残に殺害された...奴に...！」

「！.....それで真の標的は捕らえたの？」

「...タイの空港で一味を確保した、地元警察に尋問させて黒幕を引きずり出す...じき顔を拝める...」

「...他に情報は？」

「研究所についてだ、追っている件と関係はないが、不動という男が居ただろう？」

「ああ、あのセンター長の...」

「...あの男、真面目な顔して、研究費を偽って横領していた、上層部もグルだ...」

「あの研究所、大丈夫なの？」

「...世代交代ってことだろ、若い世代には優秀な人材が隠れている、二階堂ちゃんのような...そうだろ？」

「...そうね」

リカは、二階堂が訪ねてきたことを黙っていた。

「...これでひとまず事件は解決？」

「まあな、随分遠回りしたが...」

「...何か今回の仕事は疲れたわ...」

「全く同感だ、事件は選べないからな...骨折り損だ...」

「報告は終わり？」

「...ああ、そうだな、お前の馬鹿面も確認出来たし、帰るとするか.....」

「お疲れさんでした...」

その時、安藤は病室を出ようと立ち上がろうとしたが、何か言いたげな様子であった。そして、彼は予想外のことを口にした。

「.....黙っておこうと思ったが、つい口が滑っちゃう...」

「どういうこと？」

「...これは余談というか噂話だ...忘れてもらっていい.....例の劇薬の実験のために多くの人間が犠牲になったが...実験台を集めるのに、歌劇団の上層部が加担していたようだ...！」

「.....！！！！！！」

リカは安藤の身の毛がよだつ発言に衝撃を受けて、体が一気に固まった。安藤は黙って手を振って退室した。

「.....全くチャライ男ね、しつこくナンパされたわ、うっとうしい...あれ？」

アンジュはしつこくナンパする安藤を追い出し、リカの居る病室に向かった。彼女は石像のようになっているリカの姿を見て、心配して声を掛けた。

「.....リカ？どうしたの？」

「...！あ！」

リカはアンジュに呼び掛けられ、我に返った。

「どうしたのよ？怖い顔していたけど...」

「.....何でもないわ、ちょっと考えごとを.....はは」

「...あの人、あんたの相棒だったのね、なんかウザいわ、しつこく口説いて来て、もう少しで張り倒すところだったわ、よくあんなのと一緒に居られるわね...」

「...もう慣れたわ、仕事の時は意外と真面目なんだけど...」

リカはどうにか話を合わせて、安藤の発言を頭の片隅に置いた。しばらくして、サユミが買い物から帰って来るが、リカは安藤が来たことを彼女に話そうとしなかった。リカたちは、もう一晩泊めてもらい、明朝に去ろうとしていた。

翌朝、天候は良く、まずサユミが診療所から出ようとしていた。

「...どうもお世話になりました」

「まだ居ても大丈夫よ、ゆっくりしてって...」

「...はは、そうはいきません、東京公演を控えているので稽古しないと...体が鈍ってます...仲間に迷惑が掛かりますから...」

「...無理せず頑張ってね」

「はい、それじゃありカさん、お先に...」

サユミは、植木に水をかけているリカに別れの挨拶をした。

「パッパー！」

診療所の前には、迎えの一台の車が停まっていた。運転手は同期のアヤコで、彼女はクラクションを鳴らしてサユミを急かしていた。サユミは笑みを浮かべながらリカたちに手を振り、車に乗り込んで去って行った。

サユミは普段可愛くて華奢な女性ではあるが、背中を見た瞬間、トップスターのオーラが湧き出ていた。彼女は、まだまだ成長するとリカは確信していた。

「...あんたも出るんでしょ？」

「ええ、このままだと、あんたのお手伝いロボットになっちゃうから...」

「ふ...そうね、よく働いてくれたわ、もう解放する、ありがとう」

「...こちらこそ、また遊びに来るわ」

リカはアンジュと抱擁を交わし、別れを告げた。

「家まで送って行くけど...」

「...いいわ、時間があるし、ゆっくり歩いて帰るわ」

リカは、朝の散歩がてら、自宅の方まで歩いて帰ろうとした。

秋めいた朝の静かな空間に溶け込んだリカであったが、途中にそれを妨げる者がじわじわと近づいていた。

「.....クアークアー...クアー...」

「...何だ、うっとうしいな～」

鴉の群れが上空に飛んでおり、リカは文句を言いながら鴉から離れようとした。

「...！」

その時、リカの頭に何故か、鴉の眼、の姿がよぎって、しばし動揺した。気づけば、多くの鴉が彼女の方をじっと見ていた。不気味な光景であったが、特に問題は起こらず、リカはそのまま気にせず、帰路を歩いて行った。

第二章 縁の雫編 序章 惑わすダイヤ

某国のある夜、肌を痛めつけるほどの冷たい風が吹いていた。そこの鉱山地帯には、航空機の残骸や髑髏が多数転がっており、黒煙を放ち、しつこく血の臭いが残っており、殺伐とした光景であった。

「.....カン...カン...カン.....」

こんな地獄のような区域に、近寄る愚か者は居ないと思われたが、鉱山の奥深くで、叩き付けるような音が響いていた。山中に進んで行くと、灯りを照らしながら、数人の男が何やら作業をしていた。彼らは、シャベルで深く地面を掘ったり、慎重に専用道具で地面を削ったりと、何かを発掘している様子であった。

何時間もの作業で、ようやく発掘した物が顔を出した。それは、うっすら紫に輝いて、まだ姿かたちは悪いが、発掘者は、それを大事そうに掴んでいた。発掘した物は、ダイヤの原石であった。発掘者たちは、原石を眺めながら歓喜していた。

「.....ババババババババババ」

「...！！！！」

耳を澄ませると、上空から物音がして、その音の正体は、軍用のヘリコプターのローター音であった。監視するためなのか、照明を山中に当てて、周辺を長く飛行していた。自分たちを捜索していると、察した発掘者たちは、慌てて原石をリュックに積めて、その場を去ろうとした。

同じ頃、神戸港。輸送船から物資コンテナが次々と搬送される中、船内の物陰に一人の人物が潜んでいた。その人物は人目を気にして、船を出ようとしていた。明らかにその人物は船員ではなかった。その正体は、密航者であった。

密航者は、港の倉庫の方へと急いで向かい、誰かと待ち合わせをしている様子であった。

数分後、黒のBMWが一台、姿を現して、密航者の前で停まった。車内からは、長身でスーツを身に纏った男が現れて、密航者に歩み寄ろうとした。すると、密航者は、黙って布袋を取り出して、それを男に差し出した。

布袋に入っていたのは一見、硝子のかけらのようであるが、それは希少価値のあるダイヤモンド

ドであった。ハート形で妖しく紫に輝いており、某国の鉱山で発掘した物と同じ物であった。男は、ダイヤを確認した後、胸の内ポケットから、長形4号サイズの分厚い封筒を、密航者に手渡した。中身は札束であった。

密航者は、封筒をしっかりと両手で持ち、深々と頭を下げて、その場を去って行った。これで、取引は終了して車も闇へと消えた。

発掘されたダイヤの輝きは、災いを齎して大事件の引き金となった。

第二章 縁の雫編 第一話 麗人のドレス

一年が終わるまであと二ヶ月程、季節は秋本番となった。しかし、異常気象や台風で、気候はまだ落ち着かなかった。そんな中、歌劇団は、それにめげずに積極的であった。五十周年記念のこの年、後半戦もイベントが目白押しであった。

鴉の眼、の一件から数週間経ち、リカは、普段の生活に戻っていた。

リカの最後の公演日まであと一ヶ月となり、本格的に本業の仕事を始めていた。卒業もあつてか、取材や対談が多かった。中でも、リカが率いる劇団班の初代トップスターを務めたOGとの対談は、貴重であった。

本名はジュンコ。長い下積みで地道に力をつけていき、歌劇団時代、新設された歌劇団班の初代トップに就任した。退団公演では、チケット競争率・ファン動員数が当時の史上最高を記録した。退団後も表舞台に立ち、女優、歌手、タレントとマルチに活躍している。

最近のリカは、裏の仕事で嫌なことがあったが、本業の仕事がいい気分転換となった。次は、過密スケジュールの合間を縫って、最初で最後の写真集の撮影や制作、彼女の魅力が詰まった写真に加え、沖縄ロケも実施。ファンとの交流イベントなどもあり、ここ最近、リカの生活は充実していた。

それから数週間後...

「...今朝のトップニュースはこちら、中東の過激派組織のテロ行為は、止まることなく、ついには、現地を取材している日本人ジャーナリストが殺害されました...アメリカ政府はじめ各国政府は、十分な警戒措置を取り、今後の被害に備えるようです、先日、日本人学生が問題のテロ組織に加わろうとした衝撃的な事件もあり、本国も他人事とは言えない状況下にあります、ゲストに軍事アナリストの.....」

買い換えたばかりの薄型テレビには、重苦しいニュース映像が放送されていた。

テレビが設置されている場所は、昔ながらの身近な空気感が漂う喫茶店の中であった。ただ特別なのは、店内の至る場所に、サイン入り歌劇団スターポスターが貼られていることであった。この店は、歌劇団スターの行きつけであった。

時間は、開店間もない土曜日の朝、土日は、歌劇団ファンなどで満席になり、本日は、あと数時間で団体が来店することになっている。店内の客は、まだ一人だけであった。

客の一人は、コーヒーを注文し、店内に置かれたファッション誌や女性週刊誌を適当に読み漁

っていた。その客はどうも落ち着かない様子で、店主にも伝わっていた。

その客とはリカであった。彼女の服装は、白のワイシャツに黒のジャケットとパンツ、舞台に立つ時と同じ雰囲気を出していた。

「カラン...」

その時、喫茶店の扉のベルが鳴り、一人の客が来店した。驚くことにその客もリカと同じような格好をしていた。ブランドもののポロシャツに、紺色のジャケットとパンツ、サングラスもかけて、お洒落なソフト帽子を被っていた。その姿は、昔のドラマに出てくる探偵のようであった。男性の姿を振る舞っているが、その客は女性であった。

謎の客は表情を変えず、奥へと進んで行くが、また驚くことが起こった。空いている席が目立つのにも関わらず、謎の客はリカが座っている席の前に立った。

「.....相席よろしいですか？」

謎の客は、帽子を脱いだ後、口を開いて、冷静な態度でリカに訊ねた。

「.....そこら中、空いてるのに、わざわざここを選ぶなんて.....そういう趣味なのか、私に好意があるのかな？」

リカは、謎の客と目を合わさず、低いトーンで質問を質問で返した。

「.....後者が近いですかね、変な意味ではなく...誰かを待っているんでしょ？」

「...まあね、ただ、誰が来るかは知らされていなくてね...退屈していた時に丁度あなたが来た...これは偶然かな？」

「...良ければ、待ち合わせの相手が来るまで、私が話し相手になりますが...」

「...そうね、あなた面白そうだし...どうぞ」

謎の客は、リカの許しを得て、向かいの席に座った。

「...いらっしゃいませ、ご注文はお決まりですか？」

謎の客は、リカと同じコーヒーを注文した。座っている二人は、しばらく目を合わさず、話し

掛けようともせず、変な空気が流れていた。

「.....今日、仕事はお休みなの？」

ようやく、リカが口を開き、ちら見してから謎の客に質問した。

「...昨日で終わりました、それからすぐこっちに帰ってきました...」

「...それはご苦労様、東京公演、評判よかったみたいね、いいスタートを切ったじゃないの...今度の舞台は、観に行くわ...」

「...ありがとうございます、先輩！」

リカは、やっとのことで雑誌を閉じて、謎の客と目線を合わせた。謎の客の正体は、リカの一年後輩であった。

彼女の本名はマミコ。舞台の世界ではダンス、演技が上手く、外見はクールに見えるが、熱血系で若手時代から人気を博している。念願叶い、先輩のエリ退団後、五十周年の年に、トップスターに就任した。裏の世界では、実力派の密偵として活動、小柄な体型ながら身体能力は長けている。

「.....それにしても、ファンのことを警戒してなのか、その服装はやりすぎね...私が着ているのは、安物で地味だけど、不自然さはないでしょう...？あなたの場合、極端で少し浮いてるわよ...」

「...勉強になります、でもこの服装、気に入っているんですよね～ある番組の企画でドラマをしたんですが、この格好で探偵役をやって評判よかったもんで～」

「...成程、愛着があるわけね、私もメンズの服、結構良いの、揃えているから参考にさせてもらうわ...でも、今回はプライベートで来たわけじゃないでしょ？」

リカたちは軽く雑談して、そろそろ本題に入ろうとした。

「...ええ、あなたの待ち人は、私のようなです、合同捜査ってやつですよ、よろしくお願いします...」

「...最近多いな、前にサユミとも仕事をしたし、久々にエリさんとも仕事したし...本当に貴重な

体験だったわ、舞台と同じくらいにね...エリさんのことだから、こう言ったんでしょう？自分の好きなようにしろと...」

「...はい、先代の背中を見て、成長していったつもりですが、私独自のトップスター像を創るつもりです...」

「...随分と熱いわね、エリさんに似てきたんじゃないの？」

「...よく言われます、リカさんも親交があったそうですね...」

「ええ、彼女のことは、師匠と呼んでるわ、若手の頃、随分と世話になってね、表でも裏でも、彼女から生きる術を学んだようなものよ...」

リカとマミコは、また話を横道に逸らし、先輩の偉大さを語り合った。

「...私もそうです、やはり、一緒に舞台に立っている仲間と仕事するのが、一番楽しいですね～」

「...公安の連中は、暗い変な奴が多いからね、相棒といっても、ただの連絡係でしょう、現場担当は、私たちの方だから...」

「ええ、私たちの裏の相棒は、膨大な捜査資料の整理で、しばらく缶詰のようです、なので、今回は現場担当コンビに任せると...」

「...それじゃあファンの団体が来る前に仕事内容を聴きませんか、そっちは色々とネタあるんでしょう？」

「はい、あなたの相棒からも、情報をゲットしました、まずはこちらを...」

マミコは、まずスマートフォンに保存している画像を見せた。

「...これは？」

「今回の捜査の核になるものです」

画面には、数々の宝飾品の画像が映っていた。

「どれも高そうだけど、ちゃんと説明してよ…」

「……これは、最近人気がある宝飾品なのですが、実は、密輸されたダイヤが含まれているんです…」

「…非合法で売られているってことね？」

「ええ、店先ではほとんど販売されておらず、ネット経由でアジア圏のみならず、米国や欧州からも注文が殺到しています…」

「密輸されたダイヤとはいえ、なぜそんなに注目が？」

「…これは普段紫色に輝いていますが、不定期で赤、黄色、緑、青と順番に変色していく不思議なもので、希少価値はあるんです…」

「…成程、確かに普通じゃ手に入らない代物ね…」

「高値で売られていますが、資産家や企業家、財界の大物などが興味を持って、大量に買い込んでいるようで…公安やC I Aが掴んだ情報によれば、中東の紛争地域にある鉱山で発掘されたもので、一般では、ハート形に加工されていることから、幸せを運ぶダイヤ、縁結びのダイヤと呼ばれています…」

「…我々は何と呼ばば？」

「……紛争ダイヤ、不幸を招くダイヤ…好きに呼んで下さい…このダイヤの収益の半分は、最近、世界情勢に悪影響を与えているテロ組織の資金源になっているようです…まさに紛争ダイヤ、石油を強奪するより、割のいい手段です…」

「…密輸経路は？」

「…プロの運び屋がいると思われます、航空機を利用して、持ち運ぶケースが多いですが、日本の場合、入国審査が厳しくなり、病原菌一つ侵入させないために、厳重なセキュリティーで守られています…」

「他に手は？」

「...密航です、輸送船、貨物船なら成功率は高い...公安によれば、各地の港で怪しい取引現場を目撃し、慎重に監視を続けているとのことですよ...」

「とにかく資金源が無限なのは、このダイヤが絡んでいたからなのね...?」

「ええ、奴らは資金源を武器に勢力を伸ばしています...放っておけば日本も餌食に...」

リカは、マミコの言い掛けたことを想像して、顔色が変わり、質問を続けようとした。

「.....根回ししたのは何者?」

「これが恐ろしいことに日本人ですよ...!」

「...だから私たちに捜査権があるのね?」

「はい、標的はこいつですよ...」

マミコは、スマートフォンの画面に、一人の男性の姿を表示させた。

「...結構ハンサムね」

「...彼の名は白谷文也 四十三歳、総資産百億円を超す、関西の企業家の御曹司ですよ...かなりやり手で、有名娯楽施設をいくつも経営し、馬主となり、購入した馬はほとんど重賞を制覇しています、関係者の情報によれば、彼は無類のギャンブル好きのため、カジノ法案にも賛成で、実現させるために陰で活動しているとのことですよ...」

「つまり、財力にものを言わせて、悪さをしているお坊ちゃんなわけね...?」

「ええ、見過ごすわけにはいきません、彼の行為を止めなければ...!」

「...彼を挙げる手立ては?」

「...証拠はいくつかありますが、徹底的な材料が少ない、直接会って、あぶり出さないと厳しいですね...」

「...私たち二人で？」

「勿論、私一人では心細いので...」

リカは、笑みを浮かべて、マミコの頼みに応じようとした。

「...今夜、神戸のホテルの会場を貸し切って、パーティーが行われます...そこに彼が...」

「どうやって接触を？」

「手は打ってあります、私の指示に従ってもらえますか？」

「...ええ、構わないわよ、今夜は空いてるから...用件は以上？」

「はい、伝えるべきことは全て伝えたつもりです...何か質問は？」

「...特にないわ、そろそろ出ましょうか、これから店内は騒がしくなる...」

「...そうですね、でも、ちょっと持ってください、ここのコーヒー美味しいので、頂きます〜ねえマスター？」

マミコがカウンターに視線を送ると、店主は軽く会釈した。リカたちは、店自慢のコーヒーをじっくり味わってから、会計を済ませようとした。

「ここは奢らせて下さい」

「え？いいの？悪いね〜」

リカは、素直に甘えて、後輩にちゃっかり奢ってもらった。

「.....それじゃあ詳細はまた連絡しますので.....それまで待機ということで...」

「ええ、楽しみに待ってるわ」

リカたちはいったん解散して夜に備えた。

時は流れ、午後十九時、場所は兵庫県、ホテル ラ・スイート神戸ハーバーランド。

その夜、ホテルで盛大なパーティーが開かれ、続々と各界のトップ、大富豪が集まって来ていた。

大企業家、白谷文明 七十二歳は長年、貿易会社の責任者として務めていたが、辞任を決意し、息子の文也に代を譲ろうとしていた。今回のパーティーは、それを祝うためのものであった。ホテル駐車場に一台のピンクのクラウンが停まり、車内からは、高級なパーティードレスを身に纏った令嬢二人が現れた。

「.....何か恥ずかしいな、こういうの慣れてないんだよね～」

「...お似合いですよ、そういう役も演じた経験あるでしょ？」

「...あまりないな～なんか体がスースーする...落ち着かないよ～」

「じき慣れますよ、私たちがタキシード着たら余計怪しまれますよ...」

令嬢の正体は、リカとマミコであった。

リカは、清楚な白で、背中は大膽なU字に魅せるドレスを、マミコは、気品溢れるワインレッドのワンピースタイプのドレスを着こなしていた。さらには、ウィッグをつけて髪型を変えて、化粧もいつもより濃くして、麗しさを強調した。変装は完璧であった。

リカは、ブツブツと文句を言い、マミコは説得して、パーティーの招待券を彼女に手渡した。

「...偽名ね、職業は記者...」

「当然のことながら、警察関係者はいれませんから...マスコミ関係者の知人が多いので、怪しまれずに済みますよ...名刺も用意してあります」

「彼は女好き？」

「...かなり好きだと思いますよ、資産家の令嬢とも、頻繁に遊んでいるようですから...誘惑して情報を聞きだしますか？」

「...ハニートラップなんて出来ないわ、普通の拷問の方が得意かも...」

「...まだ暴れないで下さいよ、今夜は、偵察みたいなものですから...」

「...分かってる、分かってる...」

リカたちは緊張感を持ちつつ、潜入捜査を始めようとしていた。

会場に入ると、千人近くの招待客が集結しており、既に賑やかな催しが始まっていた。リカは、豪華な料理に目がくらみ、次々と皿に盛って行った。リカは、もう本来の目的を忘れそうになり、マミコは、頭を抱えて呆れていた。

「...さてと」

マミコは、一人自然体で、標的に近づこうとしていた。周りには、テレビや雑誌で見たことがある著名人で溢れており、驚きが隠せなかった。しばらく歩き回り、ふと周辺を見渡すと、大勢の招待客が集まって拍手していた。気になる群衆の中を縫って歩くと、奥には主催者である白谷文明が立っていた。彼は、多くの友人、知人に見守られながら演説を行っていた。

「...皆さん、私たちのためにわざわざ集まってくれてありがとうございます、今夜は存分に楽しんで下さい.....」

「...今回の辞任式を機に、引退をお考えですか？」

一人のマスコミ関係者が、文明に質問した。

「...いやいや、一つの会社から離れるだけで、まだ、引退は考えられません、仕事は好きですから...息子たちにはまだまだ負けられません...！」

「...では、ご子息の文也さんに跡を継がせた真意は？」

「文也は、本当に何でも器用にこなす男でして、この世界に合っている...私とは別にいいものを持ってるもんでね、他に優秀な社員が居ますが、やはり、身内の方が安全だ、ただ、それだけのことですよ...」

文明は、マスコミの質問に素直に答えて、和やかな空気に包まれていた。

今後を期待されている息子の文也は、別の場所で友人、知人と楽しく雑談をしていた。マミコは、文也を発見して接触を試みた。

「...ドン」

マミコは、わざと文也にぶつかり倒れ込んだ。

「...いてて」

「...大丈夫ですか？」

文也は、優しくマミコに声を掛けて、手を差し伸べた。

「すみません、私ったらぼけっとしてて.....」

「お気になさらず.....招待客の顔は、大体覚えているつもりですが、あなたとは初対面ですね...
どういったお仕事を...？」

「.....フリーライターです、実は、日本の一流企業家特集の取材で回ってるんですが.....これも偶然でしょうか...あなたに取材しようと、考えていたところです...少しお時間よろしいですか？」

「...記者の方でしたか、生憎、パーティー中は、挨拶回りやイベントの参加で忙しくて...パーティーの後なら構いませんが...」

「...そうですよね、勿論構いません、時間と場所はそちらで指定下さい...」

「...では二十三時に、二階のバーラウンジでどうでしょうか？そこなら、静かな場所で落ち着いて話が出る...」

「分かりました、ではよろしくお願いします...失礼します」

マミコは無事、文也の取材のアポを取り、ひとまず彼の前から去って行った。

「...もぐもぐ.....が...が...！！」

リカは、料理を口の中に詰めすぎて、苦しい表情を浮かべていた。

「...！」

その時、マミコは、水が入ったコップをリカに差し出した。リカは、慌ててその水を口に含んだ。

「...はあはあ...あ～死ぬかと思った～」

「先輩、はしたないですよ、遊びに来たんじゃないのだから...目的忘れていませんか？」

「...忘れてるわけじゃないの！お坊ちゃんとはもう会ったの？」

「ええ、快く会う約束をしてくれました...手筈は整いましたよ...」

「さすが、仕事が早い...」

「それでは、一流企業家の化けの皮を剥がしましょうか...」

リカたちの目は鋭くなり、問題となる核に迫ろうとしていた。

第二章 縁の雫編 第二話 異色の課外授業

ホテル ラ・スイート神戸ハーバーランド バーラウンジ

時刻は二十三時、リカたちは、文也と接触しようと、二階にあるバーへと向かった。文也は既に席についており、リカたちに手を振って、場所を知らせた。その場所は、美しい夜景が一望できる絶好の席であった。

「...そちらは？」

文也とリカは、初対面であった。

「...仕事仲間です、さっき逸れちゃったんですが、やっと会えて、あなたのことを話したらついて来ちゃって...よろしいですか？」

「...別に構いませんよ、賑やかになりそうですね...」

「...初めまして、私もフリーの記者をしております、是非取材させてもらおうかと...」

リカたちは、名刺を文也に渡して腰を下ろそうとした。

「...マスコミ関係者の女性というのは地味なイメージがありましたが、お二人は実に華やかですね、はっきり言って、今の仕事をさせるのは勿体ない...！」

「...お褒めの言葉ありがとうございます、滅多に着ないので恥かしくて.....やはりパンツスタイルのスーツが落ち着きます...」

「...お二人はスタイルがいいから、そっちも似合いそうですね...私は、働く女性の姿が好きでしてね...」

「...社員の方は、綺麗な女性が多いんですか？」

「...いえいえ、そういうわけでは...それにいくら美人でも、頭がきれなければ話になりませんし...秘書は、僕より一回り年上のあらゆる業界に精通している女性です...あなたたちのような方なら我が社員として歓迎しますが...」

「...口説くのがお上手ですね」

リカたちは怪しまれることなく、文也と和やかなムードで雑談を続けて、自然に取材の方向へと進んだ。

「.....何か飲まれますか？お酒の方は強い方ですか？」

「.....私は運転があるので、アルコールはちょっと.....あなたは何か頼んだら？」

「...え？ああ、そうね...じゃあ何かカクテルを...」

リカは、文也に勧められ、おすすめのカクテルを注文した。マミコは記録するためにスマートフォンの録音アプリを起動させた。

「...様々な事業で成功されていますが、秘訣のようなものがあるのでしょうか？」

さりげなく、ダイヤの情報を集めようと、リカたちは地道に記者らしく質問を続けた。

「...特にこれと言ってありませんが、父と同じく仕事が好きですからね...それに仕事柄、毎日同じことをしたくない性分です...いくつも仕事を抱えると大変ですが、刺激にもなる...スリルがないと仕事とは言えない...起業家はほとんど同じ考えでしょう...」

「...成程、仕事や友人関係も多彩...あとプライベートも魅力的ですね...趣味はゴルフ、サーフィン、乗馬、演劇鑑賞、カーレーシング...船舶、飛行機、ヘリのライセンスをお持ちで、馬主でもある...お忙しいのによくこれだけこなせますね...」

「休みはちゃんと取る方なので...遊ぶ時は徹底的に遊ぶんですよ、仕事の時より真剣かもしれない...ふふ」

文也は冗談を交え、リカたちの質問に素直に答えた。

「.....ギャンブルもされるそうですね？」

マミコが質問すると、文也の表情が一変したように思えた。

「...ええ、マカオやラスベガスのカジノで儲けたことがあります...競馬だって万馬券を当てたことがある.....勝負事が好きでね、ついさっき言った、仕事のことと一緒にですよ...仕事は学業のよ

うに先が見えない、いつ荒波に浚われてもおかしくない...毎日が勝負事...だから興味深い...そうは思いませんか？」

文也は不敵な笑みを浮かべ、リカたちに質問を質問で投げかけた。

「.....確かにいつも面白いネタが落ちているわけじゃないので、私たちも苦勞しています...読者や記事の取材に関わった人からの苦情も多いですし.....」

マミコは、どうにか適切な返事を返して、その場を切り抜けた。

「...今回、親父の一つの会社を任されるわけですが、どうも気が進まなくてね...」

「...何故ですか？」

「...うちの親父は、師匠のような存在なんです、表では余裕の表情だけど、苦勞している姿を子供の時から見ていた、僕たち兄弟は、ずっと尊敬しています...でも、いつの間にかそんな親父とライバル関係になった、知り合いの起業家に、もう父親を超えたと言う者がいたが、まだ頷くことは出来ませんよ、世代交代には早すぎる...弱った親父は見たくない...引き継ぎは、ちゃんとしてますけどね...」

リカたちは、本来の仕事を忘れそうになり、文也の言葉に感銘を受けた。

「熱意は十分に伝わりました、先ほど趣味でギャンブルの話が出てきましたが、カジノ法案は大いに賛成のようですね...？」

「...はい、よく調べていますね、なかなか前に進まないのでもう苛立ってしまして...どうも悪いイメージが浸透しているようですが、政治家や偉い大学教授でもギャンブル好きは、たくさんいますよ、競馬、競輪、競艇場に足を運ぶ人数も年々増加している...厳しいルールで成り立っているこの国なら、安心して実行できると思うんですが...不景気なこの時代に貢献出来るでしょう...」

「カジノ法案が成立すれば、あなたはどのようなしますか？」

「...ビジネスにつなげますね、第二のバブル経済になってもおかしくない状況を作る自信がある...！」

「...それは楽しみです、実現することを祈っています」

「ありがとうございます、先の未来を予知することも大事なことでね、ベンチャー企業とはそういうものです」

「...また一つ質問させてもらいたいんですが、よろしいでしょうか？」

「ええ、構いませんよ」

「.....今、特に力を入れている事業のことについて知りたいんですが...」

「！」

リカたちは、ついに核心に迫ろうとした。文也は一瞬目を逸らしたが、動揺はしていない様子であった。

「...そうですね、色々ありますが、最近ネット通販を始めましてね...」

「...へえ、どういった物を販売しているんですか？」

「ほとんど高級なブランドものです、うちは元々貿易が専門なので、あらゆる品が流れてきます...特に人気があるのは宝飾品です」

「！！」

その時、リカたちは文也の発言に異常なほど食いついた。

「...その宝飾品というのは...何か特別なんですか？」

マミコが質問すると、文也はある方向に視線を送った。すると、長身のガタイのいいスーツ姿の男が現れた。

「...説明するよりも、実際に見てもらった方がいいでしょう...」

文也はスーツ姿の男に指示し、手に持っているアタッシュケースを開けさせると、中には、手のひらサイズのケースがいくつが入っていた。文也は、そのケースを二つ手に取り、リカたちは渡そうとした。

「...これは？」

「...開けてみて下さい」

不敵な笑みを浮かべる文也を気にしつつ、リカたちは、そっとケースを開けようとした。

「...！！」

ケースを開けると、中にはブローチが入っており、それには紫色に輝くダイヤが埋め込まれていた。

「それを差し上げましょう、お土産に持って帰って下さい...」

「.....え？いいんですか？こんな高価そうなもの...」

「はは、たいした物じゃありませんよ、それは粗品でして...実はご贋貨にしている先方の人間が急遽、今回のパーティーに出席出来なくなりまして、余ってしまったんです、あなた方が居て、丁度よかった...」

「...その先方にお渡しした方がいいのでは？」

「...お気になさらず、これは、直接来られた方にしかお渡ししません、僕は、あなたたちのことを気に入りました...どうぞ、受け取って下さい」

リカたちは、文也の厚意に感謝して、ブローチを受け取った。

「...本当に綺麗なダイヤですね、これも商品として扱っているんですか？」

「ええ、それはまだ安物です、値段は、ピンからキリまであるので、富裕層だけでなく、一般の方でも注文出来ますよ...」

「どうしてまたダイヤを？」

「...外国の友人に鉱山を所有している者がいましてね、新しいビジネスにつながると思い、数パーセント譲ってもらって、ネットで販売してるんですよ...お陰様で注文が殺到しています」

「何か秘策が？」

「...いえ、特にこれといったことはしていません、ただ、そのダイヤは最近発掘された新種のダイヤで、現地では驚くほど安い金額で取引されていましてね、しかし、何故か他国では幸運を招くダイヤと言われたりして、手にした企業家の会社の株価が急上昇したり、赤字続きだった会社が、一気に黒字に回復したりと、奇跡的なことがよく起こるみたいなんです、だから大手企業の社長や資産家がよく注文されます...」

「成程、縁起物のようなものですか、ハート形で可愛いですね」

「それを持っていれば、いいネタが舞い込んでくるかもしれませんよ...」

「そうですね、ほんと最近面白いネタがないもんで...」

「僕もこのダイヤのお蔭で、さらに人とのつながりが広まりました、`縁の雫、と言ってもいい...」

「縁の雫...！」

「...すみません、変なことを口にしてしまった...他に質問はありますか？」

「.....いえ、特には...そろそろお開きにしましょうか、どうもありがとうございました」

取材で用いた時間は、半時間ほどで、リカとマミコは、ホテルのロビーで文也と別れた。

「お土産を頂いた上に、奢って頂きありがとうございます...！」

「...いえいえ、こちらこそ楽しい時間を過ごせました、また機会があれば、お会いしましょう...それでは」

リカたちは、文也に会釈して去ろうとするが、あることを疑問に思っていた。それは文也の周りにはいる数人の部下についてである。

「...明らかに普通の社員じゃないね、まるで要人の護衛みたい、胸辺りが若干膨らんでいた...あれは銃を携帯している証拠...」

「...間違いなく、彼は警戒していますね、例のダイヤのことを話す時、顔が若干強張っていた...今夜で彼がどんな人物か分かりましたよ...ただのお坊ちゃんじゃない...」

「...それでこれからどうするの？」

「...私は、一旦、公安に戻ります、録音した内容をまとめて、提出しなければいけないので...あと、この土産も押収品としてね...それどうします？」

「せっかくもらったから大事に取っておくわ...別に問題ないでしょう？」

「...ええ、例え購入しても、購入者側は罰せられないので...」

「...とにかくこれで潜入捜査は終りね、何かいつもの捜査より疲れたわ...肩が凝っちゃって...」

「その衣装が原因ですか？ホント似合ってますよ...」

「...お世辞はいいわ、写真集の撮影の時も一度ドレス着たけど、何か恥ずかしくて...」

「そんなに恥ずかしがることはないと思いますが...退団すれば、着る機会が増えるかも...」

「...どうも退団っていわれても、実感湧かないな...いつも通り稽古してるわけだし...」

「...じわじわと感じるんじゃないですか？大事な時に呼び出してすみませんでした...家まで送るんで...」

「別に謝ることないけど、結構楽しかったし...あっちでうちの相棒に会ったら、死ねって伝えといてよ」

「...はい、了解しました」

マミコは、苦笑いを浮かべながら、車のエンジンを掛けて発進させた。

こうして、無事に潜入捜査を済ませたりカたちは、静かな夜の風を受けて、次の策を練っていた。

パーティーでの潜入捜査から二日過ぎ、リカはマミコに再度、大劇場近くの行きつけの喫茶店に呼び出された。

「...それで何か手掛かりが？」

リカは、特等席に腰を下ろし、コーヒーを注文した後、マミコに例のダイヤの件を訊ねた。

「はい、情報を入手しました、まず、ダイヤを密輸している人物が割れました...名前はハミル・サイン、表向きは、鉱山やエネルギー資源を所有している大富豪ですが、元々は過激派の一員でした、彼の付き合いの幅は広く、裏の世界にも精通、地元の軍警察は言いなりです...」

「...文也は、彼の経歴を承知して、犯罪に手を染めたわけね...」

「ええ...文也のことを調べたんですが、自信に満ちた発言をしている一方、どうも経営難に陥っているようで、兄弟で行っている事業も右肩下がり、それが原因で不仲説もあり、所有している競走馬が骨折と不幸が続いているみたいで...」

「...成程、それで嫌気がさし、犯罪に手を染めたわけね...」

「...密輸されているのは、ダイヤだけじゃないようで...貿易業で務めていることを逆手にとって、一般の輸入品に紛れさせて銃器も密輸しているようです...」

「...成程」

「銃器は、他国の場合、軍隊やテロリストに流れていますが、日本では、主に暴力団に流れていて、ネット経由でも販売されています...」

「...彼の部下が、銃を携帯していたのは何故？」

「...以前、不審者に誘拐されそうになったようで...狙いは、密輸している代物、不審者は、暴力団の若手組員で、逮捕されました...それで自分の身に危険を感じた彼は、用心棒を雇ったそうです...」

「彼は、完全にダークサイドに堕ちたようね、これ以上、野放しにしたら危険よ...」

「ええ、分かっています.....」

「...カラン」

その時、店の扉が開いて客かと思われたが、リカは、その客の姿を見て驚愕した。

その客の姿は、蝶ネクタイをつけて半ズボンを穿いて、英国探偵のトレードマークの鹿追帽を被っていた。その姿は小学生のようであったが、その正体は、れっきとした大人の女性であった。その謎の女性は、まっすぐリカたちがいる席へと向かった。

「.....突然失礼します、お伝えしたいことがありまして...」

その謎の女性は、マミコにそっと話し掛けた。どうやら部下のようであった。

「...え？知り合い？」

リカが仰天する中、謎の女性は、マミコに何やら耳打ちした。彼女は、聞きながら何度も頷き、目つきが鋭くなった。

「...よし、ご苦労」

マミコは、部下である女性から情報を聞きだし、内容をリカに話そうとした。

「どしたの？」

「.....公安からダイヤの件で連絡がありました、有力な情報が出揃ったんで捜査に踏み込むようです...急ですが今夜決行します...」

「...それじゃあ？」

「...文也を挙げます！」

ようやく決意が固まり、リカたちは真剣な眼差しでお互い目を合わせた。

「...ところで気になったんだけど、そちらはあなたの部下よね？」

「...ええ、私の忠実な部下でもあり、舞台の世界では可愛い後輩です、情報収集担当で若手ながら優秀です...ほら、自己紹介しな」

「...はい、ご挨拶が遅れました、私、ヒロカと申します、偉大なる先輩に会えて光栄です」

ヒロカは、礼儀正しくリカに挨拶した。リカは、ヒロカに魅かれているようであった。彼女の個性的なファッションスタイルに興味を持った。

「...あの普段もその恰好を？」

「...えっと、捜査をする時だけこの服装です」

「...そうなんだ」

「実は彼女が今着ている衣装は、以前、有料放送の企画で、探偵もののドラマをしまして、その時のなんです...」

マミコは、不思議な目でヒロカを見ているリカに、詳細を説明し始めた。

「...成程、探偵ものね、それにしても凝りすぎだと思うけど...日本にこんな探偵居ないよ...」

「...そうですけど、インパクトがあつた方がいいかと思ひまして...彼女は純粋な少年らしさがありますし...本人も気に入っているようですよ」

「はい、これを着ると気合入るんで、重宝しています！」

「まあ、似合ってるからいいんだけど...」

ヒロカは、リカたちに一礼し、その場を去って行った。リカは、ヒロカの姿が消えるまで目を離さなかった。リカの異変を感じたマミコは、そっと質問を投げかけた。

「あの...うちの部下に何か？」

「.....しいな」

「え？」

リカは、ぼそっと返事をしたので、マミコは訊き直そうとした。

「...欲しい、あの娘欲しいな〜」

「え？先輩何言ってんですか？」

「うちにもああいうお茶目な娘欲しいなと思って...うちの班は、でかいのが多いからね...」

「...確かに大きい人多いですね...私も以前、リカさんがいる班にお世話になったので...私は小柄な方なので、逆に目立ちました...いいじゃないですか、背が大きいのが特徴なのも.....」

「...でもね～やっぱりヒロカ君みたいな欲しいな～ねえ？頂戴！」

「駄目！あれは私の物！！」

マミコは、物欲しそうにしているリカに対して食い気味できつく返答した。それから時間が流れ、ついに運命の夜を迎えることとなった。

第二章 縁の雫編 第三話 砕かれる陰謀

ある夜、マミコは、リカの自宅マンション前で車を停めて待っていた。リカは指定された時間に現れて、彼女が乗り込むと、マミコはゆっくりと車を発進させた。

「...それで私たちは何処に？」

「...それなのですが、監視を続けて、ダイヤの運び屋の密航する日にち、時間帯が判明しました...取引現場も同じ場所、今夜全員を確保するつもりです...」

「じゃあ取引現場に向かうのね...？」

「...いえ、チームは二手に分かれました、取引現場にはヒロカと、その他歌劇団メンバー、地元の捜査員などが向かっています...我々は文也がいる会社の方に...」

「...私たちの手で彼を挙げるのね...！」

「ええ、我々のこと気に入ってくれたみたいなので、アポなしで驚かしてやりましょう...」

マミコは、車を運転しながらリカに捜査内容を説明し、父親の後継者として取締役を務める文也の貿易会社へと、車を走らせた。

神戸の煌びやかなネオン街を通過していき、文也の事務所は海岸通り（神戸港）に面しており、その一帯の建造物は歴史を感じるレトロな作りとなっていた。中でも文也の会社は、大正時代に建てられ、外観は、欧州の建造物のように石積み風で重厚に仕上げられている。会社の前に車を駐車して、リカたちは裏口に回らず、堂々と正面玄関から入ろうとした。一階には受付口があり、リカたちは、受付担当の人間を無視して、何食わぬ顔で先へと進もうとした。

「...ちょっとあなたたち何なんですか？アポは取っているんですか？」

当然のことながら、リカたちは、受付担当者呼び止められた。二人は、感情を表に出さず、柔軟な態度で応じようとした。

「...夜分遅くに失礼します、アポは取っていないんですが、白谷文也取締役にお会いしたいんです...」

まず、マミコが口を開いて、受付担当者に頼み込んだ。

「...会わせられません！まずあなた方が何者か名乗って頂かないと...アポも取っていないければ問題外です！」

受付担当者がきつく返答して、警備員が駆けつけるが、リカたちは、一向に退こうとしなかった。

「...私たちは、警察の者です、白谷氏を逮捕するためにやって来ました...！」

「え？」

マミコは捜査令状を差し出し、受付担当者は、突然のことに驚愕し、体が凍りついていた。

その頃、何も知らない文也は、応接室で客人を招いて取引を行っていた。取引相手は、数人の大柄のスーツ姿の男を従えて、どう見ても、堅気の仕事をしている人物ではなかった。

「...最近、随分と儲けているそうじゃないか...」

「...ええまあ...」

「...まさに幸運を呼ぶ石だな、私の方も石を手にした途端、持ち直してね...気分がいいんだ...」

「...それは良かった、こちらこそ礼を言わなければならない...頼もしい用心棒をつけてくれたので助かっています...！」

「君を拉致しようとした連中は、うちと敵対している組織の者なんでね...しっかりガードするから安心していい...敵が増える分、味方も増やした方がいいぞ」

「おっしゃる通りですね...これからもよろしくお願いします...」

良からぬことを企む二人であったが、取引の方は順調のようであった。

「...コンコン」

「？」

その時、突然、扉をノックする音がして、文也が応答すると、彼の側近の人間が入室してきた。

「...どうした？何か用か？」

文也が質問すると、側近は、深刻そうな顔で口を開こうとした。

「.....接客中に申し訳ありません、どうしても取締役にお会いしたいという方が訪ねて来られたので...」

「...アポを取っていないければ、会う暇などない！追い返せ！」

側近が困り果てた表情を浮かべると、彼の背後に二つの影が現れた。それは、リカたちであった。

「.....お忙しい時にすみません、緊急を要することなので、アポを取らずにやって来ました...お許し下さい」

マミコが礼儀よく文也に話し掛けると、彼は首を傾げた。

「...どちら様でしょうか？初対面かと思われませんが...」

「.....いいえ、一度お会いしています...先日程われたパーティーでね...お酒...ご馳走様でした...働いている時の姿を見たいと、おっしゃっていたので、ご要望通り訪れました...」

リカが近づくと、文也はあることに気づいた。彼女の上着の胸元を見ると、彼がプレゼントしたブローチがつけられていた。

「.....！まさか...あの時の記者か？」

文也は、今のリカたちの姿を見て、目が点になった。彼の前に立っているリカたちは、スーツ姿で薄化粧、明らかにパーティーの時と雰囲気が違っていた。

「ええ、こんな高価な物まで頂いちゃって...お世話様でした、ただ、このブローチは模造品でして...本物は押収しました、この模造品には、高性能小型カメラが内蔵されていて、映像は、うちの仲間のもとに送られています、あなたは、何十人もの人間に監視されている...」

「.....君は何を言ってるんだ？」

「...騙して申し訳ないですが、これも仕事のためです...」

「仕事のためって...君たちは何者なんだ？」

「.....警察...のようなものです...あなたを逮捕します...！」

マミコは、文也に捜査令状を見せて、本題に入ろうとしていた。

「...警察.....逮捕...？僕には何のことやらさっぱりだ...」

文也はとぼけ始めるが、顔色が悪くなっていき、明らかに動揺していた。

「もう証拠は揃っています、あなたは...ダイヤを非合法で売買している...犯した罪はそれだけじゃない...もう表の世界で商売出来ませんよ...！」

「...！！」

「...そちらは？」

リカは、取引相手の人間に興味を持ち、中心人物に何気なく話し掛けた。

「...私は.....！！」

取引相手の男は、先ほどまで胸を張って話していたが、リカたちが現れた途端に一変していた。動揺していたのは、文也だけではなかった。男はリカたちとあまり目を合わさなかった。

「.....何か取引されていたようですね、突然、お邪魔して悪いですが、ご理解下さい...差支えなければ、こういったご職業か教えてもらえますか？」

マミコは丁寧に質問するが、若干威圧的な雰囲気を漂わせた。

「.....重工業会社を経営している...」

男が職業を口にした途端、マミコは溜め息をつき、リカは呆れて、うすら笑みを浮かべた。彼の嘘は、すぐにばれた。

「.....失礼ながら、あなたは表の世界に相応しくない...訊きたいことが山ほどありそうですね...」

室内の空気が重たくなっていく中、リカは、机上に置かれている書類に目が入った。

「これは？契約書か何か？」

「.....それに触るな！！ボケ！！！」

リカが書類に触れようとすると、男は逆上して、怒鳴り散らした。

「！！」

男が怒鳴り散らしたのと同時に、周りの大柄の男は条件反射で、咄嗟に体が動いた。彼らは、備えている銃を抜こうと胸ポケットの内側に手を突っ込んだ。室内に居る者たちは、そのままの状態を維持し、不穏な空気が漂うのであった。

一方、こちらは、例の紛争ダイヤの取引が行われる現場となる港。派遣された歌劇団メンバーと捜査員は、配置について、標的が現れるのをじっと待っていた。

「もうすぐ時間だ...」

刻々と取引される時間が迫り、ヒロカは、緊張しながら腕時計を見ていた。彼らが張っている場所は、港の倉庫エリアで、その時間、使用されていないため、全く人氣がなく静かであった。しかし、数分後、動きがあり、その場は、一気に賑やかな空間に変化しようとしていた。

「...！」

その時、薄暗い道に人影が見え、張込班たちは密かに興奮していた。歌劇団メンバーは、すかさず、暗視ゴーグルで例の密売人かどうか、確認を取った。

「いかにも怪しい奴...手にアタッシュケースを持っている...間違いない！」

密売人を確認したヒロカたちは、まだ動こうとせず、取引相手が現れるのを待っていた。

「...！！」

すると、黒のBMWが一台、シルバーのメルセデスベンツ二台が現われ、密売人の前で停まった。車内からは、長身で恰幅のいいスーツ姿の男が続々と現れて、密売人に歩み寄ろうとした。密航者は、軽く会釈した後、持っているアタッシュケースを彼らに渡そうとした。

「ガチャン！！」

「...！！！！？」

その時、仕掛けられた照明装置が一斉に光を発し、標的を錯乱状態にさせた。

「あなたたちは完全に包囲されている！無駄な抵抗は止めて大人しく投稿しろ！！」

空を見ると、警察航空隊のヘリが飛んでおり、海を見ると、水上警察の警備艇が見張っていた。密売人と取引相手は抵抗せず、観念したようであった。

「...はいはい、もう悪いこと出来ないよ」

歌劇団メンバーは。地元の捜査員と共に、紛争ダイヤに関わる人物を確保していった。

「□○×▽？\$...□@&%“¥...！！」

密売人は、突然のことで感情が高ぶり、国の言語で叫び始めた。

「...通訳が要るね、ちゃんと事情を話せば、故郷に帰してあげるから...自分の国で裁きを受けてね～」

密売人に話し掛けたのは、歌劇団メンバーの一人のヒコトであった。彼女は、マミコ率いる劇団班の劇団員の一人で、中堅に位置する。自然体な演技が彼女の魅力の一つで、トップのマミコや仲間を、陰から支える役割を担っている。また、裏の世界でも彼女の実力は認められている。

ヒコトは密売人に手錠をして、ひとまず地元の警察署に連行しようとした。そして、残りの取引相手の方は、身体検査や身元照合を行った。

「...あれ？おたくら、例の坊ちゃんの社員じゃないんやね...随分と物騒なもん、持ち歩いているやん〜」

取引相手には文也の社員だけではなく、堅気でない人物が紛れ込んでいるようであった。

「...何かあんたらの顔、見覚えあるな...マリエさんはないですか？」

身体検査をしているのは、二人の歌劇団メンバーで、一人目の名前はマリエ。マミコ率いる班の劇団員の一人で、ヒコトと同じく中堅に位置する。元々は、リカが現在率いる班に配属されていたが、新しい風を呼び起こす素質があり、異動となった。彼女は個性豊かな存在で、また、容姿端麗で雰囲気がりカと似ていると、いわれるようになった。トーク力は同期のユズミと肩を並べるほどで、色んな意味で今後を期待されている。裏の世界ではトラップの名手として恐れられている。関西出身。

二人目の名は、アヤギ。マミコ率いる班の若手劇団員の一人である。マリエと同じく関西出身である。現代的な容姿で人気を博し、綺麗な顔立ちではあるが、こてこての関西弁を話すことから、そのギャップがファンにはたまらないようである。裏の世界でも実力を引き出していき、鍛錬を積んでいる。

「...ちょっとこれ見て下さい！」

大声で仲間呼び掛けたのは、若手劇団員の一人、サキであった、彼女はヒロカと同期で、一期先輩のアヤギと芸名が似ていて、名コンビとして、注目を浴びることとなった。彼女は、少年のような純粋な心を持ち、正義感が強く、裏の世界でも逞しく活動している。

「.....うわ、すご...！えらい金額になるわ！」

次に大声で関西弁を発したのは、歌劇団中堅スターに位置するシエルであった。さわやかな容姿が印象的で、徐々に実力を高めていく中、主に男役を務めていた彼女は、娘役に転向することとなった。それにより芸の幅が広がり、今後も期待される。同班のマリエとは同期である。裏稼業では潜入捜査を任され、変装してスパイ活動を行っている。男性から女性まで見事に変装出来るのは、本業である舞台の仕事が大いに活かされることと解釈される。

密売人が持っていたアタッシュケースの中には、数えきれないほどのダイヤが入っていた。それを目にした歌劇団メンバーたちは、開いた口が塞がらなかった。

「...今までの中で一番量が多いですね...味を占めてエスカレートしていったんですかね...？」

そう言い放ったのはメンバーの中で一番学年が低い、レイコという劇団員であった。素朴な感じではあるが、和風の色気が舞台上際立ち、彼女の確かな演技力に多くのファンが魅了されている。周りからは、元トップスターのエリに似ていると言われ、偶然にも、エリの演じた役を新人の公演で演じることとなった。裏稼業でもエリにみっちり教育され、彼女が得意とする剣術を伝授されることとなった。

「レイコの言う通り、調子に乗り過ぎたような、私らみたいなもん目をつけられたら、もう終わりや」

マリエは、格好よく締めようとするが、他のメンバーたちは、何故か半笑いであった。

「...とにかく、犯人を挙げることが出来てよかった...皆さんお疲れ様でした...！」

今回、指揮を任されたヒロカは、仲間たちに深々と頭を下げた。

「...ヒロカちゃんもよく頑張ったね、いい働きをしたと思うよ、マミコさんも喜ぶよ、きつと...！」

「...そうや、褒めてくれるて！」

ヒコトとシエルは、ヒロカの肩を軽く叩き、暖かい言葉を送った。他のメンバーも同じ気持ちであった。

「...さて！事件も無事に解決したし、お祝いに何か食べにいこか～」

「マリエさん、何言ってるんですか！まだマミコさんの方、片付いていませんよ...」

ヒコトは、楽天的なマリエに対し、先生のように注意した。

「大丈夫やろ...リカさんも居てることやし...もう片付くで...私らは、先に退散させてもらおう～いつもの焼肉屋、予約しているから～」

「...緊張感がなさすぎるな...」

ヒコトは、呆れた表情を浮かべ、マリエたちについて行った。

「？」

歌劇団メンバーが現場から去って行く中、ヒロカだけ何故か去ろうとしなかった。それにレイコだけが気づいていた。

「...ヒロカさん、どうしたんですか？一緒に行かないんですか？」

「.....もう少し、現場が落ち着いてからにするわ、やっぱりマミコさんのことが気になるし...先に行ってて...」

ヒロカは、指揮官としての仕事を果たそうとし、レイコは、彼女の姿勢に心打たれたようであった。

「...私も残っていいですか？」

「え?...いいけど」

ヒロカは、レイコの思いがけない発言に驚愕したが、同時に嬉しさが込み上げていたようであった。ヒロカとレイコは、マミコたちの無事を祈っていた。

一方、リカとマミコは、銃を備えた男たちに囲まれていた。膠着状態が続いているようだが、どうも様子がおかしかった。

「.....やっと本性を現しましたね、あなたの部下は、私たちに何をしようとしているのか.....想像はつきますが...」

「.....今、手にしている物を出したければ、出せばいいわ...そうすると、この綺麗な部屋が一瞬で汚れることになる...可愛い部下を失いたくないでしょう...？」

「.....！！」

大柄の男たちは、リカに脅され、ハツタリではないことを悟って怯んでいた。

「.....うちの負けのようだな、抜かずに手を出せ、死にたいのか？」

大柄の男たちは、やむを得なく謎の男の命令に従った。

「...あなたの顔、どこかで見たことある...幹部クラスといったところでしょうか？」

謎の男の正体は、関西圏を牛耳る暴力団組織`金龍組、の幹部であった。

「.....迂闊だった、ここで鉢合わせするとは...悪運尽きたようだな...石の効果が消えた...」

「.....」

金龍組幹部は、頭を抱えて文也に話し掛けた。文也は、今の状況について行けずにいた。

「...成程、大量に銃器を買い込んでいるようね...さらにこれが世間に出回るわけか...」

リカは契約書に目を通して、傍に置いてあるジュラルミンケースの中を調べた。ケースを開けると、億単位の大金が入っていた。

「...これでまた一つ、事件が片付きそうだ、あなたたちもご同行願います...」

金龍組幹部は、観念して、マミコの指示に従った。そして、二人は、文也に目を向けた。

「...さて、少し話が横道に逸れましたが、あくまで標的はあなたです...罪を認めますね？」

マミコの問いに対し、文也は、言葉が出ず顔が引きつっていた。

「...♪」

その時、マミコの専用スマートフォンに着信が入り、彼女はすぐに応答した。電話してきたのは、後輩のヒロカであった。

「.....うん、分かった、ご苦労...待っというて」

マミコは、内容を聴き取って、すぐに電話を切った。

「...あっちは片付いたの？」

「ええ、全員確保して連行されました...」

「.....おい...どういうことだ？」

文也はリカたちの会話を疑問に思い、つい声を発した。

「...今の電話はうちの部下からでして、神戸港でダイヤの運び屋と、その取引相手を捕まえましてね...あなたの知り合いかと思いますが...」

文也は、不運続きに見舞われて、そのショックで思わず地に膝をついた。彼は氣力を失った。

しばらくすると、文也の会社の前に数台のパトカーが停まり、金龍組の組員を含め、文也他、密売ダイヤに関連している社員は、全員連行された。おまけに脱税の疑いがあり、地検も捜査で現れて、その夜は、明るく賑やかであった。

リカたちは、後のことを地元警察に任せて家路に着こうとしていた。リカは、マミコの愛車で家まで送ってもらっていた。

「...今回は楽な仕事だったね～」

「...ええ、スピード解決でした...案外、このコンビいいかもしれないですね...？」

「...自分で言う？私たいして働いてないけど、なんか疲れたよ～」

「リカさんが居て、助かりました、一人じゃドレス着て歩けませんから...」

「次、そういう仕事あったら断るからね...！」

「本当に似合っていましたよ、今度娘役やってみれば？」

「...本気で怒るよ！」

マミコは、先輩であるリカを思い存分、からかった。車内は、和やかな雰囲気になり、気づけば、リカの自宅マンションの前であった。

「...お疲れ様でした、こっちの仕事は片付いたんで、大事な公演に備えて下さい」

「ありがとう、心置きなく集中出来るわ、また、イベントとかで会えるわね、その時はよろしく！」

「こちらこそ...それではお休みなさい」

リカたちは、笑顔で握手を交して別れた。

時間は深夜、リカはベッドの上で胡坐をかき、退団公演となる台本に目を通し、イメージを膨らませていた。それは一時間近くほど続くが、リカは眠気に襲われ、キリのいいところで、台本を覚えるのを止めて眠ろうとした。

やがて空が明るくなっていき、朝を迎えた。今朝の朝刊には、文也の事件のことが載っており、ニュースでも大きく取り上げられた。しかし、リカたちのことは、どの新聞にも載っておらず、地元警察の手柄となっていた。彼女たちは、あくまで影の存在で、正体は一部の者しか知らない。任務が完了すれば、彼女たちは、自然と舞台の世界へと溶け込むのであった。

リカは、解決した事件に目もくれず、気持ちよさそうに寝ていた。

時は流れて、その日はリカが出演する公演の初日であった。彼女は寝坊せず、大劇場へと向かった。事務所側の出入り口付近には、鼯の劇団員の姿を見ようと、ファンが殺到していた。この光景が名物の入り待ちである。

リカが颯爽とパンツスタイルでファンの前に現れて、応援の言葉をもらった彼女は、キザに手を振って中に入って行った。こうして、リカの最後の舞台の幕が開かれようとしていた。

第二章 縁の零編 完

鳳の眼 化の章

<http://p.booklog.jp/book/99197>

著者 : iwaiwa01663856

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/iwaiwa01663856/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/99197>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/99197>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブックログ